# 螢雪

## 閑課程 18 周年記念文集

山形県立山形東高等学校夜間部同窓会

# 目　次

林部徳司　画

## 羽前の三山


校歌…… 2
深瀬守巨（昭和 29 年卒） …… 6
佐藤俊一（山形東高 44 代校長） …… 7
菅間裕晃（山形東高 43 代校長） …… 8
山川博史（山形東高 35 代校長） …… 9
日野顕正（山形東高 33 代校長） …… 10
結城嘉美（山形東高元教員）…… 11
谷　壮蔵（山形東高元教頭）…… 14
木村芳三郎（山形東高 22 代校長） … 15
金子淳子（山形東高元教員）…… 16
鈴木良助（元山形東高夜間部同窓会長）… 17
日刊スポーツ…… 18
小林義和（山中・山東東京同窓会 12 代会長） … 20
遠藤雅晴（山中・山東東京同窓会相談役）… 21
高橋　聖（山中・山東東京同窓会 13 代会長） … 22
羽柴　茂（山中・山東東京同窓会相談役）… 23
佐藤憲一（山中・山東東京同窓会 14 代会長） … 24
伊藤信彦（山中・山東東京同窓会相談役）… 25
板垣信幸（元ＮＨＫ解説委員）…… 26
金井浩一郎（山中・山東同窓会 15 代会長）…… 27
槙たか子（山中・山東東京同窓会副会長）… 27
佐藤佳代子（伊藤辰雄先生長女）…… 28
木嶋正吾（多摩美大教授）…… 29


## 健児の幾千


木村良夫（昭和 25 年卒） …… 35
後藤敏男（昭和 25 年卒） …… 36
江口佐一郎（昭和 27 年卒） …… 37
寒河江實（昭和 27 年卒） …… 38,39
尾形武志（昭和 28 年卒） …… 40
鹿納幸三（昭和 28 年卒） …… 41
齋藤一英（昭和 28 年卒） …… 41
鈴木　諄（昭和 28 年卒） …… 42
鈴木良助（昭和 28 年卒） …… 43
柳元清三（昭和 28 年卒） …… 44
阿賀加代子（昭和 29 年卒） …… 45
菊地徳治（昭和 29 年卒） …… 45
佐藤喜久蔵（昭和 29 年卒） …… 46
高橋昌孝（昭和 29 年卒） …… 47
中川幸信（昭和 29 年卒） …… 48
深瀬せつ（昭和 29 年卒） …… 49
深瀬守巨（昭和 29 年卒） …… 50
渡辺長一郎（昭和 29 年卒） …… 52,53
吉田良吉（昭和 29 年卒） …… 55
石澤ハルノ（昭和 31 年卒） …… 56
遠藤光義（昭和 32 年卒） …… 57
工藤昇二（昭和 32 年卒） …… 58
車谷久幸（昭和 32 年卒） …… 58
平岡健志（昭和 32 年卒） …… 60
林　正邦（昭和 33 年卒） …… 61
原田善次郎（昭和 33 年卒） …… 62
井上道夫（昭和 33 年卒） …… 62
遠藤久一（昭和 34 年卒） …… 63
小笠原　毅（昭和 34 年卒） …… 63
高橋幸雄（昭和 34 年卒） …… 64
武田信也（昭和 34 年卒） …… 67
丹野弘三（昭和 34 年卒） …… 67
船山恒（昭和 34 年卒） …… 69
峯田正（昭和 34 年卒） …… 70
安孫子市郎（昭和 34 年卒） …… 71
松田哲夫（昭和 34 年卒） …… 72
松田満雄（昭和 34 年卒） …… 73
吉葉清子（昭和 34 年卒） …… 74
石山紀雄（昭和 35 年卒） …… 75
浦山重則（昭和 35 年卒） …… 76
鹿野悦弘（昭和 35 年卒） …… 77
黒沼浩（昭和 35 年卒） …… 77
齊藤伺子（昭和 35 年卒） …… 78
設楽五兵衛（昭和 35 年卒） …… 78
鈴木和彦（昭和 35 年卒） …… 79
田中信一（昭和 35 年卒） …… 80
月井濵明（昭和 35 年卒） …… 82
長岡正昭（昭和 35 年卒） …… 83
中山良弘（昭和 35 年卒） …… 84,86
森谷秀幸（昭和 35 年卒） …… 87
吉田誠治（昭和 35 年卒） …… 89
池田康子（昭和 36 年卒） …… 90
伊藤芙美子（昭和 36 年卒） …… 91
井上健一（昭和 36 年卒） …… 92
寺崎文雄（昭和 36 年卒） …… 92
渋谷忠雄（昭和 36 年卒） …… 93
手塚公夫（昭和 37 年卒） …… 94
熊澤コト（昭和 38 年卒） …… 94
伊藤由巳（昭和 38 年卒） …… 95
佐藤忠男（昭和 39 年卒） …… 96
斎藤照雄（昭和 41 年卒） …… 97
寒河江政好（昭和 41 年卒） …… 97
田中憲一（昭和 41 年卒） …… 98
斎藤武弘（昭和 42 年卒） …… 99
後藤勝義（昭和 42 年卒） …… 100,101
林谷静子（昭和 42 年卒） …… 102
滝田健司（昭和 42 年卒） …… 104
菅野幸治（昭和 43 年卒） …… 105
田中育子（昭和 43 年卒） …… 105
田中政人（昭和 43 年卒） …… 106
星明広（昭和 43 年卒） …… 106
松田信道（昭和 43 年卒） …… 107
板花孝幸（昭和 45 年卒） …… 107
小梁川三枝子（昭和 49 年卒） …… 108
西田恵美子（昭和 50 年卒） …… 109
井上信彦（昭和 58 年卒） …… 110
安斎富久男（通信教育昭和 36 年卒）110
児玉吉弘（通信教育昭和 32 年卒） 111


## ああ我が紅顔


**思い出写真他**

## 山形県立山形東高校校歌

土井晩翠　作詞
中田　章　作曲

一、
羽前の三山虚空を凌ぐ
偉大の姿は無言の教へ
霊ある呼吸はわが胸充たし
理想の高きを仰げと宣す

二、
健児の幾千はぐくみ来る
山形東高誉れの歴史
来たるをつづけて遠きにいたし
不朽の勲を残さん世々に

三、
ああ我が紅顔未来の光
望みに溢れて日夜に進み
業成るあした雙の肩に
国家の運命をしく負はむ

## 山形県立山形夜間中学校校歌

土井晩翠　作詞
梁田　貞　作曲

一、
真昼は人生　実務の上に
夜間は修養　教の園に
数百の健児ら　思を一つ
心身ひとしく　磨かん練らん

二、
「艱難汝を　玉成せしむ」
千古に揺るがぬ　尊き言葉
数百の健児ら　心に占めて
向上無窮の　道をぞ辿る

三、
高山虚空に　聳ゆるところ
清流巨海に馳せ行くところ
数百の健児ら　理想に常に
憧れ使命の　重きを思ふ



## 山形東高等学校夜間部生徒歌

（昭和27年卒）高橋喜久雄　作詞
朝一　庸　作曲

一、
こまくさ萌ゆる
蔵王嶺に曙の雲たゆたいて
春訪ずるる紅の
希望の光仰ぐかな

二、
古き歴史の輝きは
知恵の扉を彩りて
ここ山形のひんがしに
その名も高き我が母校

三、
弦月窓に冴ゆるとき
銀漢はるか仰ぎては
友情あつき団欒の
うたくちずさむ我が集い

四、
世紀の風はすさぶとも
高きイデアを求めては
学びの窓に誓いする
熱き思いを誰が知るや

## 奨学寮「寮　歌」

（昭和38年卒）安藤正弘　作詞
阿部昌司　作曲

一、
未来を誓う朋友と
精根つくすこの身体
ああ純情の頬紅く
朝風かおる寮の窓

二、
夜は不断のともしびに
ひたすら学ぶ若き日の
真理をめざすこの精神
ああ垣なせる玉椿

三、
われら自律の人生を
もとめて進む血は熱く
理想を仰ぐこの生命
ああ四方の峯うるわしく

# 羽前の三山

# 文集について

代表　**深瀬　守巨**

平成24、5年頃　山形東高を訪問した際、同窓会本部の方から、生徒も担任の先生もいない状況で、夜間部関係の資料は十分に整理されていないので、このまま放置すれば雲散霧消する恐れがあるとの指摘をうけました。このことを憂慮した有志で貴重な資料等の保存活動をすることとしました。

これにより、今までに「創立50周年記念誌」「閉課程記念誌　蛍雪」「同窓会名簿」等の復刻さらに「卒業記念アルバム」「校歌等を収録したCD」等新たに作成もしてきました。

山形東高夜間部も平成11年の閉課程後20年近くになり、同窓生の減少、さらに高齢化等もあり、ともすれば忘却のかなたに流れ、夜間部自体の存在すら人々の記憶から消えることを憂慮するものです。

今回の文集作成は、当時の若き勤労青年達が、その多くは、厳しい環境のなかで昼は働きながら、夜は学業、部活に勤しんだ山形東高の4年間、何を思い、どう生きてきたかを記録し後世に残そうとしたものです。一読していただき勤労夜間生に対し、より一層理解が深まることを願ってやみません。またこの文集が山形の教育の向上に少しでも役立つことを願っております。

今回の文集作成に関して、母校山形東高からは佐藤俊一校長先生をはじめ多くの先生方から寄稿して頂き誠に有難うございました。また東高昼間部東京同窓会からも金井浩一郎会長はじめ、通信制からも他多くの方々から寄稿して頂き、深く感謝申し上げます。

記

文集発行有志一同

後藤　敏男　江口佐一郎　鹿納　幸三
深瀬　せつ　深瀬　守巨　吉田　良吉
渡辺長一郎　安孫子市郎　丹野　弘三
中村　浩三　中山　良弘　伊藤　由巳
堀井　恵治　滝田　健司　後藤　勝義
庄司　恵美

代表　　深瀬　守巨　　(090-1703-4704)

(平成30年11月)

(この文集には、「創立50周年記念誌」等から一部転載させて頂きました。これら記念誌等に携われた方々に深い敬意を表します。)

佐藤俊一校長と



# 「文集」の発刊に寄せて

**山形県立山形東高等学校第44代校長 佐藤 俊一**

夜間部同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。このたびは、「文集」の発刊が実現の運びとなり誠におめでとうございます。

本校夜間部・定時制は、大正15年に山形夜間中学が開校したことに端を発し、昭和18年本校移管（夜間部となる）、25年に定時制の課程と名称が変わり、平成９年に霞城学園高等学校定時制の課程にバトンタッチするに至るまで、74年の長きにわたり、勤労青年の学びの場として、多くの意欲のある有為な若者を育成してまいりました。

この間の、卒業生の皆さんの貴重な体験や思いをしっかりと記録としてとどめ、後世に語り継いでいくことは大変意義深いことであり心から敬意を表するものであります。

校長室には、昭和30年代の夜間部の生徒会雑誌が何冊かあり、私はしばらくの間全日制の生徒会雑誌と勘違いして読んでおりました。それほどまでに、当時の夜間部の生徒会活動や部活動が活発であったことに驚きを禁じ得ません。特に文化部の最初にとり上げられている音楽部の活動状況は圧巻です。部員が42人もおり県大会で3位に入賞（もちろん他の全日制高校と競った結果です。）、夜学生として初の東北大会に進み、男子はお寺の講堂、女子は福島大学の女子寮に泊まった旨の記載があります。そして見事優秀校２校の内の１校に選ばれたということです。毎日夜10時ころまで練習し、その後も部員同士で入賞するためにはどうしたらよいか話し合っていたようです。仕事や授業の疲れも相当のものであったでしょうに、当時の夜間部の生徒たちの努力には誠に頭の下がる思いです。現在の高校生たちにも是非聞かせてあげたいエピソードです。詩や創作なども綴られており、青年期の溢れんばかりの内面の吐露には、心打たれるものがあります。

現在、定時制の課程は、時代の変遷とともに、勤労青年の学びの場から生徒の多様なニーズに対応した学びの場に変わりつつあります。しかし、この「文集」に記された、昭和から平成にかけてのまさに激動の時代、働きながら学んだ若者たちの着実な足跡が、今の日本人が忘れかけている何かを再発見するきっかけになってくれることを心から祈念しております。

金子先生が好きだった中庭

# 山形東高等学校夜間部同窓会「文集」発刊によせて

山形県立山形東高等学校第43代校長 **菅間 裕晃**

先日、蛍雪会の中山さんが見えられ、１枚の新聞記事を見せてくださいました。それは今年10月に90歳でお亡くなりになられた、夜間部昭和24年の卒業生で彫刻家の吾妻謙治郎さんに関する追悼の記事でした。

記事によると、吾妻さんは大正15年山形市に生まれ、特攻隊に志願、終戦後山形に戻り「高校を卒業していないことが分かって、20歳で夜間部に入学」24歳で東京芸術大学彫刻科に入学、大学４年のときに新制作展で初入選し芸大を首席卒業後30歳でイタリア政府給費留学生として国立ブレラ美術学校に入学され、卒業後はイタリアで創作活動を続けられ数々の賞を受賞、ミラノの名誉市民として尊敬を集めたとありました。記事は、「勇気を持って多難な人生に挑み続けた偉大な彫刻家の冥福を祈りたい。」と締めくくられておりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

同じ高校で青春時代を過ごした思い出はとても不思議な力を持っているように感じます。久しぶりに同窓会であったのに何十年も前の話が何の違和感もなくできる。学年は違ってもお世話になった名物先生の話でどっと盛り上がる。昨年11月にお招きいただいた東京支部総会はそんな感を一層強くさせてくれた楽しい会でした。

また、四谷の会場は私が以前校長を務めた酒田市立酒田中央高校の東京支部の会場と全く同じ部屋で大変懐かしい会場でもありました。何より二つの会の雰囲気がとても似ていると感じました。どちらもふるさとを離れているということだけでなく、皆さんがとても楽しく充実した高校時代を過ごし、母校を大切に思っておられることが、その会から伝わってきました。今後ともますます楽しい会を継続していただきたいと思います。

定時制50周年記念誌を拝見すると、蛍雪会の皆さんが、冒頭に触れた吾妻さんのように、それぞれの環境は違っても、志を持ちながら充実した青春時代を本校でお過ごしになったことが伺えます。50年誌には日中の勤務を終えて急いで学校に向かわれたことや、厳しい勤労生活との両立の中で、入学後かなりの方が就学をあきらめざるを得なかったこと。そういった中にあっても学ぶ喜びを感じながら、一日も休まずに皆勤賞を手にされた方が何人もおられるほど勉学に対する意欲が高かったこと、限られた時間の中で部活動にも取り組まれ、好成績を残すなど文武両道に励まれたことなど、多くの方が異口同音に、必死に駆け抜けた４年間を振り返っておられます。大正15年に山形夜間中学として創設以来、昭和40年代まで一貫して高い志願倍率であったのも皆様が充実した学校生活を送られていたからだと感じました。今回「貴重な体験」を記念の文集に残されるということをお聞きし、そういった思いを一層強くいたしました。それぞれの方が本校で過ごされた４年間の記録が、懐かしい思い出とともに永く記録されることを祈念いたします。

正面玄関の像（昭和 59 年寄贈昭和 24 年吾妻兼治郎）



# 定時制の課程を閉じるにあたって

第35代校長 **山川 博史**

山形県立山形東高等学校定時制の課程は、平成12年３月末で、75年にわたる長い歴史を閉じることになりました。本課程が果たしてきた定時制教育の役割は、本県初の単位制高校として平成9年度に開校した霞城学園高等学校に完全に引き継ぐことになります。県教育委員会はじめ関係各方面には、長い間、温かいご指導・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本校定時制の課程の前身である「山形夜間中学」が呱呱の声を上げたのは、大正15年５月のことであります。当時、青少年の中には、昼間は勤労に従事しながら勉学に志す者が多かったことから、山形市教育会が、本県では初めての夜間中学を当時の山形県立山形中学構内に開設しました。この夜間中学開設が、いかに当時の人々に待ち望まれたことか。それは、「山形夜間中学　生徒数を三倍に変更　志願多数の為」という当時の新聞見出しからもうかがえます。結局、第１回の入学者は156名に達しました。向学心に燃えた青少年の喜びの声が、時を超えて伝わってくるような気がします。

「山形夜間中学」は、昭和８年に「山形県立」の認可を受け、卒業生は、ようやく昼の中学校と同等の資格を得ることになりました。その後、昭和18年には山形中学校と合併して、山形中学校夜間課程」となりました。

昭和23年には、戦後の学制改革により、校名を「山形県立山形第一高等学校夜間課程」と、さらに、昭和25年には「山形東高等学校定時制の課程」と改称し、今日に至っております。この間、昭和45年から平成５年まで、普通科に加えて、技能連携による衛生看護学科が設置された時期もありました。

本校が、これまで世に送り出した卒業生は5,900名を超え、各界各層で全国的に活躍しております。本校をこれまで支えてくださった関係各方面に対し、改めて御礼申し上げます。

本校の歴史を振り返ってみますと、本校には、建学の精神である「不撓不屈」の精神が今日まで脈々と伝えられていることを感じます。いかなる困難にあってもくじけず、勉学と勤労の両立に努めた気概は、崇高であり、大いに称えるべきです。

歴史と伝統のある本校定時制の課程を閉じることの寂しさは言葉では言い表せませんが、これまで本校を支えてくださった多くの方々の思いに応えるためにも、生徒と教職員が一体となって有終の美を飾ることができるよう努めるつもりです。

本校で学ぶ生徒が守り続けてきた「不撓不屈」の灯が、新生霞城学園高等学校にしっかりと引き継がれ、いつまでも輝き続けることを祈り、あいさつといたします。

（蛍雪より）

「ガウンの女」鏡恒夫（昭和 30 年卒）

# 校歌の「羽前の三山」について

第33代山形東高等学校長 **日野顕正**

終戦翌年の昭和21年、旧制山形中学に入学し校歌を習った時、「羽前の三山は出羽三山のこと」「出羽三山は月山、湯殿山、羽黒山」と聞いて、おかしいと思った。月山はいいとして、湯殿山は山形方面から見て、月山の左裾にちょっと見えるだけだし、羽黒山は山の彼方の低山で全然見えないからである。

2年後山形中学は山形一高になり、さらに2年後山形東高になったが、校歌は継承された。ただ歌詞2番の「山形中学」の部分を「山形トウコウ」と略称で歌うようになったのに強い違和感を覚えた。それは今も変わらない。

さて羽前の三山が何々をさすか、その後も同級会などで論を交えてきたが、平成25年、東京の同級会でまた問題になり、私は70年来の疑問の結論を出すよう迫られたのである。

村山盆地周辺には蔵王、月山、朝日連峰等々の名山が連なり、山並みの眺望がよい。「虚空を凌ぐ」「偉大の姿」の歌詞は、これら名峰、連山全体のイメージから生まれたのではないかと長年考えてきた。

一方で、土井晩翠は山形に来て、山形盆地の山並みを実際に見たのか、という疑問が生じ、確認する必要に迫られた。

そこで校歌制定前後の「山形中学校共同会雑誌」を見たが全然その形跡がない。晩翠の日記がないかと県立図書館、仙台文学館、国立国会図書館に当たったが、どこにもなかった。

晩翠は当時40歳、文名天下に轟く詩人で二高教授。来形したら地元紙に当然記事があるはずと、山形新聞社の読者センターに検索してもらったが、晩翠の来形はずっと後の昭和15年と21年しかなかった。

晩翠は山形を訪れることなしに本校の校歌を作詞したのである

仙台の晩翠草堂の管理者菊地昭夫氏によると、晩翠の作った校歌は310校を超え、その範囲は旧大日本帝国の版図、樺太、朝鮮、台湾、さらには満州やブラジル・サンパウロにまで及ぶという。一々その地を訪れているはずがない。氏の母校岩手県立黒沢尻工業高校（北上市）の校歌の出だしは、実際には見えない「和賀岳を仰ぐ」となっているという。

平成27年、中公新書で鈴木将崇著「山岳信仰」が新刊された。その中で「出羽三山の呼称は昭和初期に研究者が使い始めた新しい用語で、それ以前は『三山』や『奥の三山』と呼ばれていた」と述べられている。

すぐ手元の吉川弘文館「国史大辞典」を開いてみた（第9巻）。すると出羽三山は「江戸時代には奥の三山、明治以降は羽前の三山という。出羽三山と呼ぶのは昭和以降のようである」とあるではないか。

大正13年の校歌制定当時は、まだ「出羽三山」ではなく、「羽前の三山」だったのである。晩翠の造語ではなかったのだ。

生粋の仙台人である晩翠にとって、蔵王は山形よりも宮城県の山であったはず。山形に来たことがなかった晩翠だから、朝日連峰等は関心の外だったのではないか。山形と言えば思い浮かぶのは「羽前の三山」だったのであろう。

大正13年当時の呼称が「出羽三山」であったら、歌詞には用い得なかったであろう。「羽前の三山」だから詩人の感性に応え得たのである。

本校校歌の冒頭句が、蔵王、月山、朝日など特定の山の名称でなくてよかった。ある意味、抽象化されたこの山名が、本校校歌の気宇広大さと品位とを決定づけていると思う。

# 記念講演「山形夜間中学創設当時の思い出」

旧教員 **結城 嘉美**

ご紹介にあずかりました旧職員の一人の結城でございます。しかしこの山形県立山形東高等学校定時制の看板をかけた時には、もうこの学校を去っておりました。従ってそれ以前時代の教員で、大正十五年の開校のとき任命された一人でありました。

その時の校長先生は木幡忠という大校長でありまして、教頭は吉川種正先生、その次が谷壮蔵先生で、他十二、三名の先生が兼務で授業を受け持ったのであります。当時の先生はほとんど物故されてしまいました。

その時私は、山形中学校の教壇にたってから丸一年たっていましたが、何しろまだ二十二才の青二才でありまして、この夜間中学発足に際しての数々のご苦労については余り関知しておりません。しかし谷先生が寄宿舎の舎監長で私も舎監でありました関係上いろいろと苦労話を聞かされた記憶はあります。

この山形夜間中学の設置者は山形市教育会という一つの団体でありましたが、実際にはこの谷先生達が懸命なご努力をなされた賜物ではなかったかと思います。当時のことは四月九日の職員会議で説明を聞き「君も教室に出るんだよ。」といわれた情景が、おぼろげながら記憶に浮かんでくる位なものですが、大正十五年の日記を出してみましたら、五月一日の開校式のことについては次のように書いてありました。「開校式、清水内務部長が見えて祝辞を述べられました。これに感動したり反感をおぼえたりした。」何の感動か何が反感かも思い出せませんが、さすがに若かった自分が顧みられる一行であります。そして五月七日の金曜日が私の授業はじめで、その日の日記には「夜間中学にはじめて出た甲組のえらい顔ぶれにはさすがにドギマギしたが、四十五分長広舌をふるい我ながらホッとした。」

当時の学級は甲組と乙組の二組ではなかったかと思います。その時の生徒さんはみな働いておられ、中には一人前の社会人である相当年輩の方もたくさんおりました。警察官もおりましたし、連隊の下士官で伍長、軍曹までが一年生に入ってきておりました。こうした顔振れの前に立った若い教師の心境がドギマギという表現となったものでしょう。私は植物を教えたわけでありますが、授業を終えて帰りに生徒と肩を並べて校門を出ましたが、あるとき「先生は、俺たちより若いんでネーガ」といわれたことがありました。

その頃、先生は一時間出ますと出勤簿に一つ判をおしまして、月末には判一つが一円の割で手当てが支給されましたが、これは本を買うよい財源となり、なお余りが出るという時世でありました。しかし学校を運営する側では経理上そのほか並大抵の苦労ではなかったかと今にして思い起こされるのであります。

さて、当時の社会の情勢をお話ししませんと皆さんには判りかねるかと思いますが、当時は小学校六年で大部分の者は学校教育を終了したものでした。私の場合も村の小学校の同級五十名ばかりを見ましてもほとんどはその上の学校へはいきませんでした。その上の学校となりますと、中学校、農学校などがありましたが、これらの学校に進学する者はごくごく稀で、１－２割の者は小学校の高等科というところで二年間勉強を続けるのが関の山でありました。私も隣の町の高等科に入りましたが、それからは通学可能というところで村山農学校に入ることが許されましたが、私の村からは私と地主の息子さんの二人だけでありました。山形市周辺でも大体同様であったと思います。小学校だけで家業をつぐもの、職人の弟子入りをするもの、商店の小僧にやられたり官庁の給仕になる者などであったわけであります。

ところで、こうした少年の中には何とかして勉強を続けたい、学校卒業の資格をとりたいという切実な悩みをもつ者が多かったわけであります。こういう少年に勉学の機会を与えようと設置されたのがわが山形夜間中学なのであります。高等学校進学率九十何％という今の時世からは全く想像もつかない当時の社会情勢でありました。向学心に燃え、また十分な能力がありながら家庭事情、とくに経済上から進学ができ

なかったのが、働きながら入学することができたわけで当時の生徒は、魚が水を得たたとえのとおり、その意気込みはまた大変なものでありました。

ところが、この夜間中学も、昭和八年に県立となりましたが、それまでは四年間在学しても中学校を卒業したという資格は与えられず、何の学歴にもならなかったのであります。

たゞ勉強したというだけのもので、更に上級の学校に進む受験の資格はなし、官庁の職員採用の資格もなかったのであります。それが幸いにして立派な卒業生を送り出している実績が認められ中学校同等の資格が与えられることになりました。

しかし、私にとって思い出深いのはむしろ資格が与えられない時代であって、教室での真剣な学習態度が忘れることができません。当時中学校から進む学校に山形高等学校がありました。高等学校を出なければ大学には入れません。その高等学校の受験資格を得るためには検定試験の制度がありました。これを高検といって中学四年終了の学力が試されましたが、さらに専門学校に入るには専検といって中学校全科目をまず通らなければならなかったのです。当時の生徒諸君は在学中からこれにいどんだわけであります。ここにおられる第一回のご卒業の同窓会長生駒さんなどもその一人であります。いつか第二回卒業生の同窓会で「先生から習う前に覚えたもんだ。」との自慢話が出ましたが、そのとおりであったと思います。

私は今日の学校のように安易に卒業証書がもらえるという学校制度には反省しなければならないものがあると常々考えているのであります。学校とは「卒業するところであり、勉強するところではない。」などと冗談も言っておりますが学歴ということをあまりに重視する社会通念が横行しているのが現在の世相ではないかと常々考えているのであります。

終戦後日本の学制は大きく変わりました。それが六三制であり、幸いにして義務教育が九年に延長されましたが、その上に高等学校ができ、さらにその中に定時制という新たな形の学校をつくりました。この改革に際して、高等学校開校の前年の昭和二十二年十二月の中頃でしたか、新しい高等学校制度の説明会をやるからと東北六県の代表が盛岡市に集められました。山形県からは視学やら校長やら十名ばかりの中に混じって私も寒い汽車で盛岡にいきましたが、ＧＨＱのオスボーンというえらい人が来て、一日ぶっ通し説明がありましたが、通訳づきの説明であったせいもあり何が何だかさっぱり分かりませんでした。しかしよく考えてみるとそのほとんどは高等学校の定時制課程についての話で、要するに、戦いに敗けて食べるものもない、生命を保つのも容易でない時に、義務教育は三年延長してやったがその上の学校などはぜいたくだ。義務教育を終わったらみんな働け、そして稼ぎながら学校に行きたい者のために定時制というものをつくる。学校という建物を夜遊ばせておくようなことは許されないというわけで、高等学校の本流は定時制であるということでありました。

その結果、翌年四月には定時制の学校がたくさんできました。それまでは山形県内に恐らく本校の夜間中学のほかなかったのではないかと思いますが、それが小さな町までいたるところに定時制高等学校が出きました。ところがその「働きながら学ぶ」という定時制はわが日本では育たなかったのであります。修業年限が一年長い。卒業してからの職場では全日制と定時制は差別する。高校生として魅力がない。そういうことでわが国では定時制は失敗した教育制度であったといっても過言ではないと思います。設置に関係した方々は定時制振興会というものをつくっていろいろ努力なさったけれども、多くは振興どころか時流に流されて定時制をつぶして全日制に鞍がえしてしまいました。何故にこういうことになったのかと申しますと「学校は勉強するところというより卒業するところ」とするのに根本原因があり、社会は実力ではなく学歴を大切にするということが今でも強く根づいているからであります。私は民主主義に基づいて改められた学校制度によってこんどはよくなるだろうと期待したのでありましたが、戦前にもまして学歴を重視するようになり、沢山できた学校に誰でもが入れるという幸せな時代になったけれども、残念ながら学校のあり方にたいする日本国民の考え方が益々邪道に走ったということを憂うるものであります。

本校は幸いにして五十年の立派な伝統をもっております。本当に勉強しようとした夜間中学草創当時の精神は必ずまだ受けつがれているはずであります。したがって諸君も他の学校とはおのずと違った意気込みで勉強しておられることと信じて疑いません。

最後に「三餘会」という言葉についてお話しいたします。大正十五年に発足した夜間中学の校友会を結成した時、その名前を「三餘会」と名づけたのであります。それは、「魏志」という中国の古い本からとったということで、当時漢文を教えておられた富樫秀恕先生がつけて下さったものです。三餘とは、一年中で冬は年の餘りだ。夜は昼の餘りだ。そして霖雨は時の餘りでこの三つ餘りが勉強するのに最も適した時間であって、これを勉学に利用することによって立派な人生を築きあげなければならないとお聞きしたことが今だに私の脳裡に残っております。このように本校創立当時に関係した我々は本校に期待と希望をもってのぞんだのであります。

諸君は他校にみられないこのような精神的バックボーンをそなえた本校に学んでいるわけであります。この幸せに祝意をささげて私の話を終わります。

（創立五十年誌より）

2017年11月アルカディア市ヶ谷

# 所感

元教頭 **谷 壮蔵**

指折り数ふれば十年の昔大正十五年四月九日山形夜間中学設置の認可を受け、仝年五月一日開校の日より昭和十年の現在に至るまで、思へば感慨無量のものがあります。其間の変遷―私立学校認可申請、県立移管、専門学校入学者検定規定による文部省指定、青年訓練所、交友会創設、学則の三回にわたる変更等々、遂に八学級三百有余を擁する迄の苦闘は、限られたる紙面を以てしては到底述べることは出来ないと思います。今日の此盛運を来したことは勿論在校生各自の奮励の賜なるには間違いのないことではあるけれども、他面上司の温かき指導と社会の恩恵であることは忘れてはならぬ事と信じます。

抑々国家が要求する人物は何れの時代を問わず、智徳に優れ強健なる体軀を有する者たること勿論なれども、動もすれば現代学校教育は智育の偏重に陥り、形式に流れ、勤労を軽しめ、徒らに功利主義に走るの結果、生徒は確固たる信念を缺き国家の将来に憂を残すが如き感を抱かしむる点があるのが遺憾とする所であります。茲に夜間中学の特色は働きつゝ勉強し、勉強しつゝ働くと云う所にあると思ひます。而して此働きつゝ勉強する点を世には恵まれざる境遇とか、不幸なる境涯とかの評語を以って現わす人もあるが、凡そ人の一生を通じて仮令形は変り質を異にしても、此道程を外にしては辿るべき道はないと信じます。現在将来の我国民の生活様式としては是非之でなくてはならぬと考えます。過半全国一般に青年学校設置の本旨も此点より出発して居るものと信じます。飽食暖衣の徒に忍耐努力の徳に秀で困苦缺乏に耐ゆるの士を見出すに難く、古来の偉人傑士の伝記を読みても思半に過ぐるものあると考えます。昔より艱難汝を玉にすとは人を欺かざるの言、之を翫味するの要ありと信じます。

今や我夜間中学は施設の内容につき不足の点多々ありとは云え、形式上に獲るべきは最早獲り得たる今日、内容の主体たる生徒各自の資質の向上発展は極めて必須の事で、仮令校舎其物は借物としても其主体までも、霊を失いたる借物であってはならないと思ひます。天は自ら助くるものを助くとは、時と空間を通しての金言、人事を尽くして天命を俟つの心だにあらば、小にしては一身一家、大にしては国家の福祉は招かずして来るものと信じます。卒業証書は人生の真手形ではなく、真の手形は汝は何をなしたるか、又何を為し得るかにあります。諸子よ。徒に卑下することなく、勇往邁進の気性を失うことなく、死せる過去をして其死を葬らしめ、唯現在に励まれんことを祈りて止みません。

（創立五十年誌より）

定時制閉程を記念した蛍雪之碑



# 回顧

第22代 **木村芳三郎**

戦後の学制改革によって新制高校が発足したのは昭和二十三年で、定時制高等学校並びに通信教育課程もこの年に誕生した。ところが東高の場合夜間部のみなもとは遠く大正十五年四月にさかのぼる。だからことしは創立五十周年に相当する。創立当時は山形夜間中学で設置者は市教育会。昭和八年に県立に移管されている。

わたしが東高にお世話になったのは昭和２１年ですので学校は制度改革のまっただ中であった。今更申し上げるまでもなく定時制高等学校並に通信教育課程は画期的な制度改革で、教育基本法第三条の（教育の機会均等）すべての国民はひとしくその能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならないとの理念に基づいて誕生したものである。東高の場合は前述のようにすでに大正十五年に働きながら学ぶ青少年のために夜間中学が設立されていたのであってその先見の明に対して敬意と感謝を捧げたいと思う。同窓会長の生駒政雄さんはその山形夜間中学の第一回卒業生（昭和五年）で、先に編纂された校史資料（東高創立九十周年記念）に生駒さんやその他の方々の在学中の「思い出」が載っているのを拝読し当時の情況が偲ばれ強い感激に打たれました。

さて本県では県民の働きながら学ぶ青少年に対する理解と熱意がいやが上にも高まり、十八校の独立定時制高校と七十校以上の分校が次々に創立され華々しいスタートを切ったのである。言うまでもなく創設当時は終戦直後の窮乏時代。文字通り無からの出発で容易ならざる難事業で、わが東高の定時制のようにすでに基盤が立派に出来ているのとは大違いであったのである。わが東高の場合は諸設備も人的組織も大方出来ていたから新制度への切り替えは円滑に推進された。その当時東高は通信教育課程をも併置することになっていたので専らこの方に集中的に努力した記憶が強い。これこそ無からの出発で何もかも暗中模索で推進した記憶がある。

再出発した新しい夜間課程も当時の道徳的支柱の空白、はき違いの自由等による生徒指導上訓育面での不祥事件がよく発生し、その解決のため先生方とともに心を痛めたことを追憶している。

さてこのように華々しくスタートを切った定時制高校のその後の情況はどうであろうか。

現在の定時制高校の低調さを思うとき考えさせられる問題があるのではないか。十八校あった独立定時制高校は現在一校も残っていないし、分校も十校内外に減少している。これにはそれぞれその理由と事情があるのであって軽率な批判は避けなければならないであろう。むしろ時勢の推移とともに落ちつくべきところに定着したのだと考えるのが妥当かも知れない。現在でもまだ定時制の志願者は年々減少しつゝあり、定員に達する学校はほとんどない。高度の経済成長によって大衆国民の生活が向上し豊かになったので志願者は全日制の高校に殺到し働きながら学ぶ定時制が敬遠されるようになったのだろう。然しこの考え方はそれでよいのか。深く追求して見る必要がないか。経済的な余裕があるなしにかゝわらず「働きながら学ぶ」というそのことに価値を見出したいのである。生駒さんも思い出の中に『最近の若い人はなるべく困難を避けて通るようにしているのをよく見受けますが、人生の長い将来を考えれば云々』又『人生は若い時に苦労すれば将来どんな困難に遭遇しても驚かない正確な判断ができるものです。云々』とある。全く同感である。

以上、わたくしの最近の定時制に対する所見の一端を述べ、東高定時制課程の今後一層のご発展を祈って筆をおきます。

（創立五十年誌より）

# 思い出

旧教員 **金子 淳子**（旧伊藤）

やはり、真先に思い出すのは二十九年卒の生徒である。卒業まで四年間教えた。教員になりたての私は教え方のコツが分からず五里霧中だった。だが有難いことに私の周囲にはいい先生が沢山居られた。英文科では学び得なかった多くのことをこの先生方から教えていただいた。このことは今も深く感謝している。生徒達も真剣だった。背筋を真直ぐに伸ばしてじっと此方を見つめている目に私はどれだけ励まされたことだろう。教えなければならないからトコトンまで調べ上げる楽しさ。生徒に理解して貰った時の喜び。教えることの醍醐味をこの時ほど味わったことはないように思う。

この生徒達が卒業も近いある日。私は教室で一枚のレコードをかけた。曲はチゴイネルワイゼンだった。彼等は最初、この曲の僅かな時間さえも惜しむふうであったが、やがて曲に吸い込まれていく様子がよく分った。まるで自分の琴線を奏でるかのように、身じろぎもせず聴きいっている。一人一人の姿を私は今もはっきりと覚えている。中には涙さえも浮かべている者もあった。私をも含めて馬車馬のように走り続けだった彼等には到底音楽を聴く余裕など無かったのだろう。

あれから二十余年経つ。期待通り、皆それぞれ立派になった。町でよく声をかけられることがある。折目正しい挨拶のあと、近況など語ってくれるが、言葉の端々から思いがけない円熟味が窺われて本当にうれしい。仮にもこの人達から「先生」と呼ばれる一時期があったことを思う時、無我夢中だった若い日の自分がこの上なく愛しく思われ、同時に、私の未熟を許し、私に従いてきてくれた彼等に、私は心から感謝したい気持ちで胸がいっぱいになる。この気持は、その後退職するまで教えた多くの生徒に対して等しく持ち続けているものであるが。

さて最近ではやはり最後に担任した学生が懐しい。皆、明るい現代っ子だったが、思いやりのある心の優しい生徒達だった。退める前の年、私は彼らと北海道に修学旅行に行った。六月の北海道の空は涯しなく広がり、私達は楽しい旅をつづけた。御一緒だった先生方の親切とともに、終生忘れられない思い出である。

二十三年間の思い出は尽きない。しかし、すべて美しく懐しいものとして甦えるにはまだまだ時間がかかりそうだ。傍目にはどう見えたか知らないが、やはり、私には苦しい日々の連続だったように思う。

もうひとつ書きたいことがある。それは校庭の美しさのことだ。あの学校はどの窓からも緑が見える。二階の高さまでも木が聳えている。今、目を閉じると次から次へと木が語りかけるように懐かしい姿を現わす。正面を入って、百日紅。夏休みが明けても延々と赤い花を咲きつづける。左手の昼尚暗い木立。この中に昔奉安殿があった。玄関前の見事な藤棚。プール脇の大銀杏。校長室西の柊。この柊の葉はギザギザがなくて丸い。「柊も人間と同じように年をとると角がとれて丸くなるのだ。」と教えてくれたのは交通事故で亡くなった武田さん（用務員）だった。中庭に入ってみよう。桜。新入生が入って来る度、「この桜は山形で一番先に咲くのです。」と私は得意げに言ったものだ。梅の老木。悪童どもが登ってはボタボタと実梅を落して噛っていた。東の中庭。ここはライラック。どんなに満開になってもやはり淡いむらさきの花。太い青桐が教室に沿うて並び、聳え立っている。園芸部（全日制）の丹精こめた彩とりどりの花壇もとても楽しみだった。紅花もここで初めて見た。101教室東の秋には燃えるように紅葉する錦木。ここには珍しい灌木が沢山ある。グランドに出れば、そこには柳の木が旧友のように私を迎えてくれる。

たそがれの長い初夏、私はリーダーを閉じて、生徒とともに窓外の景色を楽しむことが幾度かあった。

（創立五十年誌より）



# 母校 山東高定時制を送る

定時制の課程を閉じる実行委員長 **鈴木 良助**

大正15年、山形夜間中学として発足した本校定時制課程も、いよいよ終焉のときを迎えようとしております。

本校は、昭和、平成と激動する歴史のなかにあって、学制改革など幾多の変遷を辿りながら、常に本県の勤労学徒の教育の殿堂として輝かしい伝統を示して来ました。

それは、向学心に燃える生徒の意欲と、厳しい環境の中で生徒の教育に献身された教職員の方々の熱誠によって培われたものであります。

「働きながら学ぶ」と言う本校の特質は、言葉や理念はともかく、学習環境としては決して快適なものではありません。

しかし、能力をもちながら経済上の理由で進学を断念せざるを得ない少年にとって、本校はまさに希望の学び舎でありました。

先生の温かい指導にもかかわらず、思うように理解出来ない苛立ちに悩み、はかどらない学業に幾度となく、挫けそうになりながら、その都度、仲間の友情と先生の励ましを支えにして乗り越えた体験は、本校に学んだ者の共通の感慨であろうと思います。

本校の建学の精神は、“どんな困難にも挫けない不撓不屈の信念を堅持し、勉学と勤労に励むところにある”と繰り返し教わりました。

たしかに私達が、高校生活から得たものは、学業の達成もさることながら、勤労と学習の両立を通じ、烈風に耐えるしぶとさを自然に体得したことだったように思われます。

これは、知識として習得するものではなく、本校に在学した毎日の積み重ねが、いつのまにか習性として身についたものと思われます。

時代の流れと言いながら、社会情勢や生活環境が大きく変化し、本校もついにその使命を終えようとしております。

現実の事態を直視すれば、やむを得ない措置であると理解できるのですが、母校を心のよりどころとして育った私達にとって、まことに痛惜に耐えないところであります。

しかし、定時制の課程が閉じられたとしても、母校の伝統と精神は、これからも、私達の心身から消えることなく、青春の日の熱い思い出として、生き続けるものと確信しております。

母校に対する本校定時制同窓会会員の愛惜を結集し、校庭の一隅に「蛍雪之碑」と刻んだ記念碑を建立させていただきました。

折にふれて、学び舎を訪ね、若々しい情熱を爆発させた往時を回想する道しるべとなればと念願しております。

（創立五十年誌より）

第 42 代佐竹校長と

# 師弟のふれあいで「不撓不屈」の精神学ぶ（定時制課程修了）

## 日刊スポーツ新聞掲載　平成９年（１９９７年）４月30日から

山形県立山形東高等学校定時制課程は、校訓のひとつ「不撓不屈（ふとうふくつ）」の精神のもと、勤勉で社会に貢献する生徒を育てる。時代の要請から本年度から募集を停止し、歴史を県立霞城学園高校へと移そうとしているが師弟で築いた栄光の日々は不変だ。本特集では、昭和三十～四十年代に教壇に立った教師を紹介する。

［伊藤　辰雄先生（数学／昭和２１～５７年在職／山形市在住）］愛称は「たっちゃん」。「継続は力なり」の精神のもと、粘り強い気質を育てた。「生徒は、誇りを持って学んでいました」と目を細める。後に山形東高定時制の同窓会長を務めるなど、今でも卒業生とのきずなは太い。

［太田　光之助先生（社会／２４～４５年／山形市在住）］山登りが大好きで、がっちりとした体形から「クマ」の愛称で親しまれた。社会に貢献できる人材の育成に尽力し、大きな成果を残した。「生徒は学力が高く、教えがいがありました」と語る。山岳部の顧問を担当し、全国大会出場に導いた。

［大沼　一夫先生（国語／２４～５３年／故人）］豪快で懐が広く、生徒から慕われた。柔道六段の猛者で、柔道部の顧問として活躍した。退職後には、学校法人南風学園を設立するなど、昨年九月に亡くなるまで、教育に情熱を注いだ。

［桑名　武好先生（数学／３４～４４年／故人）］ユーモアにあふれ楽しい授業を行った。半面規律には厳しく、生徒が脱線した時にはカミナリが落ちたこともあった。自動車部の顧問を担当。合宿で寝食をともにした思い出を持つ卒業生は多い。

●師と学び、栄光を刻む

●　［丹野　敏弘先生（英語／３７～５２年／山形市在住）］生徒との心の交流を大切にした指導を行い、信望を集めた。「生徒はいろいろな意味で能力が高く、卒業後も立派に活躍しています」と優秀な教え子を誇る。現在は家庭菜園などで余暇を過ごしている。

［佐藤　巌先生（国語／３８年～５７年／山形市在住）］存在感があり、「ガンちゃん」の愛称で慕われた。応援歌「若い血潮に」の作詞者としても有名だ。「柔道部の顧問を担当しましたが、全国大会に出場する教え子もいました。苦しい時は、応援歌を思い出して下さい」と語りかける。

［渡部勇吉先生（生物／３７～５２年／山形市在住）］明るい笑顔が印象に残る。“楽しい授業”で生徒の気持ちを引きつけた。「苦学生が多かったが、生徒は明るく、学校に来るのが楽しそうでした」と振り返る。卓球部、自動車部の顧問を歴任した。現在、市立山形商高の非常勤講師を務める。

［伊藤　修先生（理科／４２～４８年／山形市在住）］「コツコツとまじめに」をモットーに、ひととして生きる道を教えた。軟式野球部、山岳部などの顧問を歴任し、生徒とともに汗を流した。「当時の生徒は、いい意味で“大人”でした。二年後にはクラス会が開かれる予定で、今から楽しみにしています」と笑顔で語る。現在、県立山形中央高で教べんをとる。

※　山形県立山形東高等学校定時制課程

# わが懐かしの恩師（懸命な指導で生徒の明日を開く）

●佐藤　勇蔵　先生［体育／昭和２４～５０年在職／故人］･･･いつでも一生懸命。バレーボール部の顧問を務め、県大会優勝に導いた。

●大川　廣海　先生［社会／２４～５１年／故人］･･･宮司を務めながら教壇に立ち、生徒の豊かな心をはぐくんだ。羽黒山に関する本「出羽三山の四季」の著者としても知られる。

●大場　弘之　先生［体育／２３～３８年／山形市在住］･･･「全日制に負けるな」を合言葉に、生徒のやる気を引き出した。「涙が出るほど、すばらしい思い出があります」と懐かしむ。

●山田　精淳　先生［数学・物理／３３～４２年／山形市在住］･･･「当たり前のことを当たり前に」の教えが今も胸に響く。卓球部部の顧問として、数多くの実績を残した。現在、県立山形南高で非常勤講師を務める。

●小林　秀男　先生［英語／３０～３８年／山形市在住］･･･背が高く、スマート。思いやりにあふれ、生徒のよき相談相手だった。

●東海林崖雄先生［国語／３４～３９年／山形市在住］･･･人格者で大きな心で生徒を温かく見守った。現在、保護司、高禅院住職を務め、茶道界でも活躍する。

●土屋　貞夫　先生［数学／３２～４１年／故人］･･･めりはりのある“飽きさせない授業”

を行った。愛称は、独特の歩き方からついた「ホッピング」。

●折原　龍男　先生［化学／３８～５３年／山形市在住］･･･おおらかで、心温まる指導を行った。「生徒は立派で、感心しました」と語る。

●寺沢　康三　先生［保健体育／４３～４３年／山形市在住］･･･バレーボール部の顧問を担当。県大会優勝に導くなど、抜群の指導力を発揮した。現在、県立山形西高教諭、県バレーボール協会副理事長。

●早坂　　昇　先生［数学／４１～４７年／山形市在住］･･･「理解できる授業」で生徒の学力をアップさせた、バスケットボール部の顧問を担当。

# 蛍雪会記念誌の発行に寄せて

昭和44年３月卒業　山東第19回　鵬雲会　**小林義和**

この度は記念誌の発行、おめでとうございます。本稿を寄せるにあたり、改めて夜間部創立50周年記念誌「山形東高等学校定時制の課程」を拝読いたしました。大正15年の創立ですから、私の母と同い年です。ということは、あと少しで百周年を迎えるわけですね。本誌を拝読して、私が卒業した翌昭和45年に衛生看護科が併設されたとのこと、初めて知った次第です。近くにありながら、定時制課程のことは何も知らなかったのだなぁと赤面の至りです。改めてこれまでの道程と輝く歴史に敬意を表します。また、定時制課程の廃止を寂しくも思います。

振り返りますと、定時制課程同窓会「蛍雪会」を私ども「山形中学・山形東高等学校東京同窓会」にメンバーとしてお迎えしたのは、私の先代会長に当たる青柳桂一先輩の時であったと記憶しています。以来、蛍雪会の方々に副会長及び幹事に就いていただき、会の運営に多大なご協力、ご支援を賜り今日に至っています。重ねて御礼申し上げます。

私も会長時代には蛍雪会の総会にもお招きいただき、大勢の方と接する機会を得ましたが、各界でご活躍されている方々を目の当たりにして、ここまでのご努力を思い感動に胸を熱くする思いでした。

この稿で少々、私にとっての定時制の思い出、印象を綴ってみたいと思います。

私は高校入学以来、３年生の夏までフェンシング部に籍を置き、授業の後いつもトレーニングを重ねていましたが、練習を終え西通用門から帰途につく折、いつも定時制の皆さんとすれ違いました。勤務が終わって疲れた体でこれから授業を受けるのかと思うと、その勉学に対する熱意に敬意を表すると共に、自らの学習に対する姿勢に恥じるところがないか反省しきりでした。

考えてみると、小中学校時代は１年間、特定の机を自分ひとりで専有していたわけですが、山形東高等学校に入学すると、そこには定時制課程というもう一つの学び舎が同居しており、自分が昼間利用している椅子や机を使って学ぶもう一人の山東生がいると思うと、一種不思議な感懐にとらわれたものでした。この机で学ぶもう一人の自分？どんな生徒なんだろう？想像を掻き立てられたものです。

現在は新校舎に建て替えられ堂々の威容を誇る母校ですが、私が在校していた折は旧い木造校舎で、お隣の工業高校の鉄筋コンクリートの校舎に比べ残念ながら見劣りしていました。その校舎群と新体育館は渡り廊下で結ばれ、実に特徴ある校庭を構成していたのです。さらに他校にはないけれど母校には在ったのが食堂でした。先に述べたとおり、運動部の部活動に励んでいた私は育ち盛りでもあり、午前の２時限の授業が終わると、もう早弁と称して、持参の弁当を食べてしまい、お昼休みにはこの生徒食堂に駆けつけカレーライスやうどんで胃袋を満たしたものです。この食堂、お昼や夕方には隣の工業高校からも生徒が訪れ大いに賑わったものでしたが、実は定時制課程の寮のための食堂でした。私たちの昼間の生徒も活用させて頂いた「食堂」でしたが、運動部の夏休みの合宿時には朝昼晩の３食を提供してくれる貴重な施設でもあり、高校生活の楽しい思い出に登場する舞台であったのです。

鳥海ふすまの徽章、羽前の三山（校歌）、そして先のキャンパスを共にした定時制課程の皆さんに、本稿を借りて、これまでの輝く歴史と実績に改めて敬意を表するとともに、山中・山東東京同窓会へのこれまでのご支援を感謝しながら、改めてエールを送らせて頂きます。フレー、フレー、山東！！



# 蛍雪会の皆さんへの想い

山中・山東東京同窓会相談役　**遠藤雅晴**

蛍雪会の皆さんは、多士済々である。男性、女性にかかわらず、明るく、率直で、人間味があふれ、しっかりとした信念を持ち、人生を前向きに生きてこられた方ばかりだ。

私が最初にそう思ったのは、平成23年11月、スクワール麹町で開催された東京蛍雪会の総会・懇親会に初めて参加させていただいた時のことである。

当時私は、平成23年度山中・山東東京同窓会の幹事長に就任して間もなかった頃だ。

東京蛍雪会の総会・懇親会は、深瀬守巨会長を中心に、家族的なムードに包まれ、山形弁が飛び交う和気藹々の雰囲気の中で、講演会あり、カラオケ大会ありの、バラエティに富む、楽しく、また、意義深い会合であった。山形の名酒も、ふんだんに振舞われ、私もつい飲みすぎてしまったような記憶がある。

そして、今でも忘れられないのは、柴田五郎氏の特別講演である。

柴田氏は、昭和42年夏に、茨城県利根町布川（ふかわ）で起きた「布川事件」の被告・杉山卓男氏の弁護に取り組まれた弁護士である。昭和43年から始まった公判では、杉山氏は無実を訴えるも有罪。昭和45年の公判から柴田氏が弁護人として参加した。地裁から高裁、高裁から最高裁、再審請求するも抗告棄却の繰り返し。

しかし、柴田氏は、杉山氏の無実を確信して、実に9回に及ぶ再審請求を行った。そしてとうとう平成23年5月24日、水戸地裁土浦支部の再審裁判で、無罪判決が言い渡された。

再審弁護団の団長であった柴田氏は、40年の長きにわたって取り組んだ、えん罪事件の裁判に勝利したのだった。この間の柴田弁護士の奮闘努力は、私たちの想像を遥かに超えるものであったであろう。人間としての葛藤や苦悶もあったかもしれない。

しかし、特別講演での柴田氏のお話は、少しも激することなく、淡々とした報告であった。

むしろ、そのような柴田氏の、温厚で、真摯なお人柄に、同じふるさと山形で生まれ育ち、山形東高の同じ学舎で学んだ、蛍雪会の人たちの、不撓不屈の精神を感じて、私は心の底から感動したのだった。

さて、いろいろな会合でお会いする蛍雪会の人たちの顔ぶれは、男女とも実に多彩である。

そこで、幹事長だった私は、当時編集長だった高橋聖氏（後の会長）と相談して、年2回発行される「東京同窓会だより」に、蛍雪会の諸先輩の中から、毎回一人にエッセーを書いていただくことにしたのだった。

思い起こすと、幹事長時代、「東京同窓会だより」にエッセーの執筆を私からお願いした方は、全部で4人いらっしゃる。その方々のお名前と、寄稿されたエッセーの題名、掲載された「東京同窓会だより」の刊行番号と発行年月日を、以下に記してみたい。

1.　柴田五郎氏、『えん罪事件を弁護して40年』、第63号、平成23年10月1日
2.　安孫子市郎氏、『母校探訪―「奨学寮」を回顧して』、第64号、平成24年5月1日
3.　車谷久幸氏、『海のある房総の里山暮らし』、第65号、平成24年10月1日
4.　深瀬せつ氏、『追憶にも支えられて―近況―』、第66号、平成25年5月1日

各氏のエッセーは、それぞれの分野で、いわば道を極められた達人のごとき趣きがあり、今読み返しても、「人生いかに生きるべきか」の示唆に富み、まことに面白い。

蛍雪会の皆さんは、おそらく、上記の4氏に限らず全員が、端倪すべからざる人物であるに違いないと、今の私には思えるのである。

# 文武両道・質実剛健・自学自習

山中・山東東京同窓会13代会長　**髙橋聖**

山形中学校・山形東高等学校　東京同窓会の会長を平成２５年７月から２年間務めました山東２２回主一会の高橋聖（サトシ）です。私はその２年前の平成２３年１０月号の「東京同窓会だより」第６３号より副会長兼広報員会委員長として「同窓会だより」の編集長を担当しました。初仕事は前任の前田好二副会長と遠藤雅晴幹事長のおかげでなんとか達成できましたが、次号の準備中それまでお願いして来た印刷会社の社長が亡くなり、「これは困った」と思った時に助け舟を出してくれたのが当時副会長であった深瀬守巨さんと現在の副会長の滝田健司さんです。それまでは表紙と４ページ目のみがカラーで残りのページは白黒でしたが、お二人のご尽力で従来と同じ料金で全ページがカラーになりました。掲載した記事の内容が素晴らしかったのはもちろんですが、カラー写真により見栄えも大変よくなりました。この場を借りてお礼申し上げます。

山形中学校・山形東高等学校　東京同窓会と山形東高夜間部同窓会東京支部の交流は昔から行われて来ましたが、昭和５７年１１月に新しく会長となられた鈴木久典会長（山中４６回）から「同じ母校の屋根の下の教室で育った好学の友であり、願わくは同窓会も一緒にありたいものです」と、その気持ちから総会への招待状を毎年差し上げることになりました。それ以来、夜間部同窓会東京支部と山形中学校・山形東高等学校　東京同窓会は緊密な交流を図って来ました。そして、平成２２年７月、夜間部同窓会東京支部が一つの年次会、「螢雪会」として山形中学校・山形東高等学校　東京同窓会に加入することになりました。その時、夜間部同窓会東京支部長であられた深瀬守巨さんが副会長に新しく選任され、深瀬さんの後に丹野弘三副会長、そして現在の滝田健司副会長と続いています。これまで山形県人会との交流を始め同窓会活動に積極的に関与いただいております。

私は平成１０年７月から２年間、インドに駐在しました。首都ニューデリーは北インドに位置しますが、そこから南へ約２，０００ｋｍ下がると、私が駐在したバンガロールがデカン高原の中にあります。標高は１，５００ｍ、インドの中では快適な気候で「インドの軽井沢」と言われています。バンガロールは人口６００万人の都市で、ＩＴ産業が盛んな近代的な街ですが、映画「ミリオネーヤー」に出てくるような貧困をここでも目にします。また今もカースト制度も根強く残っています。インドには少なくとも３０の異なる言語があり、方言は２千と言われています。連邦憲法では公的共通語としてヒンディー語と英語を規定しています。そんなインドの中でこの国の将来の希望を感じたのは制服で学校に通う子供達でした。これはインドでも日本でも山形でもどこでも同じですね。学ぶことが明るい将来につながるのだと思います。

話は山形へ戻って、母校の正面玄関を入るとまず目に入ってくるのが玄武色の大きな（約２ｍ）米粒のような形をした彫刻です。（別途添付した写真を掲載してください。）この彫刻は母校創立１００周年の時に当時イタリア・ミラノ在住の吾妻兼治郎先輩（１９２６年～２０１６年）が寄贈されたものです。吾妻氏は１７才の時に特攻隊に志願しましたが終戦となり山形へ戻りました。２０才で夜間部に入学し２４才で東京芸術大彫刻科に入学、２８才で新作家賞を受賞し、３０才でイタリア政府給費留学生としてミラノへ留学、マリノ・マリーニ先生に師事しました。「西洋の造形を学ぶことは大切だが日本の精神を忘れてはいけない」という先生の教えを心に刻み、禅思想をもとにしたMU（無）シリーズを制作しました。寄贈された作品名はMU－Ｓ１１１と言います。寄せられた吾妻氏の手紙には「きれい事よりも探索している時の方がより美しい姿であり、勉強中の学生により意義深いと思いこの作品を選んだ。」とあったそうです。母校１３４年の伝統と歴史、文武両道・質実剛健・自学自習という目に見えない尊い精神と高い香りはいまなお母校にみなぎっています。



# 1枚の写真から

山中・山東東京同窓会相談役　**羽柴　茂**

ここに1枚の写真があります。何かの機会に、これについて書いてみたいと思っていました。滝田先輩から「何か書くように」と、その機会をいただきましたので、心にうつりゆくよしなし事をそこはかとなく書きつくれば・・・。

この写真は私の中学生時代のものです。場所は上山市内、時は昭和43年。私は上山中学校3年生で、この写真のどこかに写っています。全校駅伝大会（クラスマッチ）のたすきの中継所のひとつのスナップです。殊更にこの写真にこだわるのは、ある時、これを見たときに「全員の表情が実に良い」ことに気づいたからです。当時は1学年が450人というマンモス校で勉強云々よりも部活で運動ができる方が価値がある雰囲気の校風（別の言い方では、女子にもてる）でした。背景やじゃり道に当時の世相の一端がうかがわれます。今と比べるとそんなにも豊かではなかったかも知れません。なぜこのように子供たちの表情が良いのか、いろいろ考えてみて思い当たるのは、「戦後の解放感」みたいな空気があったのではないかということです。当然自分たちは戦争を直接知りませんが、親世代は皆が戦争体験者です。東京の焼野原とは違っても抑圧感は相当なものであったと思います。身近な人が亡くなったり、傷ついたり（言葉で書くとこうですが子供時代に祭りにいくと「傷痍軍人」という方がアコーディオンなどの演奏をしている光景がありました。）結局は人間が人間を苦しめていたということになります。そんな時代を何とかくぐり抜けてきたのが私たちの親世代となります。そんな空気が何も知らない自分達にも伝わっていたのではないかということです。たった70数年前の事を、世の多くの人が忘れてしまっているのではないか、というような気がしてならない昨今です。

さて「70数年前」と書きましたが、私が生まれるたった100年前の出来事が黒船来航です。その頃を舞台に書かれたのが飯嶋和一さんの「狗賓童子の島」です。司馬遼太郎賞を受賞されたことを東京同窓会誌で紹介させていただきましたが、その飯嶋さんの作品で「プロミストランド」という小説があります。

なぜ唐突にこの話がでてくるのかと言いますと、やはり東高同窓生の山内志朗さんの「湯殿山の哲学」の中にかかれていたことで妙に一致することがあったからです。雪解けの春先の頃のあの地方の方の心情と言うものが自分の感性と全く違うことに非常に興味を引かれます。「汝ふたたび故郷へ帰れず」（小学館文庫2003.5.1初版第一刷）に収められているものでは325Pの最後、主人公の心情表現として「特に雪が平地で消え始め、大地が渦巻いて沈んで行くような雪崩の音が、遠くの山々で響きだす頃になると、俺はいっそうふさぎこみ、自分の部屋に鍵をかけて、カセットテープを聴くことが多くなった。」とあります。一方、「湯殿山の哲学」（ぶねうま舎2017.7.24第一刷）では60～61P、「春がきたとはいえ、花もなければ食べ物もなく、土の色だけが目立つ、もの悲しい時期を迎える。」いずれも雪解け、早春というべき頃のそれぞれの心情として述べられています。プロミストランドには「檜原」という地名がでてきます。山内さんの生家は横岫、清水小屋（しずごや）とのこと。私自身は春先にはむしろウキウキする方ですが、全く無関係に思えるお二人の相通じる感情は、私の想像を超える、西川町の雪深いところならではの心情なのでしょうか。それぞれ主題、本筋ではないプロットかもしれませんが。

そもそもこの文章の冒頭の話題をあわせ、どれも、私どもが山形で育ってきていることに由来することは間違いのないことだと思い、そのことが私にとっては何か幸福な感情を生むのです。

# 走馬灯のように・・・♪♪

山東23回卒志也会
山中・山東東京同窓会第14代会長　**佐藤　憲一**

昭和40年代後半、私が所属した吹奏楽部は定期演奏会やコンクールの準備のほかに、47（ヨンナナ）インターハイを控え、オリジナル行進曲の暗譜のため夜遅くまで練習していた。ただひたすら練習していたわけではなく、そこは17・8の高校生で、練習の合間にソフトボール・バレーボールや卓球にも熱中していた。加えて階段下のスペースをあてがわれた部室で、ティンパニーの蓋を台座にしてトランプ遊戯の「ナポレオン」にも興じていた。

そうなると夜８時や９時まで校舎にいることはざらで、相当お腹もすいてくる。その頃定時制の人たちには給食があり、私たちはそれにグッと魅かれた・・・、という訳ではないが「余りがあれば分けてもらえるかも」的な思いがあり、お願いしたところ、コッペパンを数個ずつ何回か頂戴した。その時の係りの人と、定時制の方々（特に女性が多数だった）のやさしい思いやりを一緒にご馳走になったようなものだった。

そんな話を翌日の授業の合間にクラスの連中にすると、「そうなんだよなぁ、女性が多いんだよな。この机と椅子はいったいどんな人が使っているんだろうって考えるよな」こんな会話が飛び交っていた。当時はひとクラスに女子が3〜4人だったので、興味の的はどうしてもそちらに向いてしまいがちだった。なかには机にこっそり（？）手紙を入れて、「文通しましょ」とお誘いをかける輩もいたが、その成果は知る由もない。

木造校舎・石炭小屋・だるまストーブ・縦開け型の窓・汲み取り式のトイレ・中の落書き

ライスカレーとうどんで100円の学食・頭脳パン・田舎ファンタ・広くて寒かった講堂・ガチで争ったクラスマッチ・山東祭でのフォークダンス・おお勝利・遠征歌・修学旅行がなかったこと等々。

思いつくまま羅列してしまったが、なかでもトイレの落書きは秀逸だった。さすが山東生と感激したことを憶えている。

「天は人の上に人を造らず・・・」の福沢諭吉や「待てど暮らせど来ぬ人の・・・」の宵待ち草をパロッたもので、ちょっとここでは紹介しにくい。興味のある方はご連絡いただきたい、そっとお教えします。

蔵王お釜ガス　写真提供（有）大崎金型代表 山上嘉様



# 蛍雪会との絆、雑感

**昭和48年卒　山東第23回　志也会　伊藤信彦**

私の実家は、東高まで歩いて数分の距離にあり、母校と山形工業高校とつながる一帯は正に子供のころの遊び場の一つでした。

夏休みには、子供会対抗の少年野球の早朝練習等で、東高のグランドを使用したことを懐かしく思い出します。

当時は、定時制高校の認識がなく、日の暮れるまで遊んで家路につくとき、校舎の窓から漏れる灯りを見て、高校はこんな時間まで授業があるのかと思った記憶が蘇ります。

私が蛍雪会の皆様と接する機会を得ることができたのは、２年間の山東・山中東京同窓会の幹事長の時でした。東京蛍雪会の総会・懇親会をはじめ、ご紹介いただいて参加した通常では利用することができない日本外国特派員協会（外国人記者クラブ）でのランチ等で多数の方とお話することができ、新たな発見や絆を感じる有意義な時間を過ごすことができたことをあらためて感謝申し上げます。

実は、４年前に他界した父（大正１４年生まれ）は、旧制山形夜間中学校の卒業生であり、裁判所書記官・事務官として県内各地の裁判所に勤務していましたが、蛍雪会の方で裁判所時代の父と共に仕事をされた先輩がおられ、懐かしさと共に不思議な縁を感じました。

私の高校時代は、まだ古い木造の校舎で、昼間部の生徒と夜間部の生徒が同じ机を共有し、旧制中学からの伝統をそのまま伝える趣がありました。

数年前に山東東京同窓会の関係での打合せで、母校にある同窓会事務局を訪れ、事務局長である渡辺さん（旧姓大竹：私の高校３年時の同級生で、長らく母校で国語の教師を務めた。）に現在の校舎を案内していただきました。卒業以来の訪問でしたが、廊下では応援団のチアガールがジャージ姿で練習をしており、聞こえてくる声も女性ばかりで、まるで女子高にきているような錯覚を覚えました。現在は男女半々になっていますが、私の在校時は女性がクラスに２〜３名という時代であり、雰囲気はだいぶ異なっていました。

先生といえば、私の在学時は、旧制中学時代より教鞭をとられている名物先生が在籍していた時期でもありました。中でも、英語の松木清先生は、独特の話し方、雰囲気を持っている方で、教わった生徒すべての記憶に残る先生といっても過言ではありません。

前述の父も旧制夜間中学時代に松木先生に教わった１人で、若い時の先生はどれほどインパクトが強かったのか、想像するだけで冷や汗が出てしまうほどです。

また、美術の細梅久弥先生もその１人であり、私の母が楯岡高等女学校（後の楯岡高校、現在は県内初の併設型中高一貫教育校の東桜学館中学校・高等学校）在学時教わっており

両親が高校時代教わった同じ先生に子供も教わるというのも珍しいというか、何らかの縁を感じるところです。

細梅先生には、山形市の「初市」を描いた作品が多数あり、母校にも油絵の作品が数点残っています。私の実家にも、母がかつて同窓会で先生にお会いした時に色紙に描いていただいた「初市」の水彩画が飾ってあり、今となっては大切な思い出の作品となっています。

現在母校には定時制課程はなくなりましたが、夜間部から昼間部へ、昼間部から夜間部へ、長きに亘った伝統は今後もしっかりと引き継がれていくと確信いたします。

親から子への伝承とともに。

# 不思議なる縁（えにし）

NHK解説委員　板垣信幸

縁とは不思議なものである。記者・解説委員として４０年近く過ごし、多くの縁を得たが、山形東高夜間部ＯＢ・ＯＧの方々との御縁は、本当に予想外のことであった。数年前に山東東京同窓会で夜間部ＯＢの深瀬さんと知り合いになり、「私の父は夜間部出身で、数学教師なった初任地も夜間部だった」と打ち明け、一気に話は何十年も前に遡ったのである。

小生の父・板垣幸夫は経営の苦しい左沢の反物商の息子だったが、向学心があり山形の炭問屋に住み込みで昼は働きながら山中夜間部で学んだ。

炭問屋で働き苦学する幸夫（右側）

その後、米沢高等工業機械科に進み歯車の研究に打ち込み、担当教授の推薦で東北大学の研究助手の道が開かれていた。しかし、母親の癌の治療費を捻出するために研究の道を捨て、高校の数学教師の道を選択したと父に聞いた。そして、初任地がなんと山東夜間部であったとのこと。父の言葉を借りれば「夜間部には優秀な生徒が多く、働きながら苦学する重荷を背負って功なり名を挙げた人がたくさんいる」という学校であったようだ。

父の夜間部教師時代の写真が我が家にもいくつか残っており、教え子を何人か連れて朝日岳や飯豊連峰を何度か登った写真が面白い。風呂にも入らず汗と泥だらけ、下山後自宅の風呂に皆で入ると、「湯が不透明になるほど汚かった」とは妻・としの言葉。その後、自宅での宴会？は至福の時だったに違いありません。

妻のとしによると、米工時代の「歯車の研究」は文部省の奨励研究に指定され、かなりの額の研究資金を得たという。過日、実家の仏壇周りを整理していたところ、その古い資料が出てきたのには驚いた。というのも、その支給の日付が昭和２７年とあり、私が生まれた年だったのである。父はすでに夜間部の教師をしている時で、米工時代の研究が夜間部の教師をしている時まで続いていたことになる。

教え子と朝日岳縦走する幸夫（前列中央）

父は、その後山形北高に移り、うら若き女生徒を相手に「ごしゃえで、笑わせで」数学を教えたとのことだが、クラブ活動の指導も熱心で、マンドリンクラブ、テニスクラブなど、日頃の父からは想像もできない多趣味ぶりだった。晩年、父は海外教員研修で「中国視察」を行い、子供のように喜んだそうだが、その直後、胃がんに倒れることになる。病状はすでに手遅れで、数年後に上山高校の教頭の時に５７歳でこの世を去っている。葬儀には山形北高、上山高、そして夜間部の方々が多数参列していただき、感謝の気持ちで一杯になった。

あれから３０年以上経ち、蛍雪会の方々とお会い出来たのも父による巡り合わせを感じるところです。そして、蛍雪会の東京同窓会の講演に２年連続でお招きいただく幸運を得、講演会の後は「板垣先生の息子さん？本当？」「そういえば、良く似てるわ」「私は幾何学を習った」と、父の思い出を話してくださり、とても幸せな気持ちになりました。

最近、後裔に伝えるために板垣家の過去４００年間の家系図総覧を自ら作って見ました。自分は芥子粒のようであり、「誰かに生かされている」と実感することしきりである。

歴史は残せば伝わるもの。夜間部がなくなり、誰かが書きとめなければ、歴史から消えてしまうかも知れない。父・幸夫の苦学した青春時代、初めて教鞭を執った新米教師時代、いずれもが夜間部であった事実をお伝えし、蛍雪会の記録に残して頂けることに感謝いたします。



# 山形東高夜間部文集発行に寄せて

山中・山東東京同窓会第15代会長 **金井　浩一郎**

この度の文集発行、おめでとうございます。私は今年7月から東京同窓会の会長を拝命しておりますが、この機会に寄稿の栄誉を与えて頂き、幹事役の方々に感謝申し上げます。

私が東高に入学したのは昭和４８年で、その時の教室は夜間部の方と共同使用でした。ある日、机の引出しにあったティッシュペーパーを借用し、そのお断りとお礼のメモを引出しに入れて帰りました。翌日お返事を頂き、その後、引出しでの手紙交換をしておりました。看護科の生徒さんでした。私はサッカー部でしたが、ある時その方が休日昼間の登校機会があり、グランドにいたサッカー部の連中に声をかけてくれたことがありました。あいにくその日は遠征帰りで、私は学校に戻らなかったのでお会いすることはできず、後から「お前に女子生徒が会いに来たぞ」と聞いた次第です。そして２年生になって教室が変わり、手紙交換も終わり、お会いすることはありませんでした。今、この文集への寄稿文を書くに当たり、そんなことがあったな、と淡く思い出されました。

東京同窓会にも蛍雪会の先輩がいらっしゃり、皆様熱心に同窓会活動をされており、頭が下がります。この文集を機に、後輩に、かつて山東には夜間部があり、その卒業先輩は山東を誇りに思い、山東愛に燃えて、様々な方面で活躍されている、それはこの文集に大いに現れている、と伝えていこうと思います。

# 蛍雪会の皆様へ

山中・山東東京同窓会副会長 **槙　たか子**

私が山東を卒業したのは44年前の昭和４８年(1973)の3月です。女子生徒は学年で17名程度、すぐ下の学年はたったの3名でした。当時女生徒だけの更衣室があり、そこでは上下関係はうるさくなく、非常にクールな雰囲気だったように記憶しています。私たち女子は東高の男子には異性とはみなされず、少数だから目立つのではなく溶け込ませてもらった、ひょっとして、守ってもらっていたとも言える高校生活でした。自分が大人になるうえで貴重なかけがえのない3年間でした。

それでも高校時代の思い出は記憶の彼方にあり、思い出すこともなくなってきていた時にもう一度引き寄せてくれたきっかけは平成24年の東京同窓会懇親会の幹事学年になった時でした。山形弁を共通語として喋るのはなんとも心地いいもんです。

それから東京同窓会の役員会に入れてもらい、上の方々や後輩達との交わりに加え蛍雪会の方々とお知り合いになることができました。

私は寒河江出身で左沢線のいわゆる汽車通だったので、夜間部の生徒とはほとんど接点がありませんでした。しかし、同じ寒河江の滝田さん（現東京同窓会副会長）が、「後世に残そう我らの証」のタイトルで夜間部の文集作りを呼びかけた文章を読んで、自分が見落としていたことに気づきました。定時制の方々も全日制の我々と同じように青春時代を過ごしていたのは同じ校舎だったということです。私は今その繋がりが通奏低音のように互いに響き合っている思いがしています。

そして前副会長の丹野さんと役員会でご一緒できたことで、ぐっと蛍雪会に近づくことができました。丹野さんは東京同窓会活動にとても熱心にかつ積極的に取り組まれて来られました。いろんな場面で蛍雪会の方々とお話する機会を作ってくださいました。そして山形県事務所、山形県人会とのパイプ役ともなり、我々を引っ張ってくださいました。感謝はもちろんですが、

その一所懸命さに敬服の念を禁じえません。

今は山形東高校の夜間部はなくなってしまいましたが、私の高校時代にはちゃんと夜間部があったことを忘れません。そして皆さま方の文集に載せてもらえたことを誇りに思います。

# 父（伊藤 辰雄）と東高夜間部

山中・山東東京同窓会（43年卒）**佐藤 佳代子**

これは、1983年 山形県教育センター発行の「山形教育」に載せた父の「私と定時制教育」(働きながら学ぶ生徒と共に36年）を基に書きました。

父は富本村岩野（現村山市）の小作農に10人兄弟の８番目に生まれ、大家族の中で育ちました。当時の山村における農家の生活は機械化された今日では想像もつかない肉体労働で支えられていました。祖父は学問の大切さを説き、健康にも恵まれて高小卒まで８年間皆出席だったことを、父はいつも私達に話していました。

昭和12年、山形市にある魚問屋の番頭（店員）に行く話が持ちこまれ、山形には夜勉強する中学校があると聞き、通学できるなら山形に行こうと決心しました。

山形夜間中学は、向学心に燃える勤労青少年の熱望に応えて山形中学校校舎を使用、昭和８年に県立となり、修業年数も５年間となりました。山形中学の先生方が兼務され、怠惰に陥りがちな生徒達をいつも励ましてくれたそうです。

そして、昭和21年より、母校である山形中学校夜間部に数学教師として勤めることになりました。

最初に担任した２年４組の生徒さん達の並々ならぬ労苦と向上心にはとても勇気づけられたようです。その後も生活態度が立派で目的意識をはっきり確立してた生徒さん達は、卒業後は社会の各分野で活躍なさったようです。

―――ここから抜粋―――

昭和23年山形中学校夜間課程（前身山形夜間中学）も山形第一高校定時制（現山形東高校定時制）となり、専任教職員も増員され、生徒数450名という名実共に誇りうる夜間定時制となった。

私は昭和50年、教頭拝命まで担任をして殆ど４年毎に卒業生を送り出してきたが、本校の場合、30年代をピークに生徒数減少の一途を辿るようになった。昭和44年度以降は入学志願者数は募集定数を下まわるようになってきている。

しかし、こうした定時制に学んだ生徒が社会に果たした功績は極めて大きいものがあった。若年労働力をいかんなく提供してきたことが、わが国の高度経済成長期を迎える原動力となったといっても決して過言ではないと思う。

その間、全国的に各県高校定通教育振興会を設立してその振興を図ったにも拘わらず、企業が全日制と差別をしたり、学歴偏重の風潮が高まり、次第に全日制指向が強まって、定時制は全日制へと鞍替えしていった。これは「学校は学問をするところというより、卒業の資格を得るところ」とするところに根本原因があり、社会は実力ではなく学歴を重視するということが今なお強く根づいているからではないかと思う。

定時制教育の曲がり角と当事者は種々検討を模索しているが、98%近い高校進学率を示している今日、高校教育制度そのものの見直しと、生徒の能力、適性に応じた教育制度を確立し、学歴ではなく、そこで学んだ実力を評価する新しい社会の再生を期待してやまない。

―――――――――――――――――――――

と、父は願っていましたが、残念ながら 1997年、東高の定時制・通信制課程は閉じられ、県立霞城学園高校（定時制・通信制課程）が開校しました。

現在でも働きながら学ぼうとする人は、たくさんいると思います。その道を閉ざさず、定時制を残していってほしいと思います。

# 彫刻家・吾妻兼治郎さんを悼む

## 「美術教育にも熱い思い」

山形新聞掲載　　多摩美術大教授 **木島正吾**

イタリア在住で山形市出身の彫刻家、吾妻兼治郎先生が１０月に９０歳で亡くなられた。

国内外で数々の賞を受け、バチカン美術館に東洋人として初めて作品が収蔵されるなど、ミラノの名誉市民として尊敬を集めていた。順風満帆に見える人生だが１９年前、ミラノのアトリエでうかがった話は、戦争に振り回された波乱に満ちたものだった。しかし、その困難に打ち勝ち栄光を収めた功績は、山形県民、日本人の誇りであり、多くの人たちに希望と勇気を与えてくれる。

吾妻先生は１９２６（大正１５）年に鋳造業を営む家の次男として山形市に生まれた。家の手伝いをしながら「なぜ家が貧しいのか。すばらしい鋳物を作っているのに自分の家の屋号を打てず、他の家の屋号を打たなければならないのか」と疑問を持ち、下請けの仕事をしなければならない社会の不条理を既に感じ取っていた。１７歳の時、特攻隊に志願。「敵地へ行って戻ってくるギリギリの燃料しかない。高く飛べば燃料は減らないが敵のレーダーに見つかってしまう。低く飛べばレーダーに映らないが燃料を多く消費する。どう操縦するか。その経験は、後の人生に大いに役立った」と語る表情は誇らしげだった。

終戦となって山形に戻り、彫刻を勉強するために芸大を受験しょうとしたが「高校を卒業していないことが分かった」。２０歳で夜間高校に入学し、２４歳で東京芸術大彫刻科に合格。「芸大にはビリで入った」のだという。ある日、担任に呼び出され「田舎に帰って家業でも継いだらどうか」と退学を勧められ、「１日考えさせてください」とその場を切り抜けたものの、悔しくて涙がこみ上げてきた。翌日「もう１年勉強させてください」と懇願して許してもらう。それから必死に努力して４年生の時、新制作展で初入選し芸大を首席で卒業する。専攻科に進んだ２８歳の時には第１８回新制作展で新作家賞を受賞した。

猛勉強の末に３０歳でイタリア政府給費留学生として国立ブレア美術学校のマリノ・マリーニ教室に入学。「当時はフランスが人気だったが、今泉篤男先生（米沢市出身の美術評論家）にマリノ・マリーニがいるクラスがいいと勧められた」からだった。「西洋の造形を学ぶことは大切だが、日本の精神を忘れてはならない」というマリノ・マリーニ先生の教えを心に刻み、熱心に取り組む姿勢を評価され卒業後は助手になった。

ある日、アトリエに入るとストーブに燃やす薪が床に崩れていた。その自然な美しさに感動し誕生したのが「MU（無）」シリーズである。「何でもない空っぽの穴が大切なのだ」という言葉が示すように、禅思想をもとにした作品は高い評価を得て彫刻家、吾妻兼治郎の名を不動のものにした。

吾妻先生は美術教育にも並々ならぬ情熱を持っていた。「君は毒キノコではなくマツタケのような学生を育てなさい」と言われたことを今も忘れられない。先生とは彫刻家と画家の違いはあるものの、山形出身、新制作展での受賞など共通点もあり、ミラノでは山形の後輩として周囲の人たちに紹介していただいた。勇気をもって多難な人生に挑み続けた偉大な彫刻家、吾妻先生のご逝去を悼み、謹んでご冥福を祈りたい。

（多摩美術大教授・木島正吾、山形市出身）

※吾妻兼治郎さんは平成２８年１０月１６日逝去、90歳

吾妻兼治郎
（山形第一高校夜間部卒）

# 健児の幾千

# 山形東高等学校夜間部東京同窓会に尽力された人達

後藤敏男

伊藤辰雄

鈴木良助

東海林寿和

安孫子市朗

平岡健志

江口佐一郎

中山良弘

丹野弘三

深瀬守巨

髙橋満男

鹿納幸三

中村浩三

山川憲夫

庄司恵美

伊藤由巳

会田広策

後藤勝義



# 同窓会を支えた人々

同窓会を支えた人々（伊藤辰雄先生を囲む）

# 思い出

**木村 良夫**（昭和25年卒）

## 【入学時の思い出】

昭和20年４月に入学した。アメリカ軍の空襲により東京、大阪、名古屋等の大都市や工場群が次々と破壊されさらに沖縄本土にアメリカ軍が上陸を開始するなど太平洋戦争末期の頃でした。

私たち少年も連日のように勤労奉仕に駆り立てられ、勉強は殆ど出来ない状況でした。しかし、そんな中でも夜間中学校は昼働いている勤労学生のための学校であり、授業は正常に行われていた。勉学への想いを強く持っていた私は、勉強が出来る夜間中学に入学出来たことに心躍る思いであった。

## 【最初の登校日】

寒河江から左沢線で汽車通学であった。北山形駅前で左沢線通学者は、縦列体系に並ばせられて、服装検査を受け、上級生指揮のもと行進で集団登校した。途中で不慣れなため、巻いたゲートルが緩み、上級生の叱声を浴びながら道順を覚えることも出来ずに学校へ到着した。教室は灯火管制下であり、窓に厚い黒幕を垂らしての授業であったが、当時の状況下で勉強できることの有難さを強く感じました。

放課後、帰りは街灯もなく、全くの暗闇で駅への道を覚えておらず、途方にくれ下駄箱の前で立ち尽くしていた。暫く経て、寒河江から通学の上級生が困っている小生を見つけ駅まで同道してくれ、地獄で仏の思いであった。

70年前の事であるが、いまでも印象深い思い出である。

## 【左沢線の通学列車削減】

昭和20年８月の敗戦後、灯火管制や集団登校は廃止されたが、物資不足で困難な時代を迎えることになる。特に、石炭不足で通学の足である列車の運行本数が削減され通学に多くの不便を余儀なくされた。本数削減に伴い列車の混雑の度合いも増しデッキに立ち通しで帰ることが多かったが、さらに乗れない場合には無蓋貨車に乗ったことも何度かあった。登り勾配に差し掛かると蒸気を強く出すため、その都度機関車から吐き出す火の粉を含んだ煙が無蓋貨車に乗っている我々に容赦なく降ってくる、慌ててマントを頭から被って防いだものである。

それでも帰りに乗れるうちはまだよかったが、石炭不足が深刻度を増し、支線である左沢線は更なる本数削減が行われ、４時限終了後に乗って帰れる列車は遂に無くなってしまった。放課後宿泊できるところを確保しなければ授業を受けることが事実上不可能になってしまったのである。そこで、山形市に親戚や知人もなく宿泊出来る処を確保出来ない人のため、寒河江から通勤されていたＦ先生のお骨折りによって、小白川町の寺院本堂を借りることができ、なんとか通学できることになった。ただし宿泊所の寺院は学校を挟んで北山形駅の反対側に位置し朝一番に乗るためには朝４時半頃起床しなければならなかった。放課後月を仰いで宿泊先に向かい、翌朝同じ月の残月を見ながら家に帰る生活であった。

## 【共同生活】

上記の生活を短期間したが、その後ある縁に恵まれ山形駅に比較的近い十日町に６畳一間を借り、寒河江より通学の同学年５人で夜の共同生活を送ることになった。

授業が終わって宿に着くのは午後10時で早速持参の弁当を広げ、夜食をし、12時過ぎまでは今日の復習や予習をしながら、お互いに切さ琢磨する勉強の時間であった。その後６畳間に５人の布団を敷いて就寝、翌朝６時前には起床し朝の一番列車で寒河江に帰る生活が続いた。当時は電力不足でたびたび停電しローソクの灯で勉強したのも懐かしい思い出である。

「三人行なえば、必ずわが師あり」と論語にあるが５人の共同生活で得ることが多かった。多感な時期に、苦労しながら勉学し、寝食を共にした仲間は何物にも代えがたい友で70年を経た今も交流があり、離ればなれに住んでいるが心の友である。

## 【我が人生の原点】

昭和24年４月に試験を受け、他校生を含めた

数人と共に山形第一高校の３年生に編入学した。同じ校舎で、夜間部と昼間部と両方の学生生活を送る貴重な経験をさせて頂いた。

夜間部も昼間部もともに良いところが多かったが、戦後の混乱期に苦労して勉学に励んだ夜間部のほうがなつかしい。

夜間中学時代にいろいろと困難な事も前向きに捉え、逃げずに立ち向かうことの大切さを学んだ。

「一切は心より転ずる」であり、プラスの思いがプラスの出来事を引き寄せてくれるのではないかと思う。

このようなおもいを育んでくれた夜間中学時代は、我が人生の原点である。

## 夜間部時代の思い出

**後藤 敏男**（昭和25年卒）

私が山形中学校夜間部に入学した動機は、終戦後長兄が戦地から帰還したので、自分の将来を考慮し、せめて中学程度の学力を習得しょうと考えたからだった。そこで地元の寒河江中学校（現高等学校）に問い合わせたところ、年齢が離れ過ぎていると断られ、菩提寺の住職から薦められて夜間部に受験し、幸いにも二年生編入学が叶った。

私が在籍した組名は「勇組」と称していた。勇組の殆どが復員者で、若くして戦争に参加した人々だった。従って年齢もバラバラで驚いたのは私の姉と小学校同学年で、戦車学校を卒業し戦争に参加した方もいた。でもその方は三年に進級せず物理学校（現理科大学）に進学された。他の生徒の中に師範学校に進学した方も二名いた。私も中学卒業だけでなく上級学校に進学すべきと考え、三年の二学期以降休学して受験準備に入り、その結果、昭和23年春、中央大学専門部法律学科に入学することが叶った。

私の通学は、左沢駅から沢（ザワ）線で北山形駅まで行き、同駅から学校まで徒歩で通した。左沢駅から若月君他数名と一緒だった。思い出すのは若月君が中央大学在学中から司法試験に挑戦し、何回目のときだったか、希望が叶えそうだと自信をもって知らせてくれた。しかし失敗し、帰郷途中古河駅近くの鉄橋から飛び降り自殺してしまった。残念至極で慙愧にたえない。

在学中の思い出について二、三述べたい。

その一つは二年の一学期授業の合間に上級生数人が風紀委員と称して教室に入ってくるなり、大声で「登下校の途中上級生に敬礼しない者がいる。大変失礼だ。また煙草を吸っている者がおり、生徒の本分におとるもので絶対禁煙すべきだ」などと述べたてた。我々は黙って聞いていたが、彼らの話が終わった頃合い、級友が「君達は誰に話しているのか」と問いかけ、「我々の殆どが戦争に出征し命をかけて戦ってきた。また煙草も校内では吸っていないし、今さら禁煙と言われても無理だ。敬礼も街中では先輩かどうか分からないので敬礼のしょうもない。けっして学校の尊厳を損なうことのないよう、また生徒の本分を弁えている」と説明したところ、彼らは一言の弁明もなく退室して行った。

次の思い出は、運動会の出来事で、紅白に分かれての競技の半ばころ、競技にも参加せず、しきりに「もっと頑張れ、負けるぞ」などとしきりに野次を飛ばし大騒ぎしていた。そこで私が彼らの前で「何を言っているのか、相手方の先輩達は競技に参加しているのに、君達は野次だけの参加か」と失礼と思ったが怒鳴ってしまい、大変失礼したと反省している。

次に我々同窓会東京支部の再出発についての話である。昭和34年春頃だったか、私の職場に深瀬氏が訪ねて参り、夜間部同窓会の再生について協力してくれとの話だった。私は三年の二学期以降休学し、上級校への進学に励み、どうにか中央大学専門部法律学科に入学したのに、世話になった先生方や同級生に何の挨拶もしない不義理をしており、卒業もしていない私がたとえ協力の要請があっても参加できないと要請を断った。しかし深瀬氏は伊藤辰雄先生の意向でもあると言われ協力を約束してしまった。

それ以後深瀬氏と連絡をとりあい試行錯誤を繰返した。同窓会名簿や資料もなく、同窓生の動向も不明で思案投首の連続だった。

しかし深瀬氏の努力と後輩諸氏の惜しみない協力で会合を重ねた結果、どうにか同窓会開催の可能性に光が見えてきた。

山形東高等学校夜間部東京支部総会を開催するためには支部長に相応しい方を探す必要があり、諸先輩の中で防衛大学教授の丹羽さんを訪ね要請したが断られ、日本赤十字病院で課長を勤めていた神保先輩に就任の承諾を得て、どうにか支部の体裁が整った。

今省みると、後輩の数多有志の惜しみない協力には言い尽くせない感謝の気持ちで一杯で、諸氏の協力なければ今日の東京支部は存在しなかったと言っても過言ではない。 だが、廃校により将来を考えると慙愧に堪えない。

## 思い出話 そして感謝

**江口 佐一郎**（昭和27年卒）

第二次世界大戦、そして終戦、180度回転の民主主義社会、終戦は 尋常 高等小学校(現在の中学校１年生)の時で、成長期の年代としては恐ろしい変化であった。現在では戦争を知らない大人達が社会を仕切っている。周りを見回すと同期の知人はだんだん少なくなっている。もう84歳、まだ84歳、どちらを選べば良いか、まーまー元気なほうと自覚しています。こんな時の原稿の依頼です。何を書けばよいのか迷っています。

小学校時代は第二次世界大戦が始まり、もの不足、教科書もあまりない、毎日が勤労奉仕の日課であった。そして昭和20年８月15日終戦、昭和22年４月夜間中学に入学となり、教科書は主にガリ版スリの本の様な記憶で、ノートに書き取りが多かったと思う、昭和23年には制度改正により、山形第一高等学校、山形東高等学校となり、学校での思い出としては、入学当初は何となく通学していったような気がする。高学年になって教科書等も充実して、その他の書籍も読むことが出来、人間として成長したと思う。

その頃より自分的には理工系に進めるかな、と考えるようになった。当時数学は板垣先生、幾何は伊藤先生、物理は佐藤先生、特に板垣先生には当時の教科書より先の「微分学」について、授業前１時間ほど毎日のように教わりました。このことは大学進学、そして職業等、私自身の一生を決めることになったと思います。また当時、部活動の予算が取れると言うことで、それでは数学部をつくろうと、当時、私と山田精徳君と共に部員を集め、勉強会を行った。予算については、「計算尺」を購入した。計算尺とは、当時、足し算、割り算もソロバンでも出来るらしいが大変難しい、その掛け算、割り算が出来るのが計算尺である。但し、計算尺の目盛りで数字を読むため誤差があるが、現在の電卓が出来るまで20年程度通用したものです。伊藤先生には東高同窓会東京支部の同窓会に出席を戴き長い間、大変お世話になりました。佐藤先生は東京物理学校卒（現在の東京理科大学）で、先生は15cm程度の小さな計算尺を持っていた。何となく、物欲しげな顔をしていたのではないかと思うが、あげようか、と言ってくれ、いただきました。物理のこと、当時万有引力、遠心力の授業があった時「万有引力と遠心力が釣り合う様な条件で地球の周りを回転させれば落下しないで宇宙を回転することが出来るのではありませんか」と質問したことがあります。万有引力とは重量のある２個の物体がある場合、お互いに引っ張りあう力が作用する。これはリンゴがなぜ地面に落ちる、ニュートンの話です。遠心力とは重量のある物体を円軌道で回転させると、円軌道の外側に飛び出す力が作用する。従って、引っ張る力と飛び出す力が一致すれば物体は落下しない。ところが、後になって、忘れた頃、引力と遠心力の式を書きなさいと、試験問題に出た。私も忘れた頃で、本にも質問の文面は無かった、出来なかった、悔しかった。その後 山田精徳君は東京理科大学の数学科を卒業して山形に帰り高等学校の数学の教諭となった。私は日本大学理工学部建築学科を卒業、一級建築士の資格を取得、設計事務所の業務を行い現在に至っております。

高等学校は数年間の短い期間ではあるが、振り返って見れば、人生の出発点でもあり、その人の一生を決めるところでもあります。幸いにして私自身は近親の人々、また、多くの人々に支えられ84歳の現在まで無事過ごせたことに感謝申し上げます。

# 無蓋車通学の思い出

**寒河江 實**（昭和27年卒）

東京大学は、江戸時代・幕末の開成所に出発しているということは人口に膾炙していることであろう。我が母校、山形東高等学校の場合は明治15年｛1882｝山形縣師範學校内に中学學科が設置され「山形縣師範學校　中學師範學豫備科」いうのが始まりで、明治33年山形縣山形中学校と命名され、その後数回の校名改称があり現在に至っている。

私達の学年は、在校中に３回の校名改称を経験して同窓生の一員となっているが、それは、第二次大戦後の学制改革による混乱期であったからでその経過は、入学試験に関する「入學考査日程並ニ受査心得」には「山形縣立山形中學校二部」とあり、昭和22年｛1947｝３月30日の日付で山形県立山形中学校長木村芳三郎名義で「入學考査で銓衡の結果夜間授業を行ふ課程第一學年合格を決定しましたので・・・」

という藁半紙ガリ版刷りの合格通知をいただいている。　翌23年３月31日「卒業證書」として「中學校の課程を修了した」とする山形県立山形中学校併設中学校長木村芳三郎名の証書がある。

「成績通知票」の正しい名称を見てみると

｛平成11年10月29日山形新聞夕刊参照｝

二十二年度は「山形縣立山形中學校（併設中學校）」

二十三年度は「山形縣立山形第一高等學校」

二十四年度は「山形縣立山形第一高等學校夜間部」

二十五年度は「山形縣立山形東高等學校」となっている。

これは、私の手元に残った資料で23・24年度はガリ版刷りで校長木村芳三郎・主事黒木武夫となっていて、このような経過を経て27年３月に卒業したのであった。

＊　＊　＊

［真昼は人生　実務の上に　夜間は修養　教えの園に・・・］土井晩翠作詞の山形夜間中学校歌にあるように昼は働き、夜は授業という勤労学生としての生活が始まった。汽車通学といわれ、上山方面と通称ザワ線方面天童方面の三方面の通学生であった。

当時の国鉄は蒸気機関車で本数も少なく、時間も現在のような正確さはなかった。夜の最終授業が終り都合のよい汽車に乗るため、学校から山形駅をめがけて脱兎のごとく駆け出すのが日課であった。時には間に合わなかったり、運休になったりすることもしばしばであって思案に暮れて駅でたむろしていると、駅員も心配してくれて朝の始発まで駅舎で過ごしたり、線路上を集団で上山まで歩いて帰ったこともあった。

途中で貨物列車と遭遇し列車を止めたこともあって、このことが学校と国鉄との間で問題になり勤労学生優遇措置として貨物列車に乗車することが認められたようだった。

優遇措置とはいいながら、当時としても違法行為であったのだろう。プラットホームの無い場所で長い列車中の無蓋車｛屋根のない貨物車｝に乗車が許可され、飛び乗ると砂利や石炭の上であったり運のよいときは空車の時もあった。

普通列車と違い、スピードも鈍く時間的にもまちまちであったように思う。須川の鉄橋にさしかかる前に汽笛が鳴らされる。しばらくすると蒸気の熱湯の雨が降ってくるのである。鞄を頭にかざしたり、冬はマントをかぶったりしたものだった。今から65年前の汽車通学の熱い思い出である。

働きながら学ぶということに何の抵抗もなく、大学も夜間部に進学した。卒業と同時に研究室に残ることになり、修士課程・博士課程を修了して平成14年に定年退職するまで言語の研究者としてつとめた。現在は、後期高齢年金生活者として世間の移り変わりを言葉を通して見つめながら過ごしている。

［三省堂「新明解国語辞典」二・三版主幹補助者］



# 馬見ヶ崎河畔・偶然の思い出

**寒河江 實**（昭和27年卒）

私の夜間部での思い出の一つとして、夏休みが終わる一週間ぐらい前から、クラスの一部の人々と学校が始まるぞと言う挨拶のようなことをするのが慣例となっていた。これは自主的と言うよりは、最初は大川　廣海先生の発案であったように記憶している。夏休み後、不登校が多いことを懸念したのだということだった。

昭和24年頃だったかさだかではないが夏休みの終わりの数日前、文芸誌かクラス誌の打ち合わせということで土曜日の午後に数人に声をかけて、学校から馬見ヶ崎河畔まで散歩がてらわいわい話しながら歩き、河原の土手で午後のひとときを過したことがあった。セピア色になったスナップ写真がこの時を思い出させて懐かしい思いをしている。

詰め襟の中に高橋　喜久雄氏の凛々しい姿が写っている。氏は、都会から山形へ疎開してきた一寸垢抜けした私たちより若干年上の級友でした。「生徒歌」について朝一先生から話があって、高橋氏は青春の情熱を込めて頑張っていました。最終的には、アララギ派の結城哀草果の下へ足を運ぶなど努力をしていたようです。勿論、朝一先生・大川先生・佐藤勲先生も相談にのってくれていました。私は、カタカナ語を用いることが嫌いでした。「イデアか理想か」の話題にカタカナ語派が多かったので、不愉快な思いをしたことを今でも思い出します。卒業後は、皆とはほとんど連絡なしでした。

私が大学の研究室に所属したのは、昭和37年でした。研究室の主任教授の鞄持ちで当時の文部省大学設置基準局に行ったとき、偶然にも高橋　喜久雄氏と再会することが出来たのです。驚きでした。そのときは、ゆっくり話することもなくまた互いに忙しく、その後二三度逢って山形のことなどを懐かしがったものでした。

東京同窓会へは、江口　佐一郎君の強い勧誘に応えて参加するようになったのです。参加して驚いたことの一つに後輩達が「生徒歌」を声高らかに合唱していることでした。私は、「生徒歌」が完成したこともどのような歌詞になったのかも知りませんでした。思えば、卒業前年は不登校を決め込んでいたのです。従って、歌うことも出来ません。

高橋氏の生前、お逢いしたときに後輩たちと「生徒歌」のことを話したことがあります。どういう訳か彼はあまり乗り気にはなりませんでした。偶然のもう一つ。ある日の教授会で新任の先生の紹介がありました。山形の夜間部で教わった大宮壮策先生でした。私と大宮先生の関係について、校内ではしばらく話題になったものです。現在、天皇陛下のことが話題になっていますが、大宮先生が元気なら専門的な学説をお伺いしたいものです。

人生にとって偶然の出会いというものが本当にあるのだと実感したものでした。

因みに、大川先生は新人物往来社より「出羽三山の四季」という著書。大宮先生には八千代出版社より「宗教法の研究」という著書がある。

# 駆け足の２年間

**尾形 武志**（昭和28年卒）

私は上ノ山駅からの通学生だったが、田んぼの畔道を小走りに急いで駅へ通っていたのが懐かしい。

山東高夜間部には３年生から２年間の在籍で短かく、授業が終わると帰宅の汽車が気になり、学友をつくる時間のなかったことが今でも残念でならない。

在学中の想い出のひとつとして、今でも忘れられないのが４年生の多分夏ごろの事である。その夜の授業が終わり、山形駅へ向かうところへ級友のＫ君が自転車で送るという。つい好意に甘えて乗せてもらった。自転車は駅の構内まで入ってとまった。途端に駅前の交番のお巡りさんが掛けて来て「君たちっ２人乗りはいかん!! ちょっと来い」云われて交番所で事情聴取が始まった。そのとき、ゴロツキ記者（と云うと失礼かな）が入り込んで来て、お巡りさんと口論になった。なんでも「言論は自由なんだ」とかなんとか云っていたようだった。そのうちに２人が取っ組み合いを始めた。私は汽車の時間が気になっていたところ、お巡りさんが取っ組み合いながら帰ってもよいと云ってくれた。そそくさと汽車に乗って帰ることができた。翌日Ｋ君にその後の経過をきくと、例の記者は公務執行妨害で豚箱に入れられたとのことであった。われわれ２人の件はどうやらどっかへ飛んでいってしまったのであった。ところが数日経ってから、山形地方裁判所から出頭するようにとの通知があった。親父は不審がっていたが、印鑑を持って期日に出頭したところ裁判が開かれると云う。例の記者公務執行妨害を起こした事件につき証人台に立たされたのである。証人宣誓をさせられて、二言三言のべたところで裁判長が「君、美辞麗句はいいから‥‥もう下がってよろしい」と云われたので何かホットして法廷を出た。係員に日当が出るからと云われてびっくりしたが、その金は即参考書代になって嬉しかった。因みにＫ君は裁判所の車で学校まで送ってもらったとのこと。

卒業後の翌年、幸いにも国家公務員試験の当時は高卒の４級職（税務）に合格し、東京国税局管内で38年間勤務し無事退職することができた。

在職中、訟務関係の仕事に従事したこともあるが、高校時代の法廷事件を想い出して何か懐かしい気分であった。退職後は税理士として今日にいたっている。

歴史ある山東高定時制が平成11年に閉じられてしまい心から残念でならない。

**山東高夜間部よ‼ ありがとう。**

# 山形東高（夜）28会の日記より

**鹿納 幸三**（昭和28年卒）

蔵王連峰には紅葉前線による自然の美しさが映しだされ絶好の季節に入ったと思ったら11月４日に山形竜山に初冠雪になり紅葉と白雪のバランスは最高です。

去る９月29，30日に山形駅西口に仲間13名が集合（秋田２名、東京２名、山形９名）参加していただき、早速マイクロバスで母校訪問、校長先生が不在でしたが田村光江教頭先生に挨拶、先生から大歓迎の言葉に頭が下がりました。本校玄関前と「蛍雪の碑」の前で記念撮影終り。（ゆらら温泉）に移動、バスの中は和気あいあいの昔話で賑やかな会話でした。

総会が無事に終り、宴会に入り、83歳の年齢とは思わぬ元気な笑顔で杯を交わす姿は青春時代を思い出しながら昔話に花を咲かせ夜、時間を忘れての大宴会でした。

懐かしい思い出を残し、28日会の名を残し明日から健康に充分注意して老人力を発揮して前向きに、明るく、楽しく生活したいものです。

東京支部在籍40年お世話になった28年卒 鹿納幸三（山形県上山市在住）

**① 此の部屋に涙なんかありやしない**
**こ宵（よい）も歌おう我が友よ**
**楽しさは酒の中から浮いてくる**
**酒の中からドントドントどんと浮いてくる**
**② 盃に映る光を飲みほして**
**元気で歌おう我が友よ**
**楽しさは酒の中から浮いてくる**
**酒の中どんとドントドント浮いてくる**
**終わりに全員で合唱**

# 歌集「悠 遠」から

**齋藤 一英**（ 昭和28年卒 ）

母校負け続けるときも旗ふりて
　歌う応援歌「おお勝利」

住み込みの友もおりたり学友の
　居眠り知れて教師とがめず

雑草といえど花咲く道歩む　われら戦後を生き延びて来し

敗戦のわれらに希望あたえたる
　フジヤマのトビウオ　ローマに死せり

今の平和続けと思う軍民の人ら死にたる結果得しもの

オリンピックに集う82ヶ国が
　戦うとその戦いぞよし

戦いに死するのは花の散るように
　美しきものと教わりし吾

まっさきに見るふるさとの天気予報青年までを住みし北国

雪降らぬ土地に越し来て五十年
　子らに語りぬ雪下ろしのこと

オリンピックの聖火持ちきて高台に
　挙げる少女の髪輝けり

花あまた咲く五月くる野道ゆく
　老齢われの生も華やぐ

夜を学び昼を働く子ら集う
　今宵卒業の歌声ひびく

学業と歌に過ぎたる四年間
　最終章に沸くもののあり

働きて学びし夜学居眠りの
生徒とがめず終えし春の夜

寒風のすさぶ北国思いおり
子と鍋かこむ昔も今も

五人の子生み育てたるわが母の
九十一歳のつよさ思えり

路地裏にサンマを焼きて立ちこめし
煙のありぬ古き故郷よ

## 私の人生を変えた東高夜間部

**鈴木 諄**（昭和28年卒）

私は、1933年（昭和８年）４月、満州の首都新京市（現在の中国東北地方長春市で生まれました。父は日本のＪＲ（旧国鉄）にあたる満鉄の職員でした。満鉄の職員は当時の花形サラリーマンで、日本のサラリーマンの平均が月給40円のころ、満鉄の職員は月給70円以上で、贅沢な暮らしでした。

1945年（昭和20年）８月15日、私は、国民学校（現在の小学校）６年生の夏休みで、中国と朝鮮半島の国境を流れる鴨緑江に１人で遊びに行っていました。まさか日本が戦争に負けるとは思いもしなかったのです。日本の敗戦と同時に、満州のいたるところで暴動が起こりました。敗戦の混乱の中で列車は動かない。電話・郵便あらゆる連絡網が途絶えました。はるか離れた国境の鴨緑江から、満州の中央部に位置する新京まで、荒涼たる満州の大地を、１年かけて放浪の旅が始まりました。

ボロボロの乞食の少年が「盗み・かっぱらい」で生き抜くしかない。来る日も来る日も「野垂れ死に」が待っている。言葉ではあらわせない経験をしました。

何度も死にそうになりながら、奇跡的に家族と再会できました。再会の喜びも束の間で、1946年（昭和21年）の秋、「国共内戦」が始まります。「国共内戦」は東北地方（当時の満州）が最初の攻防戦でした。新京は、東北地方の中央に位置し、満州国の首都でもあった関係で最大の激戦地となりました。私たちは連日、戦車が激突し、大砲や迫撃砲の弾丸が飛び交う激烈な市街戦の中で暮らすことになりました。

いま、中東のシリアの内戦で、いたいけな赤ちゃんも含めて多くの民間人が犠牲になっています。戦争で殺されるのは兵士だけではありません。私たちも同じでした。

帰国した私たち家族を待っていたのは「貧乏」でした。敗戦のショックで父はアル中になり、どの仕事も長続きしません。長崎県の佐世保軍港に上陸してから転々と各地を回り、母の生まれ故郷であった山形に流れてきました。やっと落ち着けると思ったのですが、私の東高１年の１学期の終りころに、父が借金で首が回らなくなって、母・弟・妹を連れて北海道に夜逃げするということになりました。私は借金取りたちに「父が飲んで作った借金は支払う必要はない」とかけあって事なきを得たのですが、北海道の家族たちに仕送りをするため、夜間部に移籍したいと職員室に相談しました。先生たちからは、日本育英会の奨学金を世話するから、何とか昼のままでがんばれと激励されました。それでも、私のワガママを認めていただいて、２学期からは夜間部に移籍することになったのです。それからの私は、食うや食わずのスレスレで生活し、昼間の仕事で得たお金はできるだけ家族の仕送りに当てました。しかし私には、満州のあの放浪の体験があったので、食うや食わずの生活は少しも苦になりません。

何よりも嬉しかったのは、素晴らしいクラス・メートを得たことでした。それまでの私には小学校の時代の幼い友達しか記憶しかありません。山形に来てからの途中入学での中学の後半は、何しろ放浪と引き上げ期間で小学校６年の２学期から中学１年までの勉強がスッポリ抜けているために、授業がサッパリわからない、山形弁がサッパリわからない、早くみんなに「追いつけ追い越せ」に無我夢中で、泣きながら勉強するだけでした。まったくの孤独で友達もできなかったのです。

ですから東高夜間部は、私にとってはまさに天国でした。昼とちがい高校生と同時に社会人でもあります。仕事の苦労もしています。この仲間と毎日夜に会えるのですからたのしいことこの上なしでした。ただ、満州での出来事は誰にも話せませんでした。

「想像を絶するイヤな記憶」は思い出すのもツライものです。

楽しい思い出はまだあります。なぜかわかりませんが、夜間部に移ってからほどなくして、私は自治会長にも選ばれました。その後、西高校から、運動会の応援をしてほしいという依頼があり、私たちは小躍りして喜びました。何しろ、あこがれの女子高からの依頼です。「二つ返事でＯＫ」したのは当然です。運動会では、私が、頭に鉢巻を締め、借り物の羽織・袴を着て、西高校の卓球台の上で仁王立ちになって、両手の扇子を打ち振りながら、クラス・メートがみんなで大声で叫ぶという具合に、女子高ではありえないシーンが披露されました。いま振り返ってもこの快挙は夜間部の歴史上ただの１回きりの出来事です。私はおかげさまで、83才になった今も講演が忙しく走り回っています。私という人間を作ったのは、東高の夜間部です。仲間たちとのあの語り合いが、私にとっては、かけがいのない財産になっています。

## 夜間生の回想

**鈴木 良助**（昭和28年卒）

先月、久しぶりに学年会を催し、83歳の老青年が、時空を超えて悪ガキ時代に立ち戻り、深更まで青春を語り合った。

記憶も曖昧になり、『ホントかよ？』の茶々入れも相次いだ。真偽を確かめようと山東高に当時の生徒の状況を紹介したところ、興味深い調査資料を探していただいた。

入学した昭和24年は、毎日主食にも事欠く窮乏の時代であったが、夜間学生の殿堂としての母校の世評は高く、受験者178名、入学者121名と、厳しい倍率であった。どうにか入学はできたものの『働きながら学ぶ』という現実はきびしかった。例えば、前年、県下に定時制高校が新設され、１万３千人の新入生が生まれましたが、１年間に５千人の退学者が出ている。（県高校10年誌・昭34刊）準備不足もあったろうが、現実を甘く見ての就学は到底成立しないことを物語っている。

昨27年度の県内高校の中途退学者397名を原因別に見ると、学校生活不適応30％で、経済的理由は１％に過ぎない。

私たちのころ、修学を阻む最大の壁は生活困窮であった。まさに今昔の感がある。

仕事は農家、商店など家業を手伝う生徒が６割ほどで、残りが会社や官公署勤務。勤め先の都合で毎日のように遅刻する人もいた。

中には、親代わりに一家の大黒柱となり、弟妹の面倒を見る凄い仲間もいた。親に格別の負担を掛けていないと内心、自負していた私は、仲間の現実を身近に見て、首をすくめるばかりだった。

住居の状況は、当然自宅が殆どで、親戚・知人宅を併せると92％を占め、次いで雇用主宅５％、下宿３％となっている。「雇用主宅」とは、いわゆる「住み込み」の勤務で、私の高校生活の大部分であった。

通学方法を全日制と比べると定時制の自転車利用率が圧倒的に多い。深夜の，特に荒天時の自転車通学は想像以上に大変である。同学年の中では27名の仲間が、今塚、鮨洗、長谷堂などの各地から４年間の過酷な通学を成し遂げている。

住み込みの辛さは、自分の『時間の不足』である。勤務条件に差異があっても、自分の生計を稼ぎ出す苦労は何処でも厳しいと決まっている。定休日が毎月１日と15日。盆正月を除いては祝祭日も休めなかった。

昼間部に在籍する親友が語る授業の内容がさっぱり解らず、その時のショックは強く応えた。結局、夜学生全期を通じ、「解らぬことがあったら、また調べれば良いではないか」と言う土性骨を培ったことが最大の成果だと考えている。

米軍に接収されたプールが、昭和27年にようやく返還されたが、管理上の理由から特定日以外の夜間使用は禁じられていた。不公平な扱い

に憤慨したＳ君が首謀者となり、悪ガキ数名がこっそり教室を抜け出し、音を立てぬように気を配り、暗夜の水泳を楽しんだ。あとで真似した仲間が先生に見つかり、油を絞られたと聞いている。

最終学年になると、早引けして霞城館に入ったり、薬師公園に花見に行き、酒の回し飲みをやったりした。まずまず『平均的生徒』よりちょっと不品行程度の夜間生であった。

担任の大川先生は、国学院大卒で柳田國男氏に師事し民俗学を学んだ逸材で、温顔にして酒を愛す、風格のある大人であった。時に微醺を漂わせて教壇に立つこともあり、得意の『民俗学講話』に脱線するのを、深い興味をもって拝聴したことである。

昭和28年の卒業式次第には、優等賞、中村賞、同窓会賞のきらびやかな栄誉と並んで、皆勤賞19名、精勤賞14名（いずれも東校舎のみ）の氏名が燦然と記載されていた。辛苦に耐え、４年間の登校を挫けることなく実践した向学の心こそ、母校の校是『不撓不屈』の精神だろうとこみ上げる感動を抑えることができなかった。

## 夜間高校に感謝

**柳元 清三**（昭和28年卒）

昭和24年春、山高に行くのに、雪でバスの通らない雪道を橇（そり）に荷物を積んで母が尾花沢駅（旧）まで送ってくれたことが今も忘れることがありません。

小学二年生の時に大東亜戦争に入り、戦中及び戦後、数年満足に勉強ができない時代を過ごして、新生中学卒業近くになり、どうしても高校だけは卒業したいと思ったが、当時実家通学できる高校はなく、下宿して勉強するには、働きながら夜間の高校にいくしかないと、親を説得し、山形市内の親類を頼り、下宿し、その関係の会社に入り、16歳の時に三輪車の運転免許を取り燃料会社で、運送の仕事をしながら夜学に通いました。

三年生の春に働いていた会社が倒産し、働くところもなく、又下宿先にも居づらくなり、困っていた時、１組担任の柏倉　学先生に相談したところ、校舎横の夜間部の寮を世話してもらい蛍雪寮に入寮することが出来ました。数ヶ月間は、失業保険をもらって生活し、その後牛乳配達の仕事をしていたところ、柏倉先生の紹介で、市内十日町の丸六醤油店に、車の運転士として働くことが出来ました。車の運転免許が役にたって、配達の仕事を卒業近くまでやることが出来ました。

寮生活では、伊藤辰雄先生家族も同棟に住んでおり生活面でも色々とお世話になりました。寮生は新聞配達や牛乳配達等の仕事をしながら勉強も、熱心に頑張っているのを見て自分も励まされ勇気づけられました。同僚時代の寮生にはその後、弁護士や学校の校長になって活躍しているのを知り、うれしく思っていました。

高校時代の思い出としては、山岳部で蔵王山や、会津磐梯山に登ったことです。安達太良山近くの沼尻温泉に泊まり桧原湖畔のバンガロに泊まって、柏倉先生達と共に磐梯山頂に登ったことが忘れられない楽しい思い出です。

卒業も近づき、当時寮の近くにあった警察学校の募集広告を見て、警視庁に応募し、そこで面接試験等を受けて合格して、昭和28年春に上京し警察官となりそれから、41年間警察業務に携わり、無事に中間幹部として終えることがが出来ました。

現在、傘寿を過ぎて、元気に生活しておりますが、これも東高夜間部で働きながらも勉強し、卒業出来たことだと感謝しております。

15歳で親元を離れて、夜間部の４年間の生活は本当に良い経験でした。それを支えてくれた方々、特に担任の柏倉先生や寮の伊藤先生、又、寮生、同級生の皆様のおかげと深く感謝しております。



## 在学中の思い出

**阿賀 加代子**（昭和29年卒）

昭和二十九年夜間部を卒業、保母を志した私は、見も知らぬ横浜の学校に入学、卒業、就職、結婚とそのまま山形に戻らず、過ぎし日を数えて見ますと、山形を離れて二十年になりました。

二十年といいましても、過ぎてしまえば、あっと云う間の年月ですが、やはり苦しい日、つらい時、悲しい事を数限りなく経験させられました。それでも、私をここ迄支えて来てくれたのは、四年間、社会の波の体験と電灯のある教室で学んだ様々な事柄のようです。例えば、寒い雪降りの日、暗い雨降りの日、仕事で失敗し心の重い日等も休まず通い続けたあの真剣さ、がんばり強さを考える時、「どんなにつらくとも歯をくいしばってやれば必ず出来る。」という生きた教訓が現在も私の心の中に動いているようです。

それから、時間を非常に大切にする心。昼は勤め、夜は勉強の毎日、学生である以上少しでも勉強を休めば、必ず成績に響きました。私なりにやはり、少しの時間も無駄なく勉強に使った様な気がしてなりません。過去を振り返る間もなく、現在を大切に、それから先を考え、事を運んでいたと思います。

私は家庭の事情で夜間部に入学することになったのですが、その時、級にはじめて女子五人が入り、担任は伊藤辰雄先生でした。「一年生から入る女子は初めてなんだよ。四年間がんばる様にね。」と言われた事を今でも覚えて居ります。昼は洋裁店、夜は学校、の生活が一年過ぎた時、一諸に通っていた友達二人が辞めました。

「つらくとも卒業しなければ!!」という目標に向って進んでいたものの、二年の夏休みの時、私にも勤めと勉強の両立の厳しさにとても耐えられず、「女にとって勉強とは何だろう？」早く社会に出て、お金を取ることの方が我が家にとっても、私にとっても大切なのでは？」と、かなりの時間をかけて考えた様でした。思い切って、休み中の宿題を整理し、「辞めよう!!」この事だけを胸に入れ、先生の許に出かけたのでした。

先生はあの時、どんな話をして下さったのか、くわしい事は忘れましたが、結局は、思いとどまることになりました。それからの私は、洋裁から事務の方に変わり、又夜道を往復し、温かい、やさしい伊藤先生の励ましと同級生のおかげで四年間無事、通い通すことが出来ました。卒業証書をいただいたあの感激の日は、私の学生生活を通しての最高の喜びの瞬間とさえ、胸に焼きついております。

今でも、三月の卒業期になり、何処からともなく蛍の光が聞こえて来ると、心は高校生に不思議と戻る私です。そして、「やらなくては!!」という希望に燃えるのです。高校卒業は人より遅れ、涙した青春もありましたが、現在の私は、胸を張って夜間部卒業を誇りにさえ出来るのです。主人、中二の息子、小四年の娘と私の幸せな家族の現在なのです。

「自分で道を開くのよ。つらければがんばり、つらさを通り抜ける迄、努力するのよ。」と私の時代とは変わった現代で、理解出来ない事もあるようですが、私の歩いた経験を何かの参考になればと子供達に語りかける此の頃です。

（創立五十年誌より）

## 「最良のスポーツ」

**菊地 徳治**（昭和29年卒）

私は山形市の千歳山麓の平清水で生まれ育った。田舎の周囲は山ばかりで、子供の頃、近くの雷神山、春日山、戸神山、千歳山などが遊び場で、しょっちゅう山歩きばかりしていた。そのせいで遥か彼方に浮かぶ鳥海山に憧れを持ちいつか一回登ってみたいと言う気持ちを抱いていた。しかし、はたち前の山形に居る間は実現しなかった。あの神秘的な鳥海山をはじめ月山を含めた出羽三山には大人になって東京からお盆に帰省した際に走破した。私は山歩きが好きで山に興味があるのは子供時代の環境の

せいだろうと思っている。山はやはり素敵である。しかし、山には魔物が潜み危険性もある。山での遭難や転落事故等時々マスコミを賑わしている。そして時に多くの犠牲者を出す事故が起こったりする。一昨年９月27日、木曽の御嶽山が突然大噴火した。そして登山者57人が亡くなり現在も行方不明者が６人という戦後最悪の火山災害が起きてしまった。山は魅力があり愛好者は年々増えているがその愛好者の多くは一昨年のこの大惨事の報道を複雑な心境で眺めていたに違いない。私は趣味で30数年毎月一回団体で山歩きしているが仕事の傍らのスポーツ感覚なので場所にはこだわらない。近辺の日帰りや、遠方なら２，３泊程度のコースを選び数々の山を歩いている。

昭和52年に私が創設した東京都行政書士会登山クラブ（東行会）に所属し、長年リーダーをも務めていた。過去に南や北や中央のアルプスを登っている中で、過去に木曽の御嶽山の登山を計画したことがあった。しかし何故か理由もなくこの登山は企画倒れで未実施となっている。登りやすい山なのに何故登らなかったのだろうかと今、不思議に思う。２年前リーダー役を高齢のため後輩に譲ったが、リーダー時代、最大の気使いは山では絶対に事故を起こさないということだった。個人登山は別として登山グループには殆どリーダーが存在する。大抵、リーダーが登山の企画をし、仲間を誘い引率をする。だから、もし登山中に事故が起きたりするとリーダーは多大な心理的負担を負う事になる。御嶽山噴火のあの日、あの時間帯に巻き込まれた登山者たちは気の毒であり不運だった。しかし、急ぎ下山し助かった人もいた。亡くなった登山者には心からご冥福をお祈りしたい。だがあの事故はリーダーの責任ではない。しかし、リーダーは大層な責任を感じてしまう。日時をずらせばよかったとか、ああすればよかったと後悔の念にかられるかも知れない。山では御嶽山のような天災事変もあり、登山者の不注意事故もある。リーダーが全て責任を負うことではないが、かって北海道山中で起こった遭難事故のようにリーダーの判断力不足による事故もあった。リーダーには一種の動物的勘というか逞しい判断力が求められる場合がある。まず現場での判断力が大切だ。計画では危険をはらむ山には登らない、雪山には出向かない、天候急変等では引き返す速断力がある等々がある。

日本国内には現在気象庁が常時観測している火山は47ヶ所もあると言う。このようあな山は避けたいものだ。

リーダー時代、富士山に登頂して下山中、仲間が滑って軽傷を負った。又、高尾山で転んで骨折した者があった。しかし、死亡等事故がなかったことは最大の幸運であったと思っている。だが、登山中は常に気を張っていた。山は楽しいが危険も背中合わせだ。登山中に何が、どんな事故が起きるか分からない。だから必ず備えも必要だ。登山参加者には一回200円程度の傷害保険に加入して貰っている。これで山で怪我した者に保険が適用されるし、死亡時800万円程度の保険金が出る。これでリーダーは少しばかり精神的負担が免れている。それと一寸先は闇である。山とは限らず人間いつどんな災害に遭遇するか分からない。交通事故も多く、海外に出る機会が多い今日である。私は行政書士だが山では行政書士でない知人も多く参加している。年配者が多くその彼らが日頃人々に遺言書を書いておくことを勧めている。

山に登って思うことを記したが、何はともあれ素敵な山登りは十分に注意して行えば事故を免れ、素敵な運動となり十分に体力が鍛えられると思っている。しかし、山歩きしていてふと気付いたことは、山とは限らずとにかく日頃歩くこと最良のスポーツと感じたことである。

## 夜学生経験の誇り

**佐藤 喜久蔵**（昭和29年卒）

私が入学したのは終戦から５年目、「新生日本」が盛んに叫ばれていた時代である。

夜間部を選んだのは実家が農家のため人手不足で手伝いのためだ。二人の兄も夜間部だったので、迷わず、当然と思っていた。当時の若者は向学心に燃え、親に頼み込んでも進学したかった。私も、将来、理系の仕事が夢だった。



入学すると、級友は昼には立派な仕事についていた。成人に達し、喫煙者もいた。服装は多様で私服も多い。当同窓会会長を永くされた伊藤辰雄先生が４年間担任でした。先生は生まれた娘の名前を生徒公募で決める程の生徒思いです。亡くなるまで年賀状交換を続け、励ましを頂いた。

農作業を夕方早めに切り上げ、雨の日も自転車で片道40分の通学である。下駄履きだったと思う。大雪の日は片道１時間50分程の歩き。登校時に下校の昼間生と会う。羨ましいとは思わない、却って、負けたくない気持ちだった。

下校は５，６人の同学年生と雑談しながら、夜道を帰る。

田畑の農作業を手伝う時にも参考書を持参して行く。冬には俵編みなどの藁仕事もする。膝下に参考書を置いていた。でも、定期試験の時は手伝いを免除にしてくれた。こんなことを子や孫に話しても、無関心だ。時代感覚が違うのだろう。

高学年になるにつれ、学友達は進学を目指した。

夜間部でも、運動会や遠足があった。この行事は真昼に行う。モグラが土からでたようで、実に眩しい。山寺へ遠足、修学旅行は松島・十和田湖で秋田県大湯温泉に泊まった。みんな羽が生えたようにはしゃぐ。平成22年に家族旅行して、63年振りでこの宿に泊まった。修学旅行時を懐かしく、この温泉を選んだ。学友達が若いままの顔で連鎖的に浮かんだ。社会人になり、半導体の仕事を定年まで続けた。電電公社（現NTT）電気通信研究所に当夜間部の先輩を訪ね、親切に技術的アドバイスを頂いたこともある。他の先輩達からも。同窓生の絆を痛感した。

当時の夜間部生は苦学生と云われていた。先日、或る大学の非常勤教授が「うちの学生の76パーセントがアルバイトをしている。親からの仕送りが少ないからです。勉強時間が少ないのに驚いた。」と話されていた。彼等は現代の苦学生なのだろうか。

夜間部経験で忍耐強くなり、これが卒業後の私に大きく影響している。そうして、夜間部だったことを、八十路過ぎの今でも誇りと思っている。

## 「思い出すままに」

**高橋 昌孝**（昭和29年卒）

父親は物心のつく前に中国で戦死、母子家庭４人兄妹の次男だったから、ごく自然の成行きで夜間部に入学した（私は「定時制」という名称を今まで使ったことがない）。就職先は中学校の先生が紹介してくれた。毎日終業後徒歩通学した。職場の特別の配慮もあり、残業は殆ど無かった。家は市内だったので汽車通等の人達に較べれば随分楽だったと思う。だから是非は別にして４年間ほぼ皆勤だった。

新入りだから少しばかり人より早めに出勤、終業後そのまま通学した。９時過ぎ授業が終わり、昔はコンビニなど無かったから一目散に帰宅、夕食をとった。兎に角腹が減って仕方がなかった。食後は一転して今度は猛烈な睡魔である。毎日がこれの連続だった気がする。

夜間部には当然ながら今に言う「部活」なるものは無かった。今にして思えば色々工夫して頑張っていた人もいたのかもしれない。東高校には立派なプールがあった。中学校時代少しばかり水泳をやっていたので利用の機会が無くひどく残念に思った記憶がある。

また、日頃学生どうしで遊ぶ機会も少なかったが、同級の友達の家へ泊りがけで遊びに行ったこと、何人かで岩魚の掴み取り（町から来た私はただ見ていて、釣果（？）は全部貰って帰ったり）、根曲り筍を掘りに行ったこと等も懐かしい。

こんな事もあった。中学時代の同級だった女の子と放課後映画にいったことがある。通常の上映が終わった後に上映する「ナイトショウ」なるものが昔有った。ところが、「敵」は保護者同伴だった。「叔母さん」と彼女は呼んでいた。怖いオバサンの感じでなかったが、

何とも気詰まりな、珍妙な風景だった。それでも暗がりの中、短い時間ながら彼女と一緒に居るだけでひどく嬉しかったことを思い出す。その後何度も一緒に行ったが、残念ながらいつも保護者同伴のままだった。深夜帰宅して母親

に何と言訳したのか全く記憶にない。何年か立って彼女にはあっさりと振られた。

馬見ヶ崎川の河原で芋煮会を開き、大いに盛りあがったことがあった。その日のうちに「学生が酒を飲んで大騒ぎをしている」とのタレコミが学校にあった。結局のところ「単なる元気の余った若者達の放歌高声」ということで無事（？）一件落着とはなった。

担任の伊藤先生宅で忘年会を開いた時、出席予定の太田先生がお見えにならず、心配しているところへ、冬山で遭難したとの報が入り一同愕然としたこともあった。なお、先生は数日後に無事救助生還された。

英語の伊藤淳子先生の時間、英作文の問題に「飛騨の高山」云々というのがあった。私や複数の学生は、飛騨イコール北アルプス、従って「高い山」と解釈。先生が躍起になって否定するが多勢に無勢、うやむやに終わったことがあった。後日不明を詫びる機会が有ったような無かったような記憶が定かでない。後年、高山駅に下車する機会が何度もあったがその都度に汗顔の思いであった。

土井先生という生物の先生が居られた。授業には度々些か不明瞭なガリ版刷りの資料が配られた。資料中の植物名には和名の他にラテン語の学名が併記してあった。それを怪しげな（失礼な）発音で読み上げるので、一段と睡魔が猛威を振るうことに相成ったが、一面高校レベル超えたなにかにちょっと触れたような気もして、嫌いな授業ではなかった。

１年生の時かもう少し前だったか、「わが青春に悔いなし」という映画があった。兄に誘われて観に行った。誘ってくれたのは後にも先にもこの時だけだった。映画は面白くなかったが、映画の題名だけが、何故かひどく印象に残っている。私の東高夜間部時代は、些か古色蒼然たるこのフレーズを拝借、「わが青春に悔いなし」であったと締め括りたい。

## 「恩師、同級生に感謝」

**中川 幸信**（昭和29年卒）

私は、平成29年１月で満82歳を迎えます。私の人生を振り返ってみると、多くの方々から助けられて今日があることを感謝し、特に山形市東高等学校定時制課程の恩師、同級生の温情に感謝しています。

私は、昭和25年４月高校の夜間部に行くため職を探し、やっと牛乳配達の職を得ました。朝６時からの配達は大変でしたが、学校に通学できる喜びが大きく頑張りました。しかし、真冬の牛乳配達は心身共につかれました。特に、後で増やした市外の山寺街道筋にあたる風間部落、更に奥の高瀬地区へ道のりは10キロ程あり、部落と部落の原っぱ（田んぼ、畑）は、大雪が降ると視界が効かず道は車の轍のみが頼りで牛乳瓶の重い自転車を必死で前へ前へと押し歩くので時間が数倍かかりました。よって学校では疲れて、学校を辞めようかと思うことが何回か有りましたが、その都度に太田光之助先生、伊藤辰雄先生に励まされ、クラスの温かい雰囲気に助けられ勉強を続けることが出来ました。

昭和29年３月卒業にあたり、私は大学へ行けるなら昼の大学で学びたいと望外な望みを抱き、母の知人の世話で東京都浅草千束の毎日新聞千束販売所に昭和29年４月より住み込みで勤め、朝４時、夕方４時の２回新聞配達し日中の時間を利用して大学に入学出来ました。大学は全てが新鮮で昼の学校で勉強が出来る喜びを体で感じました。私は１年間で新聞配達を辞め、学校の休み時間を利用して東京でも、山形でも働き、特にお歳暮、お中元期間は朝８時から夜10時まで三越の世田谷取扱所にて贈答品の配達に勤め高い収入を得るため体を酷使しました。

昭和33年３月、大学を卒業後は山形に戻り就職しました。昭和45年頃、山形東高校夜間部同窓会に参加した際に伊藤辰雄先生より夜間部同窓会の手伝いを依頼され、学年幹事となり総会などの運営に携わり、特に昭和59年10月に創立100周年を迎える記念事業（夜間部創立60周年記念事業）では大正元年に建てられた校舎の全面改築と３階建の新校舎が建てられるに伴い山東講堂の建設資金が記念事業で賄われることになり、総予算額３億１千４百万円のうち全日制１億５千３百万円、定時制夜間部同窓会の募金目標１千万円でありました。うち29年卒の目標は40万円であり、この目標金額を確実に集めるために真壁康夫君、尾形源治君等と相談して1人当たり1万円をお願いすることを決め、学年会に諮り決定しました。結果的には応募者64名で金額は612,500円で20万円以上多い募金が集まり、夜間部での学年単位では一番多い金額を納めました。

私も東京出張の際には、29年卒の山川憲夫君、深瀬守巨君など東京同窓会役員にも協力方お願いした。また、西校舎で学んだ面識のない鈴木正意君を山形市千歳の自宅に訪ねお願いしたら快く承諾され21名の協力を得て、募金額を大きく伸ばすことが出来ました。その後西校舎の方々より同窓会の運営でも協力していただき感謝しています。

昭和59年９月30日創立百周年・新校舎落成記念式典が県民会館で盛大に開催され実行委員会として夜間部同窓会関係者と共に参加しました。

昭和63年10月29日の東高夜間部同窓会に参加した29年卒業者から伊藤、太田両先生を囲み同窓会を開催しようとの提案があり、皆で金子光輝君を発起人代表に推挙し私が事務局となり第１回「山東二九会」を平成元年１月21日、山形市本町の「和食処いなり」で開催し、両先生を含め参加者37名の盛大な集まりとなりました。以来毎年新しく参加する方々もあり盛会に開催し、渡辺長一郎君、廣田忠良君が代表幹事となり運営しましたが、宿泊の要望があり第８回から細谷純一君が代表幹事となり、一泊二日で開催し一層親睦を深めることが出来ました。平成元年から平成23年までの間、20回開催し多くの方々が旧交を温めることが出来ました。ありがとうございます。

## 愛情に支えられて

**深瀬 せつ**（蛍雪会昭和29年卒）

### 終戦＝小学五年＝

それまでわが家は、姉二人、弟三人、両親の八人家族。おだやかな幸せな日々。自宅隣に、わが貸家に軍人家族（上女三人、四番目男子、その下女二人。＝上女三人は、長崎教会の修道女と終戦後になる＝）いつも仲良く遊んだりして交流していました。

父は、注文靴造りや修理を忙しくこなす中、軍人持参の軍刀の鞘に皮（革）袋をかぶせる仕事に励んでいました。（湾曲しているので左右から同時に針をさし込んで強く締めながら縫う力仕事）「名人がいる」との口伝えに、仙台や福島からも軍人が父に依頼に来ました。

山高（新制の山形大学文理学部）の教授たちが（父の造った靴をはいて）退勤時に父の所へ寄って一服しながら戦況を語らって帰るのを私は、難しいながら、耳をそばだてて聞いていたものでした。特に＝ドイツ人の教授（ドイツ語の教育者）は、父の人柄を尊敬してくれてドイツの工業ミシンをプレゼント。そのミシンが大活躍して、母もこなしていました。

父は、「革材料もいっぱい購入したし、世の中がどの様になっても食っていける様にしてある。」と言っていました。

### ＝五年六年の担任登坂まさ江先生＝

五年生の初め頃、授業時、机間巡視、私のノートをごらんになりながら、「せっちゃんは、学校の先生になりなさい。友達に優しいし、はきはきして、勉強も頑張るから先生になりなさい。」と。それから私は、「先生になる！」と心に決めたのでした。

### 税金＝中学三年初め＝

父が、「大変だ。払い切れない税金が来た。どうしてだ。どんな税金も真面目に払って来たのに、どうしてだ。」って父は叫びました。「税務署に行って折衝して来る。」と。父「払えない程の税金を

何にふっかけたんだ。」税務署「ドイツのミシンと革材料にかけました。」父「明日、うちに来てくれ。ミシン壊すから。」

翌日税務署員とミシン工場の社長がやって来て、その目の前で父はミシンをハンマーで壊したのでした。ミシン工場の社長は、「女のお子さん三人おられるので、洋裁学校に通い、このミシンを役立ててください。」とミシンをプレゼントしてくれたのでした。社長が「ドイツミシンのプレートをいただきたいのです。」と言って壊れたミシンを車に載せて行った時の父の姿を忘れられません。

国は、一日も早い復興をめざし、ありそうな所に税金をふっかけた。「父ちゃん、せつこは夜間に行く。」「だめだ。夜間に行ったら、学校の先生になれない。せつこは、学校の先生になりたいんだからだめだ。昼間に行かないとだめだ。」と父は私に叫ぶ様に言ったのでした。私は、夜間で頑張ると心に決めたのでした。

### ＝今、私がある＝

今、私があるのは、東高の先生方のおかげです。

どなたの先生も、優しく、分かりやすく、ていねいに指導して下さった。教師としての原点をも教わった貴重な体験でもありました。深く感謝しております。

### ＝先生方の温かいお見守りのなかで＝

入学して間もなく、伊藤淳子先生（金子）が、「せっちゃん、うちへいらっしゃい。」と、ご一緒させていただきました。すてきな小皿に盛られた、イチゴたちで飾られたかわいいケーキとコーヒー。「英語の先生は､アメリカ人みたいだっ。」って感動いたしたのです。が、今思い起こすと、先生は、きっと、「こんな小さい子が、これから四年間勉強後、夜の道を帰るんだ、って不憫に思われたのでしょう胸いっぱいになりました。

### ＝感謝でいっぱい＝

教室内は、通れない程、男子学生でいっぱい。お手洗いに恥ずかしくって行かれなくてよくよくがまんして机にへばりついていました。

寸暇を惜しんで勉学に励む学生たちの中に共に学問するこの空気！　うれしい！　と何度も思い雰囲気に励まされて今の私があるのです。先生方、学友の皆様、家族に深く感謝いたします。同窓の皆様共々同窓会のますますのご発展を祈念いたします。

# 私の高校時代とその後

**深瀬 守巨**（昭和29年卒）

私は昭和２５年３月山形市立第四中学校を卒業し、昭和２５年４月に山形東高校夜間部に入学いたしました。以後昭和２９年３月に卒業するまで４年間にわたる夜間高校生活の始まりでした。

当時、父は病床にあり家は貧乏だったので（当時まわりは殆ど貧乏だったが)、又姉も夜間高校に行っていたので、私も自然夜間高校に入学しました。

### 「昼間の労働」

さて中学は卒業したものの、当時は就職難でなかなか適当な就職先が見つからずにいたところ、近所の砂利屋さんから砂利採取の話があった。早速自宅近くの馬見ヶ崎川で砂利採取を行うこととなった。

ざるで川の砂利を分けて木のマスに一杯にする作業だった。炎天下で汗だくになりながら、必死に木のマスに砂利を入れたが、中学を出たばかりの少年には、半日でマス一杯することが精一杯であり遂に半日でダウンしました。報酬は砂利マス一杯で５０円であった。これが、私の実社会への第一歩でした。

その後、人づてに山形市銅町にある伏見工業ｋｋという会社に話があり、そこで働くこととなった。そこは、典型的な下町の中小企業で男女１０数名が働いていた。そこの会社は、バネを製造する会社で当時はやっていたハッピーミシンの下請け工場であった。

私はそこで工場長に怒られながらも、以来３年間午前８時から午後５時まで油まみれになりながら、びっしりと働き、そこを終わってから徒歩で山形東高に通いました。月給は月２５００円ぐらいだったと思います。

４年生の時、学校側の厚意により「山形市医師会」に事務員として働くこととなりました。

山形市医師会は、当時山形県医師会と同じ建物のなかにあり、私の仕事は、山形市医師会に所属する医院、病院等に書類等を自転車で配達したり、医師会会費を集めたりすることでした。そこで私は多くの医師達と接触したり、医院・病院をかいま見聞して私にはいい勉強になりました。自転車に乗りながら英語の単語をひとつずつ覚えることに努めたりもしました。

医師会の勤務は環境も良く働き易い所だったので、そのまま勤める道もありましたが、私はどうしても上京して早稲田大学に入りたい希望を持っていましたので、高校卒業と同時に医師会はやめさせていただきました。

### 「夜の学習」

夜間の高校生活は、山形夜間中学の校歌「真昼は人生実務の上に、夜間は修養教えの園・・・」のとおりであった。

夜の授業は、昼間の厳しい労働の後なので眠気との闘いでもありました。最初の１、２年は工場と学校を通い続けるのが精一杯でありました。

しかし、学校に行けば似たような境遇の学友が多数おり、工場、事務所の環境とは違った自由の空気の中で、諸先生からは、いままでの小・中学校とは違った新しい学問の世界を教わり目を見張る思いであった。

英語の金子　淳子先生は、若く綺麗な女性の先生でしたが、英語なんかまだ良く知らない当時の我々に熱意を持って熱心に教えてくれました。今でも強く印象に残っています。

伊藤　辰雄先生は、数学の担当でしたが、先生の微分、積分、幾何等私には難しくもっともっと教えて貰いたかったと今でも思っています。

先生は夜間部の先輩でもあり、夜間教育に情熱を持って当たっており、非常に熱心に我々を公私ともに面倒みてくれました。私は特に就職、進学等で個人的にも大変お世話になり、私が今日まで来れたのも先生のお陰と今でも感謝しております。

太田　光之助先生は、やや変わった先生でしたが、通常の勉強からは時々脱線しながらも広い視野からの話は興味が尽きませんでした。私が今も殆ど毎日のように新聞を読む習慣は太田先生の影響かと思っています。

ほかに授業としては世界史、生物、化学、漢文等もっとじっくりと時間をかけて勉強できたら良かったなあと思いました。

私の自宅は鈴川にあったので、夜帰宅の途中　馬見ヶ崎川橋を渡りながら、天空を見て夜間部生徒歌の「弦月窓に冴ゆるとき　銀漢はるか仰ぎては・・・」を口づさむのであった。そして家に帰ればどんなに寒い晩も母親の準備してくれた暖かい味噌汁が待っていました。これが私の４年間の夜間部生活を続けられた活力源だったと思っています。

### 「高校卒業後の道」

高校卒業した後、高校の大築　亨先生、伊藤辰雄先生等のお世話により、当時東京都庁に在職中の佐藤　登氏（山形中学の先輩）のお力添えにより、東京都庁に私を含め同期４人がアルバイトとして勤務することとなりました。たしか１日２４０円だったと思います。

これがその後の長い都庁人生の始まりでした。

一方、私は早稲田大学第２政経学部（夜間）に合格したので、昼間は都庁で働き勤務終了後夜間は早稲田大学に４年間卒業するまで通学することとなりました。私の場会、結局高校で４年間、大学で４年間、計８年間夜間で勉強することとなりました。

都庁では数年アルバイト後　東京都人事委員会の採用試験に２回目で合格し（１回目は不合格・・・１回で合格したのは同期では鈴木　和夫氏のみ）やっと正式職員に採用されました。

都庁では、建設局、（財）東京オリンピック組織委員会、総務局、区役所、水道局、福利厚生事業団等いろいろな部署に異動しましたが、それぞれ大変な思いをしたところもありますが、多くはやり甲斐のある仕事でした。私の場会通常の行政事務のほかに一寸変わった業務にかかわる機会が３つあり強い思い出として残っております。

１は、東京100年記念事業の１としての「東京百年史」の編集事務に関わったこと、

２は、昭和３８年に（財）東京オリンピック組織委員会に都庁から派遣され、約２年間オリンピックの業務に携わったこと、私は競技部式典課に所属し直接の担当は世界各国の国旗でした。オリンピックは期日も限られ、国旗のデザインの決定、作成委託、会場配布、国旗の取り扱い要領の作成等激務につぐ激務でしたが、オリンピック大会が成功裡に終わったことに誇りに思っています。

３は、新宿西口の再開発の業務に携わったこ

と、当時新宿西口にあった水道局用地と近隣の住民の用地を一緒になって再開発しました。これも夜間の仕事が多く大変苦労しましたが、現在立派なビルが立ち並んでいるのを見ると感無量のものがあります。

### 「先生、学友との交流」

高校在学中は、昼間は労働していましたので、先生、友人との交流はなかなか難しいことでした。

労働と勉学に追われクラブ活動にも参加しませんでした。これは今でも残念に思っていることです。

私の場合、先生や学友との交流はむしろ卒業後に多くなりました。

卒業後、昭和２９年卒業有志と伊藤 辰雄先生夫妻と箱根周遊の旅をした時の伊藤先生の嬉しそうな笑顔がいまでも忘れられません。私は山形に帰郷した際そのつど伊藤先生宅にお寄りするのが常で、先生宅の温泉風呂をいただいた事もありました。

太田 光之助先生は、山登りが好きなので有名でしたが、私も山好きなので蔵王、朝日連峰、北アルプスなど一諸にさせていただきました。なかでも特に印象深いのは黒部ダムから欅平までの下の廊下（日電歩道）を歩いたことです。同行者は、先生、石川 智夫妻と深瀬夫妻の計５人、途中阿曽原温泉で一泊の行程、文字通り断崖絶壁の中をついに踏破したことでした。

友人たちとの交流もむしろ卒業後が多くなりました。

その１が伊藤先生の助言もあって東京に同窓会を設立することでした。後藤先輩等にお願いし同窓会東京支部を設立することとしました。この同窓会東京支部はその後毎年一回開催され設立以来一回も休みなしに現在にいたり同窓生同士の交流を深めてきました。その他に各年度のクラス会等も開催されており、29年度卒業のクラス会も時々開かれております。このように山形東高夜間部の交流の機会は、平成１１年の閉程以来何年もたつのにもかかわらず現在でも続いております。

### 「夜間部関係資料の保存」

平成２４、５年頃 東高を訪問した際、同窓会本部の方から、生徒も担任の先生もいない状況で夜間部関係の資料は充分に整理されていないので、このまま放置すれば雲散霧消する恐れがあるとの指摘をうけました。このことを憂慮した有志で資料等の保存活動をすることとしました。

これにより今までに「卒業記念アルバム」「50年記念誌」「同窓会名簿」「閉程記念誌 蛍雪」等を作成、復刻版を作成しました。さらに「夜間中学等の校歌等」を、東高の協力を得てＣＤに収録しました。今後とも貴重な夜間部関係資料の保存活動を続けていきたいと考えております。

### （むすび）

今 人生を振り返ってみて、多くの人に支えられながらも山形東高校夜間部で勉強できたことを本当に感謝し、誇りに思っています。私が今日までの人生を送れたのも東高で学べたからだと心深く思っております。私にとって東高校夜間部は人生の原点です。私は、今後ともこの原点を忘れずに生きていこうと思っております。

## 混声合唱や運動会の想い出

**渡辺 長一郎**（昭和29年卒）

中学校の部活では音楽と演劇（シェークスピアの英語劇等）をやっていた。スポーツでは籠球部に入っていたが、シュートした時に相手選手の頭に顔を思いっ切りぶっつけて鼻血が止まらなくなったり、野球もやったがバッターボックスに立った時、当時の専売局（現在のＪＴ）チーム投手の投げた球が左頬に派手にデッドボールを受けたり、何をやっても上手くいかずスポーツは諦めた。

そんな経緯もあり入学して真っ先に入部したスポーツはバドミントン部、文化関係では音楽部だった。バドミントンは使う道具も軽く楽なスポーツと思って練習に入ったらとんでもない過酷なスポーツであった。右に左に走らされ、ヘトヘトになり、こりゃ駄目だと直ぐ退部した。今考えれば直ぐ飛びついては直ぐ止める箸にも棒にもかからないどうにもならない奴だと我ながら情けなかった。ただ、競走には少しばかり自信があった。運動会で100メートルはどうしてもテープが切れず二着が指定席だった。三年生の時初めて200メートル競走が採り入れられた。元来アガスケな私は「なんとかして一着になり、長くて赤いシルクの鉢巻きヒラヒラさせながらテープを切りたい」と思った。幸い赤組なので赤いシルクの長い鉢巻をヒラヒラさせながらテープを切ったらナンボカ気持ちが良かろうと思ったのである。

ここまでは良かったが、いざスタートラインに立ったらスッカリ自信を無くし、折角の真っ赤で長いヒラヒラしたシルクの鉢巻をクルクル丸めて短くしてしまった。ピストルの合図で走り始め100メートル辺りまではいつものライバルが先頭だった。「またダメか」と思ったがライバルの速度が落ち始めた。結果、初期の目的通り一着となり念願のテープを切ったが何故か余り嬉しくなかった。「ながーい」真っ赤なシルクをヒラヒラされなかったから・・・。

このことをいつか誰かに話したいと思いながらアッと言う間に七十年余が過ぎてしまった。駄弁を弄し折角の貴重な紙面を無駄にしたようで恐縮だがご容赦に願いたい。

さて本番に入るが音楽部に入って最初にレッスンを受けたのが混声合唱によるフォスターの「主人は冷たき土に」であった。部員は男女四十名数の編成で実に素晴らしいものだった。当時中学校では味わえない醍醐味である。

担当はご存じ朝一庸先生であった。「美しき青きドナウ」等々、いろんなジャンルの数多くの曲目を取り上げて指導を受けた。

テノールやバスは当然としてソプラノやアルトが数多くいたのは西校舎と合同の組織であったからと思う。音楽の部活は単に練習や発表会で歌うことだけではなかった。

バラの東沢公園や三山電車に乗って大谷の浮島に遊んだり、ハイキングや野外活動も随分と実施した。むしろその方の想い出が多い。また、楽しかった思い出に運動会があった。

何故か会場は西校舎の運動場であった。単に種目別の競技より本番までの練習に思い出が多い。特に全員でマスゲームの感覚で行われたスクエアダンスが最高に楽しかった。

「男女七歳にして席を同じうせず」の気風がまだ抜けきらなかった時代であり、堂々と手を握り合う等とても考えられなかった時代である。

「山小屋の灯」や「風の子」等音楽は四拍子の単純なリズムの曲に限られるが、軽快な音楽で踊るスクエアダンスは大変な人気であったと記憶している。

そのことが影響したと思うが、青年団活動で二十年位世界各国の「フォークダンス」に走り、引き続き教室に通った社交ダンスは、教室を離れてからも七八歳頃まで続き、日本レク協会公認指導者養成のスポーツ部門で社交ダンス講座を担当させて頂いた。

このように喜寿過ぎまで実技を生かせたことは、高校生活で得た果実が基であると今も感謝している。

## 楽しかった高校演劇・・・そしてそれから

**渡辺 長一郎**（昭和29年卒）

二年生の頃であった。休み時間の時、突然教室に上級生の高橋長九郎（文中敬称略）と布施隆男が訪れ「今度演劇部を創るので入れ」と言われた。

同級生の峯田長子（文中全て当時の姓）梅津加代子、大内綾子にも同時に声がかけられた。

何が入部勧誘のキッカケかと思ったら、四人で予餞会の折オペレッタで「舌切り雀」を演じたことによるものだった。脚本と演出は峯田、雀は大内、お婆さんは梅津、お爺さんは私で当然ながら台詞は全て「歌唱」と言う初めての経験だったが、今想えば涙が出る程懐かしい青春の一コマである。

高橋長九郎を始め布施隆雄、佐藤薫たち先輩の奔走で三十余名の部員が勢ぞろいし、担当に

は演劇に造詣の深い斉藤和雄先生を迎えた。早速、秋には第一回の公演をする運びとなった。演じ物はドイツの作家、ヴイルフェルム・マイヤーの小説、皇太子カールハインリッヒと下宿屋の娘ケーテイの純愛物語「アルト・ハイデルベルク」であった。

築地小劇場で山本安英らによって公演されたものらしいが、五幕の長編で然も赤毛物（外国もの）ときてからは簡単に出来るものではない。

演出には全日制演劇部の遠藤部長を招聘し、皇太子役は誰か忘れたが、ヒロインのケーテイには大内綾子が抜擢され本読みに入った。私は端役であったが、その時の練習で「もっと魂を入れてやり給え」と言うたった一言の台詞を「ダメだ、ダメだ」と何十回も言わされてヘトヘトになったことは数十年経った今でも忘れられない。それがトラウマになった訳ではないだろうが、台詞を覚えないまま舞台に立つ悪夢は卒業後何十年も続いた。

話は横路に逸れてしまったが、練習に練習を重ねた結果、残念ながら「アルト・ハイデルベルク」はリタイヤせざるを得なかった。

理由は技量的に我々のレベルでは到底及ばず、演出の遠藤部長からＯＫが出なかったからである。

代りに取り上げたのは、女性解放をテーマにしたイプセンの「人形の家」を日本版にした久米正雄の「家内博士父子」だった。これも長編で大変な内容であったが、死にもの狂いの結果、我が校、本邦初公開？ということもあり、全生徒を集めた会場が割れんばかりの大拍手で大成功をおさめることが出来た。

第二回目は樋口一葉の「たけくらべ」に取り組んだ。その時、「美登利」役の鈴木暁子は頭脳明敏なうえ、物凄い稽古熱心で放課後、「正ちゃん（役名正太郎）練習しましょうヨ」と引っ張り出され、星空を仰ぎながらグランドのコンクリート・スタンド上で、暗記した台詞のやりとりをした覚えがある。

その次の年あたりから市内高校の合同演劇発表大会が行われるようになった。

第一回の会場は確か南高の講堂だったと思うが、レパートリーは既に校内発表が済んでおった田中千禾夫の「おふくろ」だったと思う。発表終了後、演劇評論家で中央高の大山功先生から、主役を演じた高橋邦子が講評で「高校随一の演技力」と激賞されたことが特筆される。

次に山本有三の「嬰児殺し」でも高橋邦子の演技は益々光り、名実ともに我が校の看板女優となった。

斉藤和雄先生は演技の指導はもとより、舞台装置にも心血を注ぎ、大袈裟に言えば歌舞伎座顔負けの精巧で素晴らしい装置に、山形高校演劇界では「舞台装置に山形東高夜間部あり」と言われるほど有名になった。

当時の流行歌、鶴田浩二の「街のサンドイッチマン」を部歌？としてみんなで歌いながらトンカチを振るい、徹夜したことも楽しい想い出の一つである。

話は少し横道にそれるが、その舞台装置の指導に、また、自らも出演し演劇部の索引力になった菊田円順は、平成に入り全国規模で曹洞宗大本山永平寺が制作したドキュメンタリードラマ「道元禅師」でナレーションを担当し素晴らしい演技力を発揮しているのに驚かされた。高校演劇で培った実力を如何なく発揮したその精神に感動を覚えた。

卒業してから斉藤和雄先生の指導により、演劇部ＯＢと現役の部員が合同で「劇研こまくさ」と言う名称で演劇集団を結成した。

主な指導書として取り上げたのは、ロシアの俳優で演出家であるスタニスラフスキーのドラマトウルギーである。通称「スタシステム」で知られる同論は徹底したリアリズム演劇を追求した演技理論であるが、それを研究するには、基本を忠実に守り徹底した練習以外に方法はなかったと記憶している。

市の主導か忘れたが「山形市青年劇場」が創設され山形市中央公民館を会場に、市内に所存する演劇集団が競演する機会に恵まれた。

何回か参加したが、レパートリーは喜劇「村の保守党」や「夕鶴」等であった。

特に印象に残っているのは当時、木下順二らが興した「ぶどうの会」で「つう」の山本安英と「与ひょう」の桑山正一が演ずる「夕鶴」が演劇界で一世を風靡しておったので、それを斉藤和雄先生が選び、ヒロインの「つう」に高橋邦子、「与ひょう」は私、「運ず」と「惣ど」は真壁康夫（後に高橋邦子と結婚）と月田章文であった。

「かごめかごめ」の歌と演技で賑わいを見せる子供たちには一年生の飯島芳子をキャップにＯＢの小学生か幼稚園児の弟妹が出演した。まさに家族ぐるみの大がかりなキャスト陣である。

夕鶴はご存じ民話「鶴の恩返し」をモチーフに木下順二が書き下ろしたもので、表向きは面白い民話劇であるが人間の欲望とか「業」等に深く突っ込み又、社会的には経済至上主義を風刺した内容だけに、演出の斉藤和雄先生は非常に苦労したようである。

「劇研こまくさ」を通じて部員とＯＢの交流は斉藤先生が寒河江高に転勤するまで何年かしばらく続くことができた。

以上は数十年前のことであり、資料もなく記憶の引き出しから無造作に引っ張りだしたものであるから、話が前後したり記憶違いがあるかも知れないのでご容赦願いたい。

私のPRで恐縮だが、このような経験が後に戊申の役100年を記念して創作された後藤嘉一の「戊申百年」に出演させて頂いたり、毎年実施される日本レク協会公認指導者養成講座で「演劇の理論と実際」をテーマに文化部門を担当させて頂いたりした。その座学の終了後は菊池寛の「父帰る」を、脚本を持ちながらグループごとに演じて頂き研修を深めたことも何年か続いた。

その間、青年団演劇に入り、当時提唱されておった新生活運動に関連した創作劇などに携わったが、遂に地元連合青年団が市と県のコンクールを制覇し、東京の共立講堂で開催された全国コンクールに出場した。大型トラックに大道具、小道具を満載し勇ましく出陣？しチャレンジしたが、全国の壁は高く、そして厚く入賞は覚束なかった。

また、現職中は地元に伝わる「千歳山萬松寺阿古耶姫伝説」を素材（平家物語と源平盛衰記に関連記述あり）に芝居に書き下ろし、自局の職員をキャストに東北郵政局長（当時は国営）の天覧？の栄に浴する等、演劇がライフワークになったのも、在学中そして卒業後の「劇研こまくさ」で指導を受けた賜物であり、生涯の宝物になったと感謝している。

今は亡き恩師斉藤和雄先生、そして夭折した飯島芳子さん、大内綾子さん、真壁康夫君三沢政一君、月田章文君ほか故人となられた元演劇部の盟友に感謝し、この一文を御霊に捧げる。

# 回想 わが師・わが友

**吉田 良吉**（昭和29年卒）

「人生は出会いだ」と言ったのは誰だったか忘れたが、私は、今、自分の来し方80余年を振り返ってみて、改めてその思いを深くしている。人生について、古来幾多の金言名句が残されていますが、人生とは、所詮、いつどこで、誰と出合って、どのような時間を共にしたかの積み重ねではないだろうか。

私は、昭和25年３月、山形市にほど近い町、上山の中学校を卒業して、同４月、山形東高等学校夜間部に入学した。

昭和25年と言えば、戦争が終ってまだ５年、戦後の復興は緒についた許りだった。

あの頃はみんな貧しかった。どこの家も、大なり小なり、戦争の傷痕を抱えていた。わが家もご多分に洩れず、私にとって、どう見ても、働きながら学ぶ道以外に進学の選択肢は無かった。だが、働きながら学ぶ道は決して楽ではなかった。夜学に通い出して初めの頃は、働くことも学ぶことも中途半端な気がして、正直言って、些か悶々の気に捕われていた。

しかしながら、私はここで、終生忘れ得ぬよき師よき友に巡り合えたのであった。

教えを受けた多くの先生方の中でも、とりわけ次の４人の先生が忘れられない。

私の一～二年生の時のクラス担任の太田光之助先生は、社会科の先生だったが、かの小林多喜二や伊藤整の出た小樽高商のご出身で、文学や社会思想にも詳しく、授業を離れての先生の雑談に、私はいつも蒙を啓かれる思いがし、話を聞く度に少しずつ大人になって行くような気がしたのであった。

私の三～四年生の時のクラス担任の伊藤辰雄先生は数学の先生で、お人柄はまさに温厚篤実、私たちの古い先輩で、私たちの悩みや心配事に対しては、いつも親身で向い合ってくれた。時にはご自宅に招いて下さり、家族ぐるみで温かく包んでいただいた。それで、卒業時の記念文

集のタイトルは、即座に、全員一致で「辰ちゃん」と決まったのであった。

英語の伊藤淳子先生は、まだ若くて、明るくて聡明だった。授業にも積極的で、副読本に、チャールス　ラムの「シェークスピア物語」を選ばれた。この本は英国の子供向けにアレンジされた冊子風の薄い本だったが、私はなぜかこの本を読んでいることを自慢したくなるほど誇らしく感じたのであった。

音楽の朝一庸先生は、昼間部の先生も兼ねておられたが、若くてハンサムでダンディーだった。確か高知県出身で、山国育ちの私たちを食べ物で一寸揶揄するような一面もありましたが、私たちの二年先輩の方が作られた「山形東高等学校夜間部生徒歌」に、明るく力強い曲をつけてくれた。この事だけでも私は先生に感謝したい。

♪♪

こまくさ萌ゆる蔵王嶺に　曙の雲たゆたいて
春訪ずるる紅の　希望の光仰ぐかな♪♪

歌詞といい曲といい、私はこの歌が大好きである。この年になっても、折に触れて大声で歌ったりしている。

一緒に入学した仲間も多士済々だった。それぞれに厳しい家庭の事情を抱えながらも、明日に希望を持ち、目を輝かせて勉強に励んでいた。そして・・・

全県共通の入試で一番を取って入って来た高橋（昌）君は、東大を出て一流企業の幹部になった。

真面目で温厚な田苗君は教師となり、私の母校の中学の校長先生にもなった。

正義漢で意志の強い大木君は弁護士となり、後年神奈川県弁護士会の重鎮として、鎌倉山の自然保護などにも活躍した。

磊落漂々たる風格の深瀬君は都庁に入り、さる局の部長として腕を奮った。

親分肌だった佐藤（忠）君は、自力でフローリングの会社を立ち上げ、全国的に事業を展開した。

語学に特異な才能を持つ早川君は、東欧貿易中心の商社に入り、世界を股に駆け巡った。みんなどんな困難にぶち当っても決して挫けない、夜間部魂を持つサムライだった。

先日、名言集なるものをめくっていたら、こんな言葉に出合った。

「年を取るのは仕方がない。しかし、年寄りになる必要はない」と。

100歳まで現役を務めたアメリカのコメディアンの言葉とか、けだし名言であり、私もそうありたい。しかし生身の体、寄る年波には敵わず、80歳を越えたら急に体のあちこちにガタが来た。それでも大事に扱えばあと10年位持つだろうと思う。この10年、いかに生くべきか。児孫に遺す美田はない。せめて東高夜間部で出合った恩師と学友の思い出をわが青春の金字塔として持ち続けて誇らしく生きて行きたいと思っている。

## 「あゆみ」

**石澤 ハルノ**（昭和31年卒）

私は東村山郡大寺村に生まれました。今八十四才になります。こんなに長生き出来るとは、思っていませんでした。

現在は心して健康のための行事に出かけるようにしています。

大寺村国民学校一年生に入学以後、教室に入ることは、まれで、雨でない限り山の畑へ鍬を背おい、桑の木の根っこ掘りでした。そのあと、豆のたねをうえる作業でした。

雨の日は、教室で、すずり箱を出して、墨をするようにいわれ、先生がきて教科書を出してと、先生の言うまま「何頁の何行目、そこを真黒に消す」そのうちにアメリカさんの飛行機の音がすると校庭に松の木が三本、あと竹のはやしでした。そこへ逃げて、見上げると、B29、今もしっかり思い出されます。

その頃は、食糧が不足しており、そのため病にかかり、腹膜に水がたまっているとの医師の説明でした。赤沈が百八十で、入院となり三ヶ月で退院。その時親切な看護婦さんとめぐり合いました。この時にこの職業になろうと思いました。

いろいろときいたりして、東京に出るようにしました。国立第一病院で勉学、十九才の時、第一回看護婦国家試験に合格、そのあとに三ヶ月間看護婦再教育が厚生省主催であり、修了式の折、看護婦専任教員の免状が授与されました。

私は山形に戻り、山形東高等学校夜間部を受験し入学が許可されまして、四年間教わりました。

昭和三十一年三月十六日、第六回卒業式となりました。私は好きな言葉に「心に太陽を持て、くちびるにうたを持て」と努力しました。木村校長先生の祝辞に「実る稲穂は垂れる」この言葉は私にとって、日々忘れてならないと身に沁みました。

これらの言葉を師表と仰ぎ、これからの人生を過ごしてまいりたいと存じます。

ありがとうございました。

## 母校と恩師に感謝

**遠藤 光義**（昭和32年卒）

三十二年卒、入学時四学級、片桐先生、柏倉学先生、斎藤先生が恩師、どうしても勉強したいのなら学資なしで学べる防衛大あるぞと言われ、受験を試みたのだが失敗、山形大学教育学部へ進んだのでした。今度は、昼学び、夜働くという生活に転換、二年間、夜間部職員室にて給仕のバイトをさせていただき学費を稼いだのでした。勿論、父親がいませんででしたので奨学金でも助けられました。この期間、試験用紙のガリ版刷り、冬はストーブに石炭入れ、先生方が授業時間終わり、職員室に戻るごとにお茶を出したり、時間があれば事務室にて生徒達の授業料納入にたずさわる時もありました。この先生方との接触は、教師になる基本を学ぶことが出来たのです。この母校と恩師には、感謝の気持ちで一杯です。

あの当時を振り返れば、授業中、疲れから居眠りする生徒がいても、どなったり、おこることもなく、もくもくと教えて下さる先生方の姿に感動し、授業に集中するばかりだったのです。今なら、こぶしか、チョークが飛んで来ても当然だったろう。

勤労青年の苦労と痛みを理解して下さっていた先生方に頭が下がる思いが込み上げてまいります。生徒一人ひとりに対し、あたたかく、腹すく私たちに牛乳とパンを販売して下さるようになったり、昼間の生徒からこの机と椅子を使用している夜間生のあなたへと励ましの手紙があったり、激励がいたるところであったのです。英語教師、女先生から自分が学んだ学生時代のお話など体験談が、どれだけ私たちを勇気付けて下さったか、忘れる事が出来ません。

理科（生物）の土井先生は、年輩ながら、日曜日に山へ連れて行ってくれて、植物の花の名前を教えて下さったり、蔵王連峰、北に聳える雁戸山へ残雪ある五月連休に先生方五名と登山したこと。

社会科、熊さん先生が鳥海山で遭難、三日目で発見された体験談など私に山への魅力を教えて下さり、現在、日本山岳会メンバーになって行ったのです。春夏秋冬、蔵王に百回近く接したのも美しきふる里山形への懐かしい思い出があったからこそと思っております。

昨年、日本山岳会百十周年記念式典に福島代表八名と参加、今年より山の日（八月十一日）祭日誕生。福島の登山家、田部井さん（七十七才）の死去など悲しき事もありましたが三浦雄一郎氏の八十才にしてエベレスト登頂は、我々に勇気を与えております。

鳥海山、朝日、飯豊山登山は学生時代でしたが昨年春より月山に三度挑戦し、一度踏破。

今年（七月三十日、三十一日）日本山岳会、北海道、東北集会、秋田の森吉山登山に参加、単独登山も東吾妻山、西吾妻山、安達太良山毎月、山、山です。

「ふる里の山に向いて言うことなし
ふる里の山は、ありがたきかな」
（啄木）

どこへ出かけても歌うようになりました。

2011年東日本大震災と原発事故後ボランティア活動に徹してきました。

2016年九月十一日～十二日湯の浜温泉にて傘寿祝同窓会、心に残る日となりました。

最後に『母校、恩師、友ありて我あり』

母校に感謝 !! 恩師に感謝 !! 友に感謝 !! の毎日です。

もうすぐスキーのシーズンです。山が呼んでるような気がします

2020年 オリンピック、パラリンピックの年、同窓生一同とお会い出来ますことを楽しみにしております。

十一月八、九、十日『日光、那須ハイキングにて』

## 通学の思い出

**工藤 昇二**（昭和32年卒）

私の生家は左沢線の羽前長崎駅から月山方面に２ｋｍ程の山あいの中腹にある。長崎駅は山形駅から約30分、最上川の少し手前にある。学校は奥羽山脈の一端にあるが、私の生家は村山平野を中にした月山の山波にあたる。丁度、毎朝晩、蔵王山を拝することが出来る。東高には生家から左沢線を使って通った。

通学４年間の中で強く思い出されことがいくつかある。

### １）「風吹の中の帰路」

先づ思い出されるのは、風吹の強い夜の帰り道の思い出である。大雪の中､最終の列車に乗って長崎駅に着き、先輩の後について風吹の中を遮るものが何もない原っぱを進んだ。途中で十字路があり左に折れるのだがその目印は大きな腰掛石である。雪のためその石もほとんど埋まってた。その箇所を左に曲がって行くのだが先頭の者は見当を付けて左に曲がった。私達は先頭の背中を見ながら進んだが程なく突然先頭の者の背中が消えてしまった。程なく声がして先頭の者が右側にある側溝に落ちたのである。側溝の水は幸いにも冬場なので少なかったが数人で引き揚げ、又一列を組んで帰宅した。

### ２）「４年の間のアルバイト」

アルバイトは４年の間にいくつか変えた。一番強く思い出すのは北山形駅にほど近いパン工場に勤めた時のことである。二交代制で私が夜勤組であったときのことである。学校が終わるとそのまま職場に向かった。徹夜した朝方の睡魔は激しいものであった。その中で一大事が発生した。工場の先輩が仕込んだ学校給食用のパンに発酵用のイースト菌のみを加え、砂糖や塩などの味付け剤を入れ忘れたのである。気付いたのは釜からパンを取り出して、焼き具合を調べた夜勤の責任者であった。どうにかパンの仕込み直しをして給食の時間には間に合った。

やれやれと皆んなで胸をなでおろしたところ大問題が発生した。夜勤の責任者が失敗したパンを処分に困り、土の中に埋めたのだがイースト菌が発酵し、土が盛り上がり小さな丘になったのである。その状況を発見したのが運悪く工場長である。責任者達は大目玉をもらったものである。

このパン工場は乾日本そばを全国に販売しており、私も時折り買って賞味しているが、美味しいのと昔を思い出すことが大きい。益々おいしいそばを作って発展されることを願っている。

## ゆりかごと思い出

**車谷 久幸**（蛍雪会昭和32年卒）

私が母校の山形東高等学校定時制に入学したのは昭和二十八年春であり、同年八月に高校定時制教育法が新しく発令された。その法律には教育の機会均等が謳われ、いつでも誰でも学べる学校としての理念が存在した。

終戦前年に山形に疎開し、終戦翌年に父を亡くした私にとって唯一の選択可能な高校であり実に幸運な事であった。私の同学年にも戦争で母子家庭になった友人が多数あり、経済問題や働き手不足と言う労働事情に起因する制度であった。現在の定時制高校は存在意義に於いて大分違ってしまったがこれも時代のなせる業と言わざるを得まい。

私の疎開地が母の実家である鈴川であったので鈴川小学校に入学した。初代校長の掲額に口髭を生やした偉そうな人物が居るので、あれは誰かと訊ねると、当時の村長で「君の曽祖父」だと言われたのを覚えている。疎開者の中には苛めの対象になっていた人も居たが別名「寅」と言われた祖父がわたしを助けてくれた。私が学校に入って直ぐ、たまたま東京弁を話せたので学芸会への出演を頼まれ、せりふを覚えられない子供の代役を命ぜられ、一年坊の校長先生とあだなを付けられた。これが切っ掛けで中学半ばまで毎年舞台に立っていた。

雪の中の夕刊新聞の配達、焚き木拾い、納豆売り等、生活の助けに色んな事をやったが、今は楽しい思い出になっている。

高校に入ってから、昭和三十年に、故斎藤和雄先生演出の田中千禾夫作品「おふくろ」に出演した。この作品は田中の劇作家、演出家として処女作であり又、心理劇の一幕物として有名な出世作であった。一幕もののせりふ主体の劇であり、音響効果の不備が要因で講堂での発声に苦労した事、授業が終わってからの練習は深夜に迄及ぶ事があり、真壁邦子（旧姓高橋）、木村比紗子（旧姓沼田）との共演は忘れ得ぬ思い出となった。私の台詞に「南米へ行って死ぬんだ」があったが、後日一ヶ月半に及ぶ旅をする事になり、現実には「南米に行って楽しんだ」になった。翌三十一年大学準備もあり舞台に立つのは止め、市内高校の演劇連盟会長又、市職員でもあった私が中央公民館使用の許可を獲得、三日間の公演を主催した。税務署に招待状の無税スタンプ押印を依頼に行った時、以前にも連盟の公演申請があったが未清算のまゝだと言われたが容赦してくれた。又この年に教育映画、社会映画で著名な櫻映画社から私に出演依頼があったが、撮影に三ヶ月を要すると言われたので市役所をそんなに長く休めないとお断りした。

昭和三十年八月、霞が関首相官邸で全国青少年代表者会議が開催された時、私が県代表に選ばれ、指名に依り初日議長、二日目副議長に任命されたが二日目の議長が議長交代の動議で解任され、結局連日議長を務める破目になった。数日違いで原爆反対、禁止の大会が広島で行われたせいか本大会でも原爆問題が議題になり、弁論大会選出の代表も多いことから喧喧ごうごうとなり必死で議事進行を諮った。

土井先生との植物観察ハイキング、枕投げ修学旅行、先生の質問に「自分は答えられない時でも車谷はいつも挙手をする」との陰口を耳にしたので、友人ＳとＮの家庭教師をする破目になった時、魚屋だったＳの母親が寸志として魚と下着をくれたが、そのけなげな親心を断り切れなかった。計らずも三人共母子家庭であり、この時代の世情を物語る一つの出来事である。

昭和三十年に母校の先輩、鈴木和夫（亡）、深瀬守巨（元東京同窓会長）の跡を追って早大に進み、高校、大学と延べ八年に及ぶ奨学金返済が大変だった。現在は千葉に住んでいるが、山形市役所で覚えた囲碁を趣味に、たまに日本囲碁本部に出かけて、プロの指導碁を受け、見ず知らずの人と打碁を楽しんでいる。

最後に賤ヶ岳七本槍の一人で豊臣秀頼の後見人として名高い片桐且元ゆかりの片桐重勝先生（亡）、家庭にまで呼んで、生徒達の相談相手となり、親身になってお世話をしてくれた斉藤吉雄先生夫妻を初め、諸先生方の教えに感謝しつつ私の体験や想いの一端を述べてつたない筆をおきます。

# 懐かしき思い出

**平岡 健志**（夜間部同窓会会長 昭和32年卒）

毎年春山形市内で一番早く咲く桜が校舎中庭で４月10日頃開花しました。満開になるまでの日々を数える楽しみがありました。また夏に入るとグランドに在る２本の大木の柳が芽吹き、カブト虫やクワガタ、黄金虫が戯れていました。さて、私の職場は教職員組合で書記として採用されました、小中高校をバイクで回り連絡委員を勤めていましたので夜間部の私にとって良い職場でした。

## 校舎の思い出

昭和28年後半教室の照明が電球から蛍光灯に切り替えられた時は、教室が急に明るくなり仲間たちがニコニコ顔で歓喜をあげました。勿論グランドにも大照明灯がつけられ授業、クラブ活動両面にわたって朗報となりました。また、体育館が新設され10月29日から３日間創立70周年記念のなかで紹介されました。そして本校舎と体育館を結ぶ通路に雨天でも緊急事態でのときでも消防自動車が通れるように太鼓橋が架けられました。事業の中心となる新体育館の建設については県費補助事業の見とうしがついた昭和28年、学校。ＰＴＡ。同窓会が一体となって記念事業実行委員会を設立してほ本格的な取り組みを開始しました。体育館は、バスケットボールコート２面をとり、当時の高校の設置基準をはるかに上回る大きさでした。付属施設として用具室・更衣室・シャワー室・トイレを階下に設けて。二階には同窓会集会室２室と観覧席を設けたから、当時としては県内に例をみない大規模な体育館となり、月山を背にする全景は、威風堂々として東高の新たな飛躍を象徴するのでありました。その他、記念事業としては、東体操場と器具室を大改装してここに図書館を移転しました。閲覧室は120人分の机が用意されました。移転を機会に、全日制、定時制を一本化した運営となり、これによって東高生は課程を問わず昼夜を通した利用が可能になりました。また、弓道場がグランド東方に移転新築されました。その後現在の新校舎が建設され二階が主に定時制課程の職員室や教室に割り当てられました。図書室は定時制課程の蛍雪文庫がありしばらくして全日制課程の栂野文庫へ吸収合併されました。山形東高等学校夜間部蛍雪寮も合併して山形東高等学校奨学寮として昭和31年４月入寮開始しました。

昭和31年８月明るい話題が二つ入りました。19日に山形市で開催された第３回山形県高等学校定時制総合体育大会に於いて男子が総合二連勝を果たしました。ついで20日に、同窓生の先輩、吾妻兼次郎氏の講演会が開催されました。吾妻氏は昭和24年山形一高夜間部第一回の卒業で、東京芸術大学に進学し在学中から彫刻に優れ、昭和28年には新制作派の展覧会に出品した三点が入選、しかもその中の一点「裸婦像」が文部省買い上げとなって、その優れた才能が認められ新進気鋭の彫刻家に対して、昭和31年９月世界に飛躍すべくイタリア留学のチャンスが与えられた。資格はイタリア政府給費留学生で期間は一年、ミラノ美術学校に入学してマリノ＝マリーニ教授に師事して彫刻を学ぶことになった。渡欧を目前にしたこの日、吾妻氏は後輩のために母校を訪れ講演をおこないました。体験を通した話は二時間の長さを全く感じさせない迫力に満ちたものでありました。年度末に発行された「自治会誌」はこの講演の感想をいくつか掲載したなかで、四年生の沼田比沙子さんは次のように感じとった「私は今まで多くの偉人の伝記等を機会ある毎に読んできた。そしてその度にその偉業を成すまでの辛苦に耐えた生命力の強さに感嘆の溜息をついた。だがその反面、心の一部にはこれは本なのであるから、誇張が少しは交じっているのだろう、実際はこれ程ではないかも知れないという気がしないでもなかった。しかし吾妻先生の講演を聴いて心の底から本当の偉人の姿を知ったのである。」と述べている。それは講演を聴いた全ての者に共通する感想であった。吾妻氏は留学の後「イタリア音信」と題する通信を送られて、留学生活の様子を伝えているが、「絵でも彫刻でも詩でも総て生活の中から生まれて行くべきものですから、やはりイタリア生活の中から自分を引き出して行きたいと思っております。」と述べている。



## 部活の思い出

昭和32年、生徒自治会は生徒会と改名された。

昭和49年県高校定時制総体にてバスケットボール部（県高校総体三位代表として、東北大会に出場）、バレーボール部、バトミントン部は40年代後半県内無敵の圧倒的な強さを発揮し創立90周年記念日に三年連続優勝による永久杯を持ち帰りました。個人では県総体水泳大会ブレスト部で優勝を荒井健悦君、全国定時制総体柔道で三位に、田苗邦悦君等の活躍がありました。

# 夜間部時代の思い出

**林 正邦**（昭和33年卒）

## 私が山形東高夜間部に入学した動機について

私事で（家庭事情）書きます。両親共小学校の先生をしておりました。（米沢市東部小学校、西部小学校）台湾（高雄市）小学校、昭和14年１月～昭和16年８月内地へ、両親共早死にしました。（父親、昭和、16年９月、母親、昭和22年２月）それから叔母に引き取られ、札幌市（１年５ヵ月在住）へ、それから山形市へ事情で山形養護所へ入所しました。中学２年より、そこで入学受験して――山形東高夜間部へ合格しました。（昭和29年３月中学卒業）

私の通学、通勤は山形養護所から自転車で渋谷印刷所（１年９ヵ月勤務）に、その後自分で稼いで勉学と生活しなければと牛乳配達｛朝、昼（山形市役所）｝を２年３ヵ月やり、貯金が出来まして、昭和33年３月無事に卒業して上京した次第です。

## 学校生活について

奨学寮が出来て一期生に入った。その時に先輩工藤さんがいました。そこから渋谷印刷所へ、後は牛乳配達。

## 入学の状況は

山形養護所で頑張って勉強しましたが結果として全員入学でした。そして成績は良くて学級委員をさせられた。最初２年間は佐藤宮蔵先生です。部活は最初二年間はバレー部です。平岡さんに教わりました。後の二年間は伊藤辰雄先生です。演劇部です。旧姓高橋邦子さん（真壁）四年生に部長になり、皆と仲良くやりました、皆さまの顔がうかんできました。

## 奨学舎の生活について

１部屋４名で２段ベッド２つ、机は窓際に横並びで４つありました。市内以外からいろんな方が入寮してきました。私の場合は、牛乳配達は朝が早いので同部屋の方に迷惑をかけたと思います。食事の件、朝食と夕食、時間が限られます。まかないをやっている方は柏倉さんと安孫子さんでした、私は犬が好きで牛乳配達先の家より小犬を貰って育てました、エサやりに苦労しました。山形東高夜間部に入学して一生懸命に勉学に生活に頑張りました。健康が第一で何事もなく、昭和33年３月に卒業しました。

上京しました。同級生の原田善次郎さんと一緒で伊藤辰雄先生が同行してくれまして目白の竹屋呉服店へと行く、そこで住込みの従業員として勤務、その後呉服業界へ（一時挫折しました）そして、同級生の高橋忠さんが東京同窓会に参加して下さいました。昭和33年に上京した方は６，７名位だと思います、その時代では少ないです。特に苦労したのは就職の時に両親がいない方や保証人がいない方は成績が良くてもダメでした。

その事が一番印象に残ります。

## 山形東高夜間部思い出

**原田 善次郎**（昭和33年卒）

私達の頃は戦後の日本が、少しずつながらも日本の将来に向かって、日本を大分取り戻して居る頃でした。私も中学の時、新聞配達をしたりして、ちょっとでも家計の足しに成る様頑張って居ました。ある時、十日町のマル谷、殖産銀行の社長の所で働いて見るかと近所の人から話しが有り、山東高に行けるならと言う条件で働く事に成りました。もちろん住み込みでした。入学が決まりデッチ奉公は何んでもしなければ成りませんでした。毎日、毎日辛い仕事でした。学校に行くと、身体も心も軽く成り元気が戻りました。特に担任の先生が伊藤辰雄先生でした。何時もニコニコとして癒してくれました。勉強にも力が入りました。

中学の時から習って居たので、クラブ活動は柔道部に入り、大沼先生だったかなあーー？もう初段の資格が取れるよと云ってくれました。とても嬉かったです、私も警官に成りたかったのですが目が色弱の為あきらめ、昭和33年同級生と就職列車で上京当時東京タワーが　1／3　位出来て居ました。私の就職先は、新生冷蔵k･k　の会社で冷蔵庫を作る会社です。社長が山形の天童出身で工場長も社長の弟で、すごく良くしてくれました。私もその後、工場長になり、定年後神奈川の綾瀬市に住み､海老名市のケアーセンターに就職し、ヘルパー二級を得て身体障害者や精神障害者の世話をし、75歳で定年、その後障害を持った子供達のボランティアに入り、途中脳梗塞で倒れてしまいました。子供さんのお母さんに励まされプールに何んとか行って居る内に大分良く成り何とか少しの事が出来る様に成りました。今、考えると高校時代に頑張れた事のお陰だと思います。

## 「東高校の思い出」

**井上 道夫**（昭和33年卒）

学校へ行くには、私の住み込み先、本町は「八文字屋書店」前の榎森勘右ェ門商店」（大二ダイニ、と言って味噌、醤油、漬物などを作って売る店）から、通学は友人の峯田正君が迎えに来てくれて、二人で歩いて通学した。間に合わない時は、峯田君に先に行って貰って慌てて、夕飯をかっこみ自転車を飛ばした。

本町通りをすぐ右に折れ、色街（これは卒業間近売春禁止法が成立して知った事ですが･･･）を通り、映画館通りを抜け、県庁を左に見て、すぐ東高だ。若かったせいか仕事で疲れているだろうに、歩くのは平気だった。歩く時間はどれ位かかかったのだろう、多分、二、三十分だったと思う。

映画館の前を通って行くのだが面白そうな映画が上映されていると授業など「うわの空」で早く帰りたく、早引きの理由を色々考えて早退してそのまま、映画館へ潜り込んだのは一度や二度では無い。

学校の勉強はさほど面白いとは思わないせいか昼間のきつい仕事のせいか、いつの間にか机にうつぶせになって眠りこけてしまう事がよく有った。目が覚めると先生は一人一生懸命喋っていて、申し訳ないなーと、あたりを見回すと、ほとんどの人が眠りこけていた。なんだか先生が気の毒に思ったものである。多分先生も我々が疲れているのは理解して、そっとしておいたのでしょう。そんな私でも勉強そのものは嫌いでは無かったので成績はそこそこの出来で、人に教える事も出来たのは不思議である。分らない事が有ると、よく先生にも質問したし、またクラスの島貫君と鎌上君と私の三人で一番学校に近い鎌上君の家に上り込んで復習や予習をしたものである。この島貫君は柔道初段の猛者である。クラスには一癖も二癖も有りそうな恐いお兄さんが二、三人は居たが私にはこの島貫君が付いていたので優男？の私でも恐い者なしでいられた。

高校の学科は単位制である程度の成績を取らないと進級できないし、卒業も出来ず留年と言う事になる。いくら勉強好きと言っても昼働いて夜学校というのはきついもので、そうそう勉強する時間が有る訳ではない。そこで考えたのは、今はもう時効になったから打明けるが私は配達が仕事だったので、こっそり、本やノートを持ち出して自転車に積み込んで、霞城公園などで自転車を倒して勉強に励んだ。自転車を倒したのは自転車には店の看板が掛かっており、他人に感付かれない為の手段であった。その他、理解の有るお得意さんの家に上げて頂いて、勉強した事も有る。配達や注文取りの私には都合の良い方法だった。働いている店の人も、工場の人も、社長も何も言わなかった。薄々感づいていたのではないかと思う。だが、注文取りや配達する小僧は私一人しか居なかったので、やめたら困るからと放っておいたのかも知れない。

私はただ漠然と高校に入り勉学に励んだに過ぎず、特に何に成りたいと言う目標はなかった。でも、今思えばこの苦学生時代があったからこそ同じ会社で四十年も働く事が出来たのではないかとつくづく思う昨今である。

## 回想

**遠藤 久一**（ 昭和34年卒）

喜寿を迎えこれまでの歳月、人生を振り返るとまさに万感の思いがあります。やり直すことが出来ればと思えることも無くはないのですが自分なりには精一杯生きてきたと納得できる部類かなあと思えるこの頃ではあります。

昔をおもえば中学の頃周りには農家が多かったので長男は後を継ぐのは当然と思っていたので高校にはいかないつもりでいました。進路指導の時先生から仕事を手伝いながらでも学べるとのおすすめもあり夜間部に入ったのでした。仲間となった人たちはそれぞれ目的を持ち、また方々の地域から集ってきていて考え方も多様で、皆向学心と未来に対する希望で輝いていました。それに比べ自分の安易さを思い知らされた感じがしました。自分にとっては10代後半の４年間の学生生活、夕方からの短い時間の勉強や行事での中でしたが自分形成とその後の人生に於いて今を生きるベースが築かれたといってもいいと思います。当時戦後10年を過ぎてそろそろ経済成長が加速し始める頃でしたが家庭的にはまだまだ発展途上だったと思います。冬などは自転車のタイヤに雪が絡み付いて引っ張って登校したこと等が何度かありましたが病気以外は休まずに通いました。ある時は寒い時期、時折帰り際に学校近くの団子屋さんでアツアツの大福を食べるのがとてもおいしかったのを今でも懐かしく覚えています。一緒に食べた市川君、元気にしてると思いますが卒業以来ご無沙汰です。いろいろと思い出されるのですが古い写真の様にセピア色に見えるのはやはり60年をも経たいまだからでしょうね。

自分の仕事も農業一筋で来ましたが時代とともに状況が変わりこれからは国外の農業情勢にも左右される時代になると思われます。食糧安保の面からも衰退しない農業政策を願っているところです。次世代での在り様はなかなか見えてこないのが現実ですが野菜の方では一部に始められている未来的な施設で先端のＩＴを駆使した野菜工場などを想像するのですがやはり自分的には自然の中で太陽の光を受けて育つ野菜に勝るものはないと今でも考えています。

## 同窓の縁

**小笠原 毅**（昭和34年卒）

昭和34年３月、県立山形東高等学校（夜間部）を卒業したが、そのときは３歳下の弟も同校に在籍していた。

大正元年生まれの父親は、法律事務所のアルバイトをしながら、山形夜間中学に入学したそうだが、兵役の為途中退学したとのこと。

その後、私の子供二人が、県立山形東高等学校へ入学、卒業し、現在は夫々二人の子供の母親と

なっている。山形東高等学校との縁である。

私が在学していた頃は、定員も多く４クラス編成で、学友もなかなか多々済々で賑やかな風景が今も心に残る。

現在には、大沼、大場、太田、大川と大のつく姓の先生方がおられたことも印象に残る。

伊藤辰雄先生には卒業後も同窓会などでいろいろとお世話になったことである。

在学中は、在校時間が午後５時30分頃から午後９時30分頃迄なので、クラブ活動や校外学習等は充分な時間がとれず、日中はそれぞれに仕事を持ち、友達とも交流する時間も、また金もあまりなかった筈なのだが、それでも気の合う仲間と休日のサイクリング、河原での芋煮会、学校の野外活動用のテントを借りて山登りや海でのキャンプ、冬季は授業が終った後、新築西通りの店で「大福まんじゅう」を食べながらの雑談などなど、楽しかった思い出はいっぱいある。今思うと、家族や職場など多くの人達の理解と協力があったんだなと、心から感謝するばかりです。

卒業後は、山形県職員として、教育、企画、社会福祉、保健衛生などいろいろな部署で仕事をさせて頂いてきたが、どこの部署にも部長や課長等に多くの先輩方がおり、何かと目をかけていただいたこと､今思うと同窓とはこう言うことかなと、大変有難いと思うと同時に、いい人生を選択したなあと思う今日此頃である。

# 文集（私の履歴書）

**高橋 幸雄**（昭和34年卒）

## （生い立ち）

私は昭和15年２月山形市の西に当たる柏倉門傳というところで男ばかり５人兄弟の３男として生を受けた。今でこそ山形市に合併（昭和30年代初め）になり山形県の「県民の森」の所在地となっているが、その前は南村山郡柏倉門傳村という山村であり、山形市の西に位置し、山形市内までは南沼原村（沼木）という一つの村を越さなければならない。

親父は隣村の村木沢で農協の技術員（養蚕の先生）をやっていたが、私が小学校３年の時悩溢血で急死した。いつものように朝元気に出かけたが夕方には冷たくなって帰ってきたのである。家族は誰も死に目に会えなかった。数え年40歳の働き盛りであり、お袋は数え年32歳で後家さんになった。余談だが、お袋は一人っ子で親父は婿養子である。親父の旧姓は「江口」で生家は東置賜郡の小滝というところ（現在は南陽市）でそれこそ山あいの山村だが、若い衆を４人ほど抱えており、昔はお蔵も４つほどあったそうである。子供のころ夏休みに親父の実家に行くのが何よりの楽しみであった。というのは私の親からは小遣いをもらった記憶はないが、親父の実家に行けば必ず小遣いをもらえたからである。平成の時代になってから文部省の調査団が調査に入り家系図から江口の先祖は畑谷城の城主であることが分かった。名前は江口五平衛と言い、戦国時代（西暦1600年ころ）に、山形城主最上義光（よしあき）の援軍のもと上杉軍と戦い敗軍の将となり山村の小滝に落ち延びたようである。（現在「県民の森」になっている所が畑谷地区で、城跡に石碑が建てられている）親父が亡くなったとき１番下の弟は生まれて半年経ったばかりで、私は子守しながら農作業をやらされた。そんなことで、私は高校入学は経済的にとても無理と言われていたし、自分でもそう実感していた。したがって、中学卒業間際まで就職すべく職安から担当者がきて数回面接を繰り返していた。そんなある日、担任かの先生から山形東高校夜間部に行ってみてはどうか。と話があった。中学校のクラスは２組までしかなかったが他にも３人位行くことになるかもしれないという。しかし、今まで当中学卒業生で山形の夜間高校に入った例がないのである。第一冬の通学は無理だろうと。

## （学生時代）

４人（私の他に阿部昭博、佐藤次郎、土屋 照の各君）もおれば心強く感じ、兎にも角にも東高夜間部に行くことにした、昭和30年の春である。佐藤、土屋の両君は村中でも山間部の出身で最初から通学は無理なので山形市内に住み込みで昼間働くことに決めたらしい。山形市までは路線バスもあったが、最終便は夕方６時台でお終いなので仕方なしに私と阿部君は農家をやりながら自転車で通うことにした。当時は山形市内まで今のように道路も舗装されてなく砂利道である。それでも夏の間はまだましだが、冬は大変である。何しろ終バスは夕方６時くらいなので、学校帰りは山形市内を出ると市内上町から沼木まで長い原っぱであったが９時半頃には20cm以上もの雪が積もっている。白一色でどこまでが道路かも分からない。おまけに沼木の村を過ぎると須川橋から先、長い登り坂である。そんなわけで仕方なしに冬だけ市内に住み込みで働くことにした。

当時、比較的時給が高く雇い主にいちいち監視されなくて済む牛乳配達が好評であった。見つけたのが城西牛乳である。だが、これも他人が思うほど楽ではない。朝早く道路の新雪に最初に跡をつけるのは新聞配達と牛乳配達である。おまけに東原方面が主たる配達区域だったので城西からはなだらかな登りであり、慣れるまで大変でした。何回もひっくり返しては牛乳瓶を割った。

３年生からは冬も自転車で通学した。なにしろ、家に着くのは夜の10時過ぎである。

昼ご飯食べてからそれまで殆ど何も食べていない。家に着くまでに腹が減って腹が減って、腹の皮と背中の皮がくっつくとはこのことかと思ったものだ。

体だけは丈夫だからと中学校の担任の先生に薦められて夜間に入ったが､流石に４年生になったころ無理がたたり胃を悪くして１か月ほど休学した。

済生館に通院し、ベットが空き次第入院する予定だったが、ある朝突然嘘のように胃の痛みが消え、快癒した。今でも奇跡だと思っている。おかげで入院しなくて済んだ。

経済的には奨学金の助けもありどうにか卒業できた。

我々の前後の学年は３クラス編成であったと思うが、我々34年組は卒業生は４クラスまであった。

４年生になってからそのうちの１クラスは名目上進学組といわれていた。が進学指導するわけでもなく、進学希望者は自分で勉強するしかなかった。

私も何とか山大くらいには入りたいと４年になってから少し勉強した。

運よく現役で山大文理学部に合格できたが、天気の良い日は相変わらず農作業しながらである。

我々の大学時代は安保闘争真っ盛りで、山大も例にもれず盛んであったが、私は１度もデモに参加したことはなく、そういう時はいつもこれ幸いと自宅に帰って農作業をした。

大学２年までは一般教養で農学部も工学部も小白川町の山大本部で過ごすことになっていた。

私を含めた理学部の一部（10名位だったと思う）だけがどういうわけか工学部の機械科の連中と同クラスに入れられた。従って、文理の理学部の連中よりも工学部の機械科の連中に友達が多かった。

一般教養が終了して３年に上がるとき専門学科（物理、化学、数学、生物、地学）を選択しなければならない。私は化学に進みたい気持ちもあったが、実験や教材に金がかかるので、紙と鉛筆だけで済む数学を専攻した。数学には10名くらいいたが、過半数が女性で、しかも私を除いた大多数が高校の教員志望なのである。

大学４年生の時、山形城北高校から数学の先生が胃潰瘍で入院したので代わりに数か月の間、代用教師をしてほしいとゼミの教授を通して話があったので、喜んで受諾した。というのは、当時城北高校は３学年だけで12組あり、数学の時間を月水金の週３日に集約し、１時限から６時限まで空きがないようにまとめるので週３日だけ登校してもらえれば0Kと。しかも時給は当時として最高に良かったからである。

教員を職業にすることは最初から考えていなかったが、将来何があるか分からないので教育実習もして高校の教員免許だけはとっていた。

大学時代のアルバイトといえば特筆しなければならないことがある。

大学に入って間もなく我々の先輩で東高夜間部の物理の先生をしていた山田精徳先生の助手として後輩の授業に出たことである。時給は城北高校に及ぶべきもなかったが。当時の城北高校の富沢校長からは卒業後は城北高校に来てくれと懇願されたが､その時はすでに就職は決まっていたので丁重にお断りした。

就職先として、担当教授から北拓銀（当時は都銀、その後倒産したが都銀が倒産するとは当時は誰も想定できなかった）に行ってほしい旨話があった。

拓銀には北大と山大の数学からシステムエンジニアとして毎年送りこんでいるので、欠かすわけにはいかない。翌年の採用に影響するからとのことだった。

私は３学年の夏休みに、ヒッチハイクよろしく殆ど無銭で北海道旅行を満喫したので、北海道は敬遠したかった。そこで教員志望であった友人のＯ君を説得して拓銀に行ってもらった。余談だが、彼は倒産を機に随分苦労されたようで、60歳の定年直後に他界した。今でも心のどこかに悪いことをしたかなという思いがある。

東京には２歳年上の兄（中学卒業後上京し、夜間高校、夜間大学を卒業）が住んでいたので、東京も敬遠した。大阪からの求人は確か大同生命だけだったような気がする。

初任給が２万円を下回っていた当時、同社の採用条件は数学出身者は文系より３千円ほど高かった。

### （現役時代）

会社に入ってから数学出がなぜ給料が良いのかが分かった。生保会社には各社とも数理部という専門部所があり生命表を駆使して保険料、責任準備金等の計算をはじめ決算を担当するアクチュアリーという専門職が必要とされている。そのため私が定年退職する数年前までは一般企業に義務づけられている公認会計士による監査等は実施されていなかった。しかしこれには資格試験があり、前期（一般数学、法規、保険数学１）、後期（統計学、保険数学２、経営学）の試験に合格すれば手当がアップするのである。丁度我々が入社する直前には生保と信託銀行が扱う企業年金制度が導入され、信託銀行は生保（それまではアクチュアリーは生保会社特有であった）からアクチュアリーを年収の大幅アップは勿論、家付きでトレード合戦があったと聞いており、事実当社の先輩も大手都銀にトレードされていた。

当社内では司法試験、公認会計士資格取得者と同待遇とされており、中にもアクチュアリーは最重要視されていた。正直言って大学入試の勉強よりも入社してからのアクチュアリー試験の勉強の方が何倍かしたような気がする。私も何とか20代で合格することができた。おかげで、オーストラリアのアデレードで開催された国際アクチュアリー学会にも出席させてもらった。40歳のときで、これが初めての海外旅行であった。勿論出張なのでパスポート代も日当も出た。よき思い出である。また､ＭＯＦ担（大蔵省担当）として東京に転勤にもなった。30代の若かりし頃である。

大同生命といえば先般高視聴率で終了したＮＨＫの朝ドラ「あさが来た」の主人公「白岡あさ」（本名は広岡浅子）は大同生命の創業者であると同時に日本初の女子大「日本女子大学」の創設者でもある。

生命会社は戦後ほとんどの会社が株式会社から相互会社となり（日本団体生命、協栄生命、大正生命は株式会社のまま)、大から小まで養老保険主体の経営であった。

昭和40年代半ば、当社は全法連（全国法人連合会）と提携し、家庭中心から企業中心の営業に切り替え、同時に養老中心から掛け捨ての定期保険を主力商品とした。これが奏功してバブルがはじけて生命会社の半分が倒産ないし外社に買収されたが、当社は生き残ることができた。

平成11年に太陽生命と全面的に業務提携し、経営統合を前提に「Ｔ＆Ｄ保険グループ」となったが私は平成12年２月に定年退職した。その後、大同生命は業界で初めて相互会社から株式会社に組織変更し、１年おくれで株式会社化した太陽生命と経営統合（合併ではなく株式を統合）して平成14年「Ｔ＆Ｄホールディングス」として東証一部に上場した。

### （退職後）

小遣い稼ぎには「株」が一番と現役時代から30年以上、趣味と実益を兼ねて細々と株の売買を続けてきた。もともと証券会社店頭の株価ボードを見ているのが楽しかった。丁度退職と期を一にしてパソコンが普及し、自宅で株の売買ができるようになった。手数料は安いしボケ防止にもなり、まさに一石四鳥にもなると思っている。目標は厚生年金受給額を越す収益を上げることであるが、今年はトランプ効果もあり達成できそうである。また、その合間を縫ってゴルフと旅行を楽しんでいる。

旅行では特に我が山形東高校夜間部の同窓生を中核とする「こまくさ会旅行」という名で実施してきた旅行会がある。残念ながら数年前途切れてしまったが。この素晴らしいところは参加者が卒業年次、住所を問わず山形在住から大阪在住まで広範囲にいることである。紙面の都合で詳細は割愛する。

最後になったが、妻も山形東高校夜間部の同級生（旧姓 柴田美保子）である。



## 尺八が、日露交流の架け橋に

**武田 信也**（昭和34年卒）

### 【五百人の観客を前に大成功の演奏】

一昨年12月に国内の舞踊家より誘われ、費用はすべて舞踊家負担でロシア国立チャイコフスキー記念音楽院での公演に行って来ました。

公演の内容は木刀を持った女性が剣舞を舞い、男性が詩吟を唄い、尺八伴奏するのが私の役目です。男性三人と女性二人のメンバーでしたが伴奏は一人だけなので責任重大でした。民謡の伴奏は50年近くやっていますが、今回は初体験なので緊張と不安でいっぱいでした。五百席の会場はロシア人の観客で満席で、マナーもよく、ノーマイクにも関わらず熱心に聴いて（観て）下さり気持ちよく演奏ができて大成功でした。

### 【氷点下の気候、生活様式のギャップに驚く】

この二、三年の冬は世界的に異常気象でロシアも数十年振りの暖冬でした。それでも洗車するとドアが凍って、どの車も泥だらけで走っているのには驚きました。又地下鉄の椅子は堅い板だけで、それに街のあちこちで寒い吹雪の中、乞食が立っていて、日本より数十年遅れている様な感じでした。連日暖冬といっても、氷点下五度以下と寒く、そのため玄関や窓の扉が二重に出来ており、それに加えセントラルスチーム暖房が一日中きいているので夏並みに暖かく、室内は半袖姿。そしてベッドは毛布一枚で十分です。

物価は日本より少し安いが、毎日飲む飲料水がビールやコーラーより高いのには驚きました。料理はたいていロに合うが、ご飯はぽろぽろで粘りがなく、ほとんど食べられない状態でした。又、昼食時間は12時と思い込んでいましたが、ロシアでは午後２時で、新たな発見でした。

日本の伝統文化である琴、三味線、尺八などの邦楽に興味をもった人が多く、将来はプロを目指して毎日８時間も尺八のレッスンをしている学生にも出会いました。

### 【日露友好ムードでの打ち上げパーテイ】

10日間の滞在中一回の公演でしたが無事に終え、滞在最後の日に楽しみな打ち上げパーテイがあり、日露友好ムードの中、40度のウオッカで乾杯が始まり、身振り、手振りで会話も弾み、それぞれの国の歌を唄い、楽しい一夜が過ぎました。翌日、日露間の文化交流の架け橋になることを微力ながら願いつつ、モスクワ空港より関係者の人々に見送られ、時間の長い空の旅の帰路に着きました。

## 徒然の人生と回顧

**丹野 弘三**（蛍雪会 昭和34年卒）

### はじめに高校時代

昼は農業に従事しながら山東夜間部を昭和34年卒業した。兼業農家の五人兄妹の三男として中学―高校時代を通して農業と家事（母は中学一年の時他界）を手伝う。高校卒業時には農業の後継者もなく代々の田畑を私の代で跡絶えた事は断腸の思いであり、今も忘れる事はない。

高校の思い出には学校行事に参加した蔵王キャンプ、会津磐梯山や鳥海登山、東沢公園へのサイクリングや馬見ヶ崎河原の芋煮会など楽しい思い出になっている。又農繁期には農家の人手不足からお互い同級生仲間で農作業（田植、稲刈り）の手伝いをした事である。毎日の農作業は田畑の雑草との戦いでもあり、疲れたまゝ夕方には登校したが教室では、あまり苦にならず通学出来た事など懐かしく思う。四年間を通して向学心に燃えた同級生や苦学しながら山東高奨学寮に入り凛とした寮生の姿にも励まされ、私は明日への「学び」に挑戦する希望を与えてもらったと思っている。

## 東京での学生生活

高校卒業後、同級生３人で上京、故郷を後にした。東京は武蔵野の地で住込店員の新聞配達で生計を立て東京生活の第一歩が始まった。朝は早い。夜中の３時過ぎ頃にはＪＲ中央線の駅へ新聞運搬車の到着を待ち新聞集配、朝、夕刊配達他、集金業務などが毎日の日課である。その後同級生３人はそれぞれの志望大学へ進学し３人共、夏休み頃まで住込みアルバイトを辞めた。睡眠不足の毎日だった事を覚えている。

昭和34年春、大学入学後、第二年次には60年全学連安保闘争が始まり激動の学生時代を迎える。当時日本の社会と政治は大きく転換する時代で改憲路線に不安を感じる国民は多かったと思う。

こうした中、戦後育った若い世代は国民的反対運動として「60年安保闘争」が始まった。大学は休講となり授業もなく、大学自治会を中心に国会周辺へ抗議集会に参加した事が甦る。この闘争で東京大学の女子学生が機動隊と衝突して死亡した。その後条約の批准で安保闘争の火は鎮っていった。

第三年次になると、演習科目の「農業経済論」のゼミを専攻、13名程履修を許可された。高校時代の農業経験を生かし将来、関係分野（世界の食糧問題等）での仕事を見据えた選択だった。ゼミの思い出には、夏休みを利用して岩手県花巻市太田地区の農村実態調査へ指導教授とゼミ生20余名程で現地農事センターで自炊生活をし、八日間程過ごした。その間、現地で約140戸の戸別訪問調査を行った。当ゼミの活動は岩手日報でも報道された。東北純農村の現地の課題は「後継者問題や農家の嫁不足etc等深刻な問題になっていた。

昭和36年秋には全国大学インターゼミナール大会出場、会場は京都大学で三日間の全国大会へ当ゼミは発表校として参加。大会は発表と討論（二日間）三日目は参加者約300余名程、京都特別史跡観光でした。京都滞在中、京都大学チームの宿泊旅館より、彼らが歌う旧制三高の寮歌（紅もゆる丘の花、琵琶湖周航の歌etc）を聴き乍ら京都の夜を過ごした事が印象的に残っている。

第四年次には同郷の後輩２人（鶴岡南高出身）が三年次ゼミに入ってきた。（彼等は卒業後、故郷へUタウンし、それぞれ山形銀行と鶴岡信用金庫に就職した。）ゼミ卒業生の進路は農業団体分野以外に金融界、大手ゼネコン、東京都庁、高校教員等へ多岐に及んでいる。

尚、四年間を通して授業の休講や合間にもいろんなアルバイトを続けた。又授業が終って夜間のバイトでは体調を崩し、一時実家に帰省し休養する事もあった。三年、四年次には卒論や、就活もあり日本育英会奨学金で補填する事になり、無事卒業する事が出来た。

## 組織人としての会社人生：

卒業後は専攻ゼミの関係もあって進路は食品業界へ。会社では主に国内総代理店三社（大手商社の三菱商事、双日と山崎製パン）の傘下特約店に対する販売管理（企画とフォロー）であった。そして平成11年９月外資系食品メーカーの定年を迎えた。その後、関係企業で環境問題（ＩＳＯ）に取り組み、会社人生に終止符を打った。現役時代の思い出には、昭和49年新宿副都心に高層ビルが誕生し「超高層ビル時代」の幕開けとなった。私の勤務する会社（本社）も銀座から新宿住友ビル（45Ｆ）に移転した。（現在手狭になり野村ビルへ移転）。当時の高層ビル誕生で見学者が連日押し寄せ高速エレベーターの前には長い列をなし、会社へ戻るのに一苦労した事など思い出す。

総じて私の会社人生は大変恵まれた職場環境であった。多くの良きパートナーにも恵まれ、企業間の人間関係にも恵まれたことである。企業の組織人として「マネジメントサイクル」を軸に持続可能な企業の在り方を学んだ事は、その後のシニア人生にも広く活用でき、エンジョイする事が出来た。

## 山形東高同窓との絆と思い出：

今日まで同窓生有志の蛍雪会のメンバーをコアに多くのＯＢは結束してその絆は深い。有志で「こまくさ会」と称し校章に因んだ呼称で旅行を中心に親睦を図る会を立ち上げた。ちなみにその第１回が2002年10月より国内旅行10回参加、又海外旅行も４回実施してきた。この間、山東ＯＢのＪＴＢ会長（当時）舩山龍二様、山形路の旅では、万国屋社長（当時）の石田照雄様にも格別の「おもてなし」を賜り、楽しい旅になった事に衷心より感謝申し上げたい。



又、2008年９月山形大学結城章夫新学長をこまくさ会有志で山形大学（学長室）へ就任インタビューで訪問した思い出がある。ご多用の中、心よく対応して頂いた。「国立大学の現状と課題」について、現場からの視点でお話を伺い大変感銘を受けた。今日でも御三人の方とは東京同窓会等でお会いしている。

今日まで山中・山東東京同窓会との絆は歴代の会長、幹事長、関係役員等のご支援により連携と交流が深まっており、夜間部同窓会の前途を思えば大変うれしい限りと思っている。同じ舎で学んだご縁を大切に母校の隆盛を念として同窓の「Face to Face」の相互交流を促進し新しい歴史の同窓文化を創造して山東から発信される事を願ってやまない。

## 山形東高創立130周年記念事業活動について：

母校同窓会本部事務局より記念事業の概要と募金の依頼が寄せられた。

これを受けて深瀬守巨氏（昭和29年）と私が中心となって、首都圏OBの募金活動を開始した。その結果夜間部として合計305,000円を母校記念事業に寄付する事が出来ました。

ここに支援を賜ったご芳名は母校の校史に末永く顕彰されることになり、ご協力を頂いた皆様に改めて深甚の謝意を表したいと思います。

## おわりに山東夜間部の「スピリット」でシニア人生を

今日のグローバル社会では未知のものと向き合い、異文化とのコミュニケーション力が求められている。これまで走り続けてきた人生77年、過剰なまでの便利なものを追求し数字で示す効率の世界でした。それだけに結果として失ったものも多かったように思う。晩年も多様な社会と向き合うことが自分らしい生き方かもしれない。

最後にこれまでの喜寿人生が無事、今日あるのも県下の勤労青少年として四年間の夜学生活で得た賜り物であり、山東夜間部の「不撓不屈」の精神と県立山形夜間中学の校歌（土井晩翠作詞）の一節が心の根底にあり、明日への生きる力の糧となって駆け抜けてこれたものと思っている。

この精神を後輩へと連綿と引き継ぎ守られることを祈念したい。同窓の皆様と共に「故郷と山東夜間部に乾杯、山形東高に栄光あれ！」と申し上げて終りとしたい。

# わがふるさと小国町

**舟山 恒**（昭和34年卒）

わが町は、山形県の南西、新潟県境に位置し、山形県の総面積の7.9％を占め、林野が96.2%、人口8,000人で、北は朝日連峰、南は飯豊連峰に囲まれた小国盆地である。

小国は雪深い町である。11月末になれば、日本海から吹き付ける冷たい北西の風が時折みぞれ交じりの雨を降らし、やがて雪へと変わり、12月に入れば終日鉛色した空が続き、めったに青空を見ることが無くなって来るのです。そして長い長い冬の季節が続くのです。毎日毎日降る雪との戦いになり、家の玄関から道路までの除雪は勿論、家の屋根に積もった雪も落とさなければならない。そんな中で冬が終わるまで雪との戦いは続くのです。

私の小さかった頃は、現在のように生活道路確保のための重機による除雪体制もできておらず、すべてが手作業で行っていました。私が生まれたところは町中心部から12kmも山奥でしたので何かあれば町まで３時間もかけて歩くのです。小国町は春夏秋冬それぞれに織りなす自然の景観がそこに暮らす人々にとって今から考えれば落差があっても、それが当たり前だったのだと思います。

縁あって日本電興という東芝系の会社に入って39年間勤務しました。マツダアークカーボン、石英ガラス、フェロアオイなどを製造販売する会社で、当時はまだ半導体などの製品化もない状況でした。わがふるさと小国にこのような一流企業が設立された経緯はまた小国の自然だからこその立地条件があったのです。それはこの雪深さにあったのです。北の朝日連峰、南の飯豊連峰に降る雪は朝日を源流とする荒川や飯豊を源流とする玉川が齎す水量は大きなものだったのです。雪解けの水は、水力発電の源になり

えたのです。地球の温暖化を防止する先駆者たり得たことがこの地での企業活動の源になったのです。

このような歴史の中でわがふるさと小国は、どんどん発展を続けながら、かっては小国駅から会社の正門まで従業員の列が朝の通勤時には繋がるほどでした。

世界経済の変動に伴って会社も紆余曲折により半導体関連に志向し、現在に至っています。今年も、雪深い小国にも漸く春が来て、今や桜が満開なのです。東京などからみると約１か月遅い桜ではあるが、自然が豊かでこれからは四方の山のブナや檜も芽吹きどんどん緑が濃さを増してくるのです。長い長い冬の、雪の季節の終わり、これからまぶしい春の日差しが強くなるばかりである。今は小国も道路はいくら降雪量が多くても生活道路や幹線道路も除雪が行き届き、真冬でも山形市や新潟市へは車で２時間弱で行ける時代になりました。前に書きましたが自然の豊かさの中で生活環境も大きく様変わりしても、変わらないわがふるさと小国町の人情と自然は何物にも代えがたいものであることを私の先輩諸兄並びに後輩たちに贈りたいものです。

## 高校４年間の思い出

**峯田 正**（昭和34年卒）

今、私は山形東高等学校夜間部に進学して良かったとつくづく思う。

高校受験時の私は、父が病気休養退職したような状態で、貧しく学費等を出して貰える様な状態ではなかった。故に進学する気持もなかった。しかし中学卒業年の時、担任教師の家庭訪問を父親と共に受け、これからはとにかく高校だけは出なければならないと。そして、アルバイト先は何か見つけてくるからと、強く説得されて受験し無事合格入学した。

同じ中学校からは10人位入学しました。その中には農業の働き手が欲しいと思われた人もいました。入学時、父と兄が同じ会社に勤めていたので、その会社社長から今度真室川町から、お前と同じ高校へ行く従業員がくるから、一緒に通学するように言われていると聞かされた。こんなわけで４年間お互いに誘い合って徒歩通学しました。雨の日も風の日も雪の日も、病気以外誘いあった。

アルバイトは４年間、卒業するまで勤めました。通学しやすい様にと早く終わらせて貰っていた（アルバイト料は安かったけど）ので、自宅に戻り食事をしてから登校出来ました。

山形市内は、扇状地であると中学時代に教わった。明治時代に初代山形県令三島通庸が、馬見ヶ崎川の流れを変えた事も。山形駅、北山形駅までは上り一方、母校から上宝沢、千歳山方面も上り、この市街地を私は山形駅からお茶を、学友は七日町本町から味噌、醤油を自転車に積みペタルを一生懸命漕ぎ配達をした。また多くの同級生も重い商品を積んで自転車で配達に走り回っていた。

学校には購買部がありコッペパンと牛乳がありました。これで多くの学友が空腹、疲れを癒されたのではないでしょうか。放課後、帰宅時間を気にせずとも良かったので、教員室から卓球道具を借りて旧体育館で暗い照明の中５，６人の仲間でしばしの時を楽しみました。

部活は、ラジオ部に入り部員と共にラジオを組立て教員室に贈りました。そのラジオを通して、どこの国の夏のオリンピック大会か忘れましたが、日本選手がレスリングで優勝の海外実況放送を校内に流してくれたのを聞きました。

この様な思い出のある母校夜間部が閉程されたことは残念でたまりません。でも東京支部同窓会は今も続いています。心強いです。

これからも、「羽前の三山」、「こまくさ萌ゆる」の校歌、生徒会の歌を唄い続けられたらと思います。

林部德司　画



## 母校探訪―「奨学寮」を回顧して

**安孫子市郎**（昭和34年卒）

在りし日の奨学寮

卒業以来 40 年間も訪れたことがなかった母校を、最近の 12 年間だけで数回訪問する機会に恵まれました。還暦を迎えた頃になってやっと同窓会活動を少々お手伝いするようになったせいでしょうか。創立 100 周年を記念して建設されたという現校舎は無論小生にとっては目新しいかぎりで、わずかに校庭の南縁に立つ柳の古木と西南角のヒマラヤ杉の大樹が小生が在学していた頃のグラウンドの名残を現在にまで留めてくれているようです。それと現校舎の正面玄関が、斬新で現代的なデザインではありながら、どことなく旧校舎の玄関の趣きや佇まいを連想させてくれるような気も致します。現校舎の設計施行は我々の大先輩でもある市村健一氏（昭和 20 年 3 月山形夜間中学卒業、東北大学工学部卒、市村工務店（株）代表取締役）によるものであるという。その玄関ホールで、訪問者を迎えてくれる造型作品が、やはり夜間部の先輩である著名な彫刻家、吾妻兼治郎氏（昭和 24 年 3 月山形第一高校夜間部卒業、東京芸術大学卒業後ミラノ市留学）からの寄贈品であります。

私が在籍した当時の母校はかなり古びた木造校舎で、唯一鉄骨造りの大きな体育館だけが、他の古い校舎とは不似合いな感じの現代的スタイルで、校庭の西側に鎮座しておりました。小生が 2 年生の時、その体育館の北隣の狭いスペースに小じんまりした学生寮が新築され、高校生活の後半 2 年間を私はこの寮で過ごしたものです。その学生寮は夜学生の勉学を支援する為に、その名も「奨学寮」と銘打って、当時の東高夜間部の主事で、あった大築氏等のご尽力のおかげで建立されました。従って、当初は寮生の全員（約 40 名）が夜間部の生徒のみでしたが、じきに昼間部の学生にも寮は開放され、私が卒業する頃には既に 1、2 名の昼間部の生徒を受け入れておりました。その後も年次によっては 3、4 名と昼間部の学生の入居者数が増えたこともあったはずです。夜学生の為の宿泊設備の提供は、旧校舎の片隅にあった用務員用建物の空室を利用して、既に昭和 30 年頃実施されていましたが、収容可能な生徒数は僅かに 10 名余だけでした。昭和 31 年秋頃に初めて寮としての建物が竣工して、収容員数が約 40 名に増加したのです。

通学困難な遠方出身の学生達にとっての福音として誕生した奨学寮も昭和 53 年の春には閉鎖されました。すると、竣工から閉鎖までの僅か 22 年ほどの短い寿命でしかなかったことになります。しかし、この期間に日本経済は飛躍的発展を遂げ、産業構造は激変し、電化社会や車社会が出現し、新幹線やジェット旅客機などの高速輸送手段の発達に伴い大都市への人口集中が進み、他方では伝統的な共同体に根ざしていた生活様式や文化や価値観は次第に影が薄れていった、まさしく激変の 20 有余年でありました。生徒達を取り巻く社会的経済的状況も、この間に一変し、奨学寮はもはや必要不可欠な施設ではなくなっていた。

だが、22 年そこそこで寮を閉鎖せざるを得ない別の理由もあったはずです。用務員用家屋を流用してスタートしたことからもわかるように、当時夜学生用の宿泊設備の必要性は焦眉の急でした。しかし、県から十分な予算が割り当てられたとは到底考えられません。夜学生の父兄からの募金が集まったとも思えません。社会人となった先輩諸兄からの寄付もけっして多額にのぼることはなかったでしょう。そこで、建設費用を節約する為に、山形市内のある病院（= 矢吹医院）が解体された時に出た廃材を譲り受けて、奨学寮の建築資材にしたと言われています。安価に仕上げるためには、他にもあらゆる工夫をしたことでしょうが、その反面、寮としての建物の耐久性能を重視することは出来なかったはずです。結果、年を重ねるごとに施設の傷み具合は相当急速に進行し昭和 50 年を越した頃には、最早使用には耐え難い状態に近づいていたことでしょう。このように、比較的短命に終わった「奨学寮」ですが、日本の社会全体が戦後の窮乏期から奇跡的と謳われる高度経済成長期へと飛躍していった転換期に、山形東高の夜間部の生徒だけではなく幾十名かの昼間部の学生達にとっても拠り所となったあの学生寮は、安普請で建設されながらも、存分にその使命を果たしたと言ってよいと思います。

# 己の道

**松田 哲夫**（昭和34年卒）

その時私は少なからず衝撃を受けた。中学時代の同級生Ａ君は農業の傍ら東高通信課程を卒業したが彼の進んだ道は大学の通信教育であった。後年母校の生徒となるが弛まぬ努力を継続する彼の存在は驚きであり人生の鑑でもあった。

高校を卒業して間もなく私は郵便局に就職し２年ほど経過した、仕事にも慣れコップ酒も覚え、漠然と安定的な生活に浸りながら何かを求めて悶々とした日々を過ごした。

「心機一転」何とか大学に進める方策はないかと悩んだ挙句、東京進出を企てた。賛否両論、忠告もあったが敢えて茨の道を選び、紆余曲折を経て東京に異動できた、それは若さ故の直情的な行動でもあったことは否定できない。東京に出て暫くしたある日、世田谷消防署の前を通った時、昭和27年夏の暑い日に41歳の若さで突然死した父のことが脳裏をかすめた、当時のことを書く余裕は無いが諸々の事情が加わり望んで進んだ道の方向転換を図った。

昭和39年東京オリンピックの年、横浜市消防職員として新たな道に踏み出し、それから２年後26歳ようやく神奈川大学夜間部の門を叩き夢の一部を実現できた。様々な災害現場を経験し更に定年後の10年間の心肺蘇生普及活動を含め50年の現役生活は危険職業従事者として平成19年瑞寶単光章受賞と夢想だにしなかった光を浴びてそれなりに一段落した。

高校時代アルバイトも軌道に乗り、遅ればせながらバスケット部に所属し活動したが、その頃の苦難が夜間魂を育ててくれた。県代表で黄金時代を築いた先輩諸兄が卒業し、他校の昼間部を相手に勝つことが困難であった、少ない練習時間、夜11時を過ぎることもあったが、周囲の理解もあり遅くまで練習することを良しとしてくれた配慮にその時は気がつかず遮二無二行動していた、あれが青春というものだったのか。陽のあたる場所の裏には影の部分がある、負の連鎖がバネとなって後年バスケットボールに係わりを持つ礎はこの時育まれたのかもしれない。

時は流れ、仕事の合い間に小学校を相手に、ミニバスケットの指導者としての機会を得て30有余年、共に汗を流す選手や周りの協力者にも恵まれて、東京代々木体育館での全国大会や千葉県・栃木県での関東大会に出場それなりの結果が得られたことは喜びでありますが、現在も週３回ペースで小学校の体育館に行く今の生活「今日行く場所がある」ことは幸いなのかもしれない。今年も５月の黄金週間に「松田杯」大会が無事終了することが出来ました、「交流の輪」と「技術の向上」を目的とし神奈川県下各地域の連盟から推薦された24チームの交流戦が今年22年目を迎えられる、支えてくれる多くの人に感謝感謝です。現在後期高齢者となって始めた詩吟教室に通いながら、脳活性のため囲碁に手を出し楽しんでいます、歩んできた足跡、回り道はしたけれど前に進めば道がある、新たな道が開けると思っています。

暫く前のこと、期するものがあり道すがら出羽三山の道祖神を垣間見る「さがみ野霊園」に洋式の墓を作り『一粒の麦』と彫り込んで最終序章に備えた。

｛A君とは出羽三山旅行時同行の安斎　富久男氏(昭和63年～平成元年母校勤務)｝



# 私の足跡

**松田 満雄**（昭和34年卒）

私は５反百姓の次男で６人兄妹の４番目に生まれました。生まれた時からやっと生きているような、今でも死ぬのかと母親が毎日心配しながら育ててくれた弱い子供だったと聞いておりました。

小学校に入学しましたが、当初は休む事が多かったと聞いておりました。３年生頃になったら、ようやく近くの子供達と一緒に、仲良く遊んでもらっているのを見て、なんとか皆んなについて行けるぐらい元気な姿に安心して、喜んでいる母親の姿を思い出す時があります。

中学校に入学１年生になってからは、身長と体形も同級生の中位までに成長してくれて学校もほとんど休まず、元気な中学生になった事に気がつき、自信となり学校に行くのが楽しくなりました。

野球部に入部しましたら、五十嵐先生が監督さんで、担任の先生です。東高校夜間部の先輩でもありましたので、勉強、野球、人生の指導を受けるようになった事が、自分には最高の出会いとなりました。１年から２年間はベンチで三年生からはライトで五番のレギュラーで使ってくれました。自分に自信を与えてくれた監督さんに感謝しておりました。

29年春中学卒業後家庭の事情で直ぐ就職する事になりました。15才でした。そこで、母は食べてなくなる食品関係の仕事を選んではどうかと要望がありました。家族６人の子供と親の８人で食べ物で苦労しているのを見て聞いておりましたので、迷わず母の希望する山形の醤油、味噌の丸十大屋さんに学校に入る前に住込みの番頭でお世話になる事で採用をお願いしました。早く家から離れて働く嬉しさだと思いました。

高校に行くことは、まったく考えていなかったところに、恩師の五十嵐先生が自宅に来てくれて父親と相談したのは、東高の夜間部に試験を受けて入るようにすすめることでした。

その時先生も家庭の事情で昼は自分の家の豆腐屋さんの手伝いをしながら夜間高校で苦学しながら勉強して先生までなったこと、苦労話を聞いて、父親も理解して先生の説明で夜間高校に入れる了解をしてくれました。この話合いがもしなかったら、高校にもいかないで中学卒で終わり、今の自分はなかったと思いまして、先生の説得のお陰です。

感謝しております。

いよいよ昼働きながら夜学校に行く、苦学の住込み生活が始まりました、丸十大屋の番頭の仕事は朝掃除からはじまり、小売りのお客様が店に醤油と味噌を買いに来てくれた方に売ることと、注文品の配達は自転車で届ける仕事です。夕方の５時に仕事を終わして学校に行くように、とても理解のある会社でした。給料は月1,500円の３食､食事付きです。15歳まで親から少々貰っていた小使から、何時でも自由に使えるお金をもらって生活出来るのは働きながら学ぶ者の喜びでした。

４年間学んだ高校を34年卒業になりますが、どうしようかと考えた結果、お礼奉公と思い居心地も悪くないのでこのまま丸十に残ることにしまして、営業と配達の担当で39年８月までお世話になりました10年間が、どうしても結婚の前に転職を考えていた時に、丁度でん六が全国販売を目指して、販路拡大のため営業部経験者の中途採用の募集を見て、応募したところ９月入社で採用していただきました。

条件は高卒以上だから34年にもし夜間部の高校を卒業していなかったら､今回の採用は無かったでしょう。五十嵐先生の働きながら学ぶ学校に入る事を教えてもらったおかげです。

でん六の営業部で35年間60才定年まで無事勤める事が出来たのは、昼働いて夜に学んだ、この夜間魂の精神があればこそここまでやってこれたものだと信じております。

でん六の経営理念は顧客第一主義、労使一体、硝子張り、相互信頼の経営を目指して、山形では良い会社に勤めさせて頂いたと今でも思っています。

60才頃からこまくさ会の仲間のみなさんと国内から海外旅行まで何回と一緒させて頂き大変楽しい良い思い出をさせてもらいましたことを、御礼申し上げます。

73才頃まで健康だと思っておりましたら、平成26年12月に脳梗塞で入院、平成27年４月には

椎間板狭窄症の手術で入院、平成27年９月は腸の手術と３回の入退院の繰り返しでした。

お陰様で、頭と胃腸の方が助かり、運転も出来るし、足がふらつき、しびれ痛みはだましだまし、やって行くしかないので、リハビリをやりながら生きていくことだと主治医に言われておりますので、薬は９品飲んで先生と仲良くし、あと何年生きられるか毎日運動で頑張っております。

## 私の人生を変えた高校入学

**吉葉 清子**（昭和34年卒）

東高校夜間部入学の通知が届いた時のことは、一生忘れることができません、何故なら私が生まれて初めて自分の思いを遂げる第一歩だったのですから！！

これから４年間どんなに困難であっても卒業をすること、そして次への目標へ向かうことでした。

我が家は女の子に学問は必要ないが口癖であり兄たちには学習の時間を与えてもわたくしには一度も勉強しなさいと言わず家事手伝いをさせられてきたのです。幾度も女に生まれてきて損をしたと思いが体中に染みついていましたが、このままでいたら自分に未来は無い今ここから自分の人生の第一歩を始めるのだ、もう我慢も限界でした。自分の未来のためにも脱出することが大事なのだ、自分の力で！もし反対されたら家出る覚悟でした。（その時は、中学校を卒業して３年目過ぎており、受験も親にも内緒だったので受験勉強はほとんどできませんでした）不思議に親は夜間合格を分かっても何も言いませんでした。

さて、夜間高校に入ってもアルバイト、家事の手伝い等でやっと勉強できるのは図書館でしたが、夜間の先生たちの学生に理解ある方々には救われました、友人もできました。

今でも忘れられないのは職員の方々が学生が疲れて学習することを誇りに思ってくれる姿です。用務員室に行くといつも「夜間の生徒は真面目だよ」と励ましてくれたことや先生たちは黒板が見やすいようにと照明の位置や机と椅子の高さの調整をしてくれたこと等が卒業後の私の人生に役に立ったことです。

在学中に父親が亡くなり家族から離れるにもひと騒動がありましたがもう以前の私と異なり（自分の人生を自分の力で歩きたい絶対に家族は私の一生を保障できないのだから）口には出しませんでしたが、高校卒業後２年目でやっと家出をするように上京し、保育専門学校夜間部に入学、「自活でもあの時代は夜学生に理解のある職場で、アルバイトが出来たのは幸いでした。」実習先の選択は保育に必要な実習科目はアルバイト先でできるところを選び、無事卒業し、川崎市立の保育所に就職できました。保育の中では、今までの人生経験が生かされ、子どもにとっての保育園は、どうあるべきか学習しながら、長時間過ごす子どもたちの成長と困難を抱えている保護者の方が少しでも子育てしてよかったと思える保育所を目指して働きましたが、途中仕事からくる病気で回復するまで10年かかりました、途中幾度も退職をと思いこみましたが保護者の方々や子どもたちに励まされ回復することができました。

その後も様々な方々に支えられて定年を迎え、今はその恩返しのつもりで地域の保育ボランティアを若い方々に支えられてやっておりますがもう八十歳です、そろそろ引退を考えています。

これも出発点は東高校夜間部への受験・入学が起点となっております。今改めて、私には、初めて自分らしく生きた高校時代が走馬灯のように思い出されます。



## 私の高校時代

**石山 紀雄**（昭和35年卒）

私は天童市大字高楯の床屋の長男として生まれた。私で４代目ということで中学２年の頃には大抵の仕事は出来た。いわゆる門前の小僧で、お弟子さん達が父から指導を受けられている様子を、すごい興味を持ってジッと見つめていました。それが楽しくて毎日学校から帰ってきて、宿題をほったらかしにして見入っていたものです。待合場（待合室などと気のきいた部屋は無し）でお待ちのお客様にお茶を差しあげる、いわゆる茶坊主をし、大人の猥談を聞き、他の子供よりかなり老成っていたと思います。

高校進学の時となり、当然のことながら理容学校へいくべく、山形県立山形職業補導所（現在の山形県立山形高等職業訓練校）を受験。40人の定員に12倍半の五百人が殺到（東根市神町の米軍キャンプが移転、跡に陸上自衛隊が入り、米軍キャンプの従業員八百人が失業）見事合格。進路指導の先生は鼻高々として掲示板に「幸先良し !! 良くやった。石山君おめでとう !! 」と書かれました。床屋の四代目として人生を全うしようと覚悟していたが、高校ぐらいは出なきゃと思い、昭和31年４月、山形県立山形東高等学校定時制第十期生として入学いたしました。

朝五時半起床、昼食の弁当と夕食のおにぎりそして、昼夜二校分のカバンを持って歩いて40分、奥羽本線漆山駅から一番列車七時七分に乗り北山形駅下車、徒歩で30分我が母校山形東高等学校の前を東へ通り、山形気象台を更に東へ進み、突当りが山形職業補導所（元、武徳殿･･･柔道、剣道の道場）に到着、午前八時。午前中学科で午後実習、四時二十分終業。まっすぐ山形東高等学校の図書館へ行き、夕食のおにぎりを食べる。五時半、夜の授業の始まりである。一校時は毎日の睡眠不足と夕食のおにぎりのお陰で、たちまち睡魔に襲われ授業は夢の中。

一年生から生徒会の仕事を命ぜられ、帰りは北山形駅九時半の終列車。帰宅は午後十一時。風呂にも入らず、死んだ様に就寝。六時間の睡眠で翌日の一日が始まるのである。さすがに体力が持たず、風邪と疲労の蓄積で七日間の欠席と相成った。

二年目から千円の中古自転車を買ってもらい、往復自転車で通学。約40キロメートル、当時は総て砂利道。約一時間かけて冬も頑張る。

二年から四年までの三年間皆勤賞を頂いたのは私の自慢であります。もうひとつの自慢は山形県理容コンクールで第一部優勝した事です。大人に混っての優勝は当時、ラジオ、新聞にとり上げられました。

ある日の帰路、三人のチンピラから前、後、右側と塞がれ60円の小銭を捲き上げられた。当日は授業料四百八十円をおさめるのを忘れ、カバンの奥に仕舞い込んでいて助かる。そのチンピラの一人は今大繁盛のラーメン屋のオヤジである。隅に行くとタレの絞り粕を一袋そっと渡してくれる。

高校に通っている内に、自分は一生、田舎の床屋のオヤジで終わるのかと疑問を持つようになり、高校の数学の教師になろうと決心いたしました。

床屋の腕で銀座のヤング軒という理容館でアルバイトをし、親の仕送り無しで大学を出られる予定でした。目指す大学は東京教育大学です。

ずっと生徒会の仕事をしており、毎日のように職員室へ行く機会があり、進路指導の先生から両羽銀行（今の山形銀行）へ受験するようにとのこと。私は大学に進学し、高校の教師になる予定です。千葉か茨城（当時高度経済成長で人口が増加、東京のベッドタウンとして注目）に就職したいのです、と申し上げましたら、その受験勉強として銀行に行って来いとの事でした。第一次試験は何とか合格。当時の渡利校長先生から「石山、二次試験も頑張って来い、長谷川専務と僕は慶応大学で同期だから一声かけておくヨ」とのこと。進路指導の先生と連日面接の勉強で大変でした。結果合格。

密かに東京へ行って帰って来ないと察知していた父は、これ幸いと懸命に銀行に入ることを勧めた。気がついたらアッという間に定年退職。その後五社の企業にお世話になることとなった。ポケットベルの会社を皮切りに、映画館、信販会社、不動産会社、一般の小売業と渡り歩きましたが、それは大変勉強になりました。

当初の志は床屋のオヤジ、次は高校の数学の教師、そして銀行員となりましたが「我が人生に悔いなし」である。最後の銀行は高卒で就職したため、法律をはじめ経済学、税法そして色々な資格試験にチャレンジと独学でガムシャラに勉強いたしました。

大卒の皆さんに負けまいと必死でした。結果四か店の支店長を任せられました。どこに行っても定時制高校の出身であることを自信をもって公言し、それなりの評価を得たものと自負しています。私を育ててくれた我が母校、山形県立山形東高等学校定時制に心から

感謝申し上げ、ペンを置きます。

## 「追憶」

**浦山 重則**（昭和35年卒）

私は第十回（昭和35年三月六日）卒業です。当時は高度経済成長期の中で集団就職で上京しました。私は母子家庭の次男として中学時代より柔道を習いそれを生かした技術を身につけようと本校に入学しました。昼は長男を助け農業に従事、暇な時はアルバイトをしました。入学当初、校舎と講堂に入って見て印象に残るのは右側に「孝」、左側に「義」と書かれている大きな額に飾られたその講堂は、天井は低く、古びた木製の長椅子、しかし県下一の伝統あるその重みはこれから学ぼうとする自分を勇気づけた記憶があります。

一学年の担任は左沢線で通う板垣幸夫先生で堤睦水先生、斉藤吉雄先生とそして最終学年担任は伊藤辰雄先生で我々の大先輩の先生でした。そしていつも校門で監視する佐藤勇蔵先生、剣道部顧問の桑島事務官、共に大変目をかけてもらい特に、桑島先生には柔剣道を通して帰省してからも世話になり、ある時緑町の紅葉公園に誘われて食事をご馳走してもらった事等思い出は尽きません。良い恩師に恵まれた学生時代でした。

学友としては同じ沢線で通う長浜君とはいつも行き帰りも同じで彼は車中でも猛勉強、自分とは雲泥の差あり、彼も母子家庭、そして出世頭である石山君と三人は大の仲良しであった。只、今も残念に思うのは大出世すべく長浜君が高校教師半ばにして波乱万丈ありきで体調を崩し、今は療養生活をしているのが学友として辛いものです。

そして今年平成二十八年六月に学年同窓生の喜寿の祝をし共に学んだ同胞達と旧交の絆で一夜を過ごしました。出席者四十八名、皆さん益々のバイタリティーで余生を謳歌するものと思われます。

最後に喜寿の祝いを迎えて 愚作

若くして 旅立つ同胞（とも）を偲びつつ 吾は剛健にして この域に達す
振りかえれば走馬灯の如し

良き妻そして息子 娘を授かり 孫もみて皆 健在なり
これすべて万物に感謝す

限りある 余生は運を 笹船に

弥 栄

私事で申し訳ありませんが、平成二十九年四月二十九日で結婚満五十年金婚式を迎えるに 愚作

朱（あか）い糸 永久（とわ）と契りし 五十年 米寿も共に まだ白寿まで
弥 栄
（ 唯 我 独 尊 ）



## （私の秘密）

**鹿野 悦弘**（昭和35年卒）

私は入学と同時に卓球部に入部いたしましたが運が悪いとでも言いましょうか、我々の先輩の方が遠征試合で暴力事件を起こしてしまい卓球部として活動を全面的に中止となってしまいました。この事について我々として今後どうするかを、一緒に汗を流して練習に励んでおった仲間の星君・加藤君と話し合った結果、何としても続けたいとの結論となり、次の日より登校日とか休み時間を利用し、職員室に行き顧問の先生に「卓球部の復活を御願いします」の一言を毎日のように御願い続けました。その結果我々の熱意が通じ、ようやく約半年後に実り卓球部が正式に部としての活動が認められました。その時の感動は今でも昨日のように思い出します。この年になって考えるに、何と無謀な行動を取ったのかと顔から火のでるような思い出です。卓球部復活の為の陳情の半年の間には校長先生にお会いしてお話をして頂く機会が何回かありまして、仲間に信頼されるにはどうしなければいけないのか、人間一生の内には何回か大事な決断を下さなければならない時が必ず有る、その時になって慌てる事の無いよう常日頃心構えをしておかないと、とか教室ではなかなか教えて頂けない、色々なお話をお聞きする事が出来、その教えて頂いた事が私のこれまでの人生に如何に参考になっているか計りしれません。私の物の考え方の原点の一つである事は確かです。以上私が家庭にも誰にも話した事のない「私の秘密」のひとつを紹介しました。

皆様にお会い出来る事を楽しみにしております。

## 東高夜間時代

**黒沼 浩**（昭和35年卒）

山形東高夜間生として昭和31年４月に入学、一年一組、暗い教室でした。昼は仏具の塗装師として４年間過ごしました。

夕方は五時終了、学校に通いました。パン屋さんでコッペパンにクリームをつけてもらうと道すがら食べて行きました。それをくり返して四年間が過ぎて行きました。

職人の仕事は続けたくなく、就職試験を受ける事となりました。当時は不景気で仕事不足で大変だったと思います。一社は不合格でしたので山形日産に受験しました。一次は合格、二次の面接試験となりました。五、六人の面接官がおりました。そこで質問されました。君の長所と短所を言ってみなさいと言われとっさ的に頭に手をやり、頭をかき「実は苦労人なんです。」と言うと、社長さんらしい人が「実はオレも苦労人なんで」言うと他の試験官の人たちが顔を合わせて、わっと笑っていたと思います。

それが良かったか四、五日してから採用通知をもらいほっといたしました。そうして卒業後そこに勤めました。

学校時代は仲間たちとサイクリングと蔵王登山等して楽しい思い出があり、初恋の女生とのデートなどして楽しんでおりました。

まさに青春時代だったと思います。清く淡い時代だったと思います。青春の一ページではなかったでしょうか。初恋の方とは結婚出来ませんでしたが。三十年後その女性と会う事がありましたが、又別れてしまいました。

切れた糸はたこの糸のように離ればなれになりました。振り返ってみれば、楽しい事が多かったと思います。

## 「出席できなかった卒業式の想いで」

**齊藤 伺子**（昭和35年卒）

一足先に古希を済ませた私、振り返って見ると、高校に通う時間さえままならず苦労した日々、年上だった所為かクラスの雰囲気に馴染むのに時間がかかり、不安の募ることも度々、でも、あどけなく青春真っ只中のクラスメートには圧倒され、自分もこの同じ土俵の中の隅でもいい、頑張るしかないと思って過ごした四年間、でも悲しいことに勤務の調整がつかず、卒業式には出席することが出来ませんでした。あの日卒業式を終えたクラスの方が、勤務場所まで届けてくれた卒業証書を手にした時、あの土俵の中で仲間に引きづられながら、無事卒業出来たのだと思うと感激もひとしおで、届けてくれた方を玄関まで見送り、雪のまだ残った道を日差しを背にして帰った姿が今も忘れることが出来ないのです。クラスの皆さん有り難う。感謝しております。

## 私の東高夜間時代

**設楽 五兵衛**（昭和35年卒）

私の人生を振り返れば、４年間の東高夜間に通った４年間、その後の数年間は「青の時代」と云える。

それは、輝きの道を歩いていた中学生時代と全く異った思いからである。品行方正、温厚で静かな情熱家として中学生では生徒会長を務めた。農家の次男坊として、家業の労力として組み込まれる中で、「高校の学力」だけでも身につけたいとの思いで入学した夜間高校でした。

その考えが一転した・・・かっての同期生が東高昼間部入学して居った。期末テストか、その結果が玄関の所に掲示されているのを見ると、順位の高い所に名前が出ておった。これを見て自分の心の中では、自主性の無い甘い考えで生きて来たものが音を立てて崩れ、人生の入り口で取り返しのつかない誤った選択をしてしまった!!と強い悔悟と挫折の中で性格は暗く内向的で、無口な自分に変って行った。それは「青の時代」の始まりだった。

然し、高校生活でも一条の光明はあった・・・元来自分は歌が好きで、小学校から中学校には良く独唱をさせられていた。夜学にも「音楽部」があり、一年の時から入った。

三年生になって、昼間部の音楽担当教師が阿部昌司先生に替り、夜の音楽担当教師となった。その上、時々は音楽部に顔をみせてくれ、指導もしてくれる事となった。この事は、後々の自分の進路を大きく変える事となる。

三年生の時、当時音楽部長だった、中山良弘君が、弁舌たくみに、女性部員を多勢入部させた事で、これ迄と違う音楽部へと変化していく。阿部先生の薦めるままに、全日本全国合唱コンクールへ出場した。当時は、昼間部のみの大会と考えられてる中での前代未聞の参加であったが、部員皆が「手ごたえ」を感じていた。

四年になり、部員は一つの目的を持つ事で練習に励む様になった。練習は勿論放課後となる。消灯時間ギリ々までの練習が続く事で、女生徒の安全帰宅の為に必ず男子生徒が同伴で送る事にした。自分も三年生の女子部員を羽前千歳駅近くまで、自転車の荷台に乗せて帰った。部内では同じ目的を持つ事で「和」が生まれた。そして誰もが乏しい時間を都合し、休日には外にハイキングや、サイクリングに出掛け「和」を強くして行った。自分は練習のない日は、誰もいない講堂のピアノに向い、発声練習をした。何の専門的な知識もない中で手探りでのボイストレーニングであった。休日の夜は家の近くの田の畦道に出掛け、ありったけの声を鍛えた。その効果は確実に出て来た、出す事の出来なかった高い音が普通に出る!! 唯一、自信と育っていった。

そして、夜学生活最後となる四年生の時、再び「全日本合唱コンクール」参加、県大会で見事、県代表校の一ツに選ばれた。そして迎えた東北大会は福島市で皆、旅費や昼の勤務の都合を苦労しての遠征である。そして・・・まさか・・・の優秀校に選ばれた・・・一位や、二位ではないが、!! ハーモニーの良さ!! が好評の中で讃えられた。練習量、人数、何を取っても及ばない、並み居る昼間の高校をおいての名誉である。これは正に、中山君を中心に部員皆が心をひとつにした友情の和音、が審査員の心に届いたのだろう。

この事で、これ迄、自分の進路について深く考える事もなかった自分だが、深く先を見る様になった。「自分が、一番自分らしく生きる事」を模索した・・・結果「歌手への道」を選ぶ事にした。

阿部先生もこの話を聞いて、私の両親に音大への進学を勧めてくれた・・・しかし母は頑なに反対した。この事は10年程後に理由を知る事になる・・・それは母の離れた親族に佐藤千夜子と云う日本最初の流行歌手が居り、後年は零落し、そのみじめな姿を見知った事でした。

然し、卒業後、約二年間農業の手伝いをし、独学で音楽勉強、家出同様に都会へと出たのです。直前の晴れた日、一人蔵王山に登り、頂上の岩かげに決意文を埋め、歌手の道が開けない内は二度と帰郷するまい!! と誓ったのでした。

約８年後には銀座の銀巴里、日航ミュージックサロンで歌う事となり、間もなく、レコード歌手としてデビューする事となった。然し、歌手としての一つの頂きであるＮＨＫＴＶ出演すべく難関と云われる、オーデイションに挑戦した他の参加歌手は付人、プロダクション関係人を多勢従えての物々しさの中、目の前で、審査員長の藤山一郎さんの見守る中、一次・・・二次予選へ進み、結果発表は見事２番の成績での合格でした。以後二度、全国放送番組に出演する事が出来、二度とも故郷の「最上川船唄」を歌いました。遥か彼方に見えてあった一つの頂の上に立った事とここに来る迄、殆ど独学での毎日でしたから、歌手としての「お墨付き」を戴いた事で気持ちとしては一区切り出来た想いでしたから、その後、職業歌手としては退きました。

東高夜間の４年間の生活がなかったら、私の「青の時代」もなかったし、今日に至る自分も全く違う人生を送っておったと思う。職業歌手の道を退いて後も「歌」の道を一度も忘れた事はない。生活の中でできる限りのボイストレーニングは欠かした事がない。それ故、今でも誰（歌手）よりも、深い表現で歌える・・・と云う自負はある。

社会人として定年後、この地（山武市）に移り住んで13年目、地域の中では数々のボランティア活動をしております、そして何よりも自分自身が楽しく、生きがいを持ってやっています。人生とは？と聞かれたら、「最も自分らしい生き方をし、社会生活の中で自分を完成させる事」と応える。現に今が仕上げの時間に入っている。

## 山野を歩く

**鈴木 和彦**（昭和35年卒）

昭和31年入学当時町には、「赤く咲く花、青い花」島倉千代子のデビュー曲「この世の花」が流れていました。東高には２年程の在籍でしたが、一番の思い出は何といっても生物学の土井先生との出会いでしょう。土井先生とは、奥山寺へ２回、蔵王坊平と山野を歩きました。

去年写真の整理をしていたら、山寺駅前の赤い橋で写った一枚が出てきました。自分と三組の吉田君と高崎君の３人、北高校の生物班の美少女3人と共に写っていました。土井先生は宅を訪問した時は、150鉢もの山野草を見せてくれました。一鉢一鉢丁寧に説明してくれました。それ以来、山歩き、山野草に興味をもち、東高在学中蔵王山へ３回登りました。一度は蔵王山でこんな事がありました。熊野岳から刈田岳への登降中激しい雷雨に会い、雷鳴が足元で鳴ります。その度、地面に腹這いになります。同行の知人のピッケルが数メートルも飛ばされました。地面の雨水が、ガラス板のように、ビュ―と張り

ます。「イナズマ」がその上を走ります。凄く恐いものです。そんな過酷な環境の中でも「こまくさ」の花は凛々と咲いているのを見て凄く感動したのを今でもはっきりと覚えております。山形東校の「校章」です。

社会に出てからも増々山野歩きが好きになりました。美しい景色､名も知らない可愛いい草花、珍しい動物とも出合います。山寺では､「ヤマネ」と合いました。今では見る事ができません。

2,000メートル級の山にも登りました。尾瀬の燧ケ岳2,263メートル、栗駒岳1,628メートルにも登りました。77才の今も年二、三回は山野を歩きます。春には山菜、秋には木の実、キノコを取りながら、冬は「カンジキ」を履いて雪の中を歩きます。澄きった空気、心が洗われる思いです。何時の間にか、山野を歩く事が自分にとって生涯の趣味になっていました。

寮生活での笑える話を一ツ書きます。寮に入る前は暫く、職場に住込で働いていました。下校後も毎日11時頃まで夜業です。風呂敷に包んだ教科書はそのままです。復習も予習もした事はありません。こんな事が、寮に入る切っ掛けになりました。寮生は全員で20余名、一室４名、自分と３組のＡ氏、上級生２人の４人でした。

朝６時起床、７時より朝食、後、各自仕事に出かけます。昼は､自腹で食べ､夕食は５時から、そして授業へ、９時、10時頃になると腹が泣きます。寮の食事は、うどん丼に麦めし七分目程、おかずは同じ丼に雑っ煮の一品、おかずと汁の兼用です。何時も空腹でした。下校後原則外出禁止、門限10時、10円、20円と出し合って舎監に気ずかれないように窓から脱出し、３ヶ十円の小ばん焼を買って食べたものです。安くて量があり腹の足しには小ばん焼きが何よりでした。今のあじまんの元祖です。その味格別なり。

思い出はまだ沢山あります。沢山の思い出を作って下った、先生、同級生の皆さん、そして山形東高校に感謝致します。有りがとうございました。

残念ながら、３年より新庄北高へ転校しました。近くのスーパーで、年に一、二度あじまんを買って食べる事があります。なつかしい味です。

甘い物・・・糖尿病に気を付けましょう。

# 人生は一夜の夢のごとし

**田中 信一**（昭和35年卒）

時間のたつのは本当に速いものです。私は中国から昭和28年（1953）に帰国してから64年、昭和35年（1960）高校を卒業してから57年、昭和42年（1967）大学の教員となり、平成20年（2008）３月まで41年在職し、退職してもう９年になります。この間多くの人々から叱咤激励、協力、援助などを得て、今日まできたことを感謝しております。

平成28年11月、山形の「みごと会」（昭和35年山形東高校夜間部卒業者の会）中山良弘さんから「東京支部のほうで文集を作るそうだが、あなたが古希に書いた文章がとても印象的だったので載せてみてはどうか？」とのことでした。同年12月にも電話をくれ、平成29年には年詞と称して電話で直接また「原稿を少し長くてもいいから寄稿してくれないか？」と三度頼まれて、ようやく書き始めた次第です。

私は昭和14年（1939）３月満州の生まれで、下には弟もいました。昭和20年（1945）に小学校に入りましたが、まもなく父は現地召集されシベリアに連れていかれ、母と弟の三人で留守を守っていましたが、８月には終戦になりました。まもなく私ども住んでいた所は共産軍と国民軍の対峙するところとなり、いそいで荷物や食料をサイロにいれて、上の方に砂や土をかけて近くの村に避難しました。途中で荷物を見に行ったら、家ごと焼けてしまっていました。

そこで、県庁所在地の日本人が集まって帰国を待っている所に行きましたが、そこでは生活に困るので、母は中国人の洗濯をし、私たち兄妹は飴やタバコを中国の兵隊さんやレストランに行って売りました。

そこには、日本に帰れる日が近いことを知らせて来ましたが、母は発疹チフスにかかり、他界しました。兄弟だけになり今後どうしたらよいか、と周りの人が心配し、相談している処に、たまたま来ていた医者の志賀さんが、「私に任せなさい」と言われて兄弟はその人に伴われて私が生まれた地に来ました。

ところが、私は心労も重なったせいか高熱をだし、数ヶ月も重病にかかり、家計も大変苦しくなったので、弟の方を中国人にトウモロコシ１斗で交換する事になりました。私をも病気が治ったら中国人の処に預けることになっていました。私の病気も漸くして治り、志賀さんと一諸に暮らす事になり、また中国の学校へも通わせてくれました。

昭和28年（1953）日本に帰れることになり、弟もたまたま同じ学校にいましたので、日本に帰るかどうかを尋ねましたが、答えは「せっかく大きくなるまで育ててくれた中国人に申し訳ない、もう少しここにいてみる」との事だったので、私たちだけ志賀さんに連れられて帰って来ました。

舞鶴に到着すると、皆は口々に祖国の美しさを讃えていました。私は志賀さんに連れられて新潟の長岡に着きましたが、そこは奥さんの実家で、奥さんはハルビンから子供３人連れて先に帰って来ていました。そこは人数が多すぎて困っていましたので、新潟新聞に私のことを投稿しましたらそれを見た同じ開拓団に居りました駒形さんの奥さんが「田中さんの子供ではないか？」と思い、私に会いにきてくれました。そこで田中の子であることを確認し、私の父に連絡をしてくれました。

父は昭和23年（1948）にシベリアから帰って来ていました。駒形さんとは手紙のやりとりをしていたようです。父は長岡まで来て私を迎えにきてくれ、父に連れられて山形に帰ってきました。志賀さんは長年育ててやったのに、父について行ったことを大変嘆いたそうですが、私としては人数が多くいるので大変だと思い、やはり父の元で暮らすのが良いのではないか、と思ったのです。

山形に着いてみると、そこは伯父の家で、父は結婚していました。私は赤の国から来た人だ、という事で、警察にも何度か付けられました。私は当時14歳でしたが、日本語はほとんど分かりませんでしたので、昭和28年８月、父に連れられて市の教育委員会に行き委員長に、中学１年に編入させて欲しいとお願いすると、「中学３年生の歳であるからその学年ではどうか」と言われました。そうすると半年で卒業してしまいます。それでは日本語がほとんど学習できないので、どうか１年に編入させて欲しい旨を申し上げ、どうにか１年に編入することが出来ました。

学校に行くとみんなが親切にしてくれ、日本語が分からないので、同じ敷地内に住んでいた同級生の鈴木てい子さんが小学校「国語」のテキストを持ってきてくれ、先生やクラスメイトが放課後替わりがわり私に教えてくれました。家に帰ってから私は当時有った「中学時代」の中にある漢字で仮名の振ってある文字を拾い出して勉強しました。更に父は中国語が分かるので、数学などは中国語の訳して父に見せてからやるという日々が続きました。

中学を卒業する年に、当時山形東高校夜間部の主事をしておられた大築享先生が、私の父と山中時代の同級生だったので、家にわざわざ来て頂き、私に東高夜間部に入るよう勧めてくれました。その頃、私はまだ受験とはどんなものか理解していませんでしたし、受験勉強もしていませんでした。ともあれ、勧められたままに受験をしてみることにしましたが、まぐれにも合格して皆さんと一緒に勉強する事になりました。父は義母と蔵王開拓にいたために、私は出来たばかりの奨学寮に入る事になり、また寮の仕事を手伝う事になりました。その当時舎監をしておられたのは伊藤辰雄先生で、ご家族と一緒でしたが、大変可愛がって頂き本当に有り難う御座いました。

仕事というのは、校舎の裏にある畑に野菜を作り、それを奨学寮に供給することでした。その当時、桜井優一君のお父さんが学校に勤めておられ、その手伝いみたいな事をしていたのですが、今考えると、かえって邪魔をしていたのではないかと思っています。この他に私に与えられた仕事は、昼間・夜間部の生徒諸君が排便した糞尿を昼間に肥溜めまで担いで成熟させてから畑に播くことでした。糞尿を昼間担ぐので、生徒諸君からは、その匂いが「臭い！臭い！」と言われ、また寮にかえっても当然ながら匂いが衣服や体に染みついているので寮友からも敬遠されました。そのため、昼間の授業が終わってから作業するように言われたこともありました。しかし全校生の糞尿を私一人で処理するのは大変でした。そのうち、私を雇っていても採算が取れない事もあって、私はその仕事を辞め

る事になりました。その後は主として牛乳配達で生計をたてましたが、時には、水田に水をやるポンプ小屋の見張りとして泊まり込んだりもしました。ともあれ、お陰様で高校はどうにか卒業する事が出来ました。高校在学中大築享先生、伊藤辰雄先生やご家族の皆さん、結城（遠藤）徳蔵先生、堤睦水先生、小林秀男先生、太田光之助先生、大沼一夫先生、大場弘之先生、斉藤吉雄先生、佐藤勇蔵先生、佐藤 勲先生らのご指導、励まし、ご慈愛と学友諸君の援助、協力により今日まで頑張って来ることができました。

卒業する時には、太田光之助先生が私の就職のため上京し、江東区にある古屋乳業に来て頂きました。そして、上京して牛乳配達をしながら短期大学に入り、短大卒業後、夜に授業がありましたので大学３年に編入しました。大学を卒業した後、やはりほとんどの授業が夜にあったので大学院に入り、修士課程終えてから、昭和42年（1967）大学の教員となり、平成20年（2008）に退職しました。これまでやってこられたのはみなさんのお陰だと感謝しております。本当に有難う御座いました。

## 「懐古・辛さ・悩み・苦しみ・夢」

**月井 濵明**（昭和35年卒）

昭和31年山形市立第二中学校を卒業、同年４月山形東高等学校夜間部に入学した。夜間部入学の理由は、父親が若くして病死しており、母親の内職で極貧の生活から昼間の高校を選択できず、日中働きながら夜間学ぶという勤労学徒の夜間高校を選択したのであった。牛乳配達のアルバイトを1年やり、その後家庭の事情で高校近くの納豆製造所に住み込みで働くようになり、そこから夜間高校に通った。納豆屋なので朝のウエートを占め、４～５時起き製造までの事前作業にはじまり配達・製品製造・保存保管・温度管理という段取りであった。仕事はとても辛く苦しいものであった。その中で冬場には牛乳配達や納豆配達のとき、雪道で後方から来た自動車に運搬自転車が接触されて商品諸共に道路に転倒し、牛乳や納豆を全部壊して商品をダメにしてしまった事が数回あって雇い主や親方から酷く叱られたり罵られたりした。また集金袋を自転車に掛けていたものが、商店に一寸の間、商品卸で離れている瞬間に盗まれてしまうこともあった。早朝時寝過ごしてしまうと親方から部屋に入ってこられて部屋で枕を並べて寝ている丁稚の小生等４人の鼻を一人ずつ撮まれて起こされること度々、毎日学校の授業やクラブ活動、剣道の稽古で深夜までかかり、疲れが溜まっていたのであろう。さらに、寝ている部屋も長屋の十畳一間で出入り口の廊下には、雨戸はあるものの朝仕事の、うるかしている大豆が入っている大きな桶が幾つも置かれてあり、それが邪魔になって雨戸が閉められず、吹雪の時など大きく破れている障子の隙間から遠慮なく雪が入ってきて寝ている皆の顔に降りかかる哀れなこともあった。こんな生活が４年間続いた。辛くて仕事や学校をやめようと悩んだこと数知れず、その都度、母親や先生と学友から慰めや激励されて思いとどまって辛抱した。子供の時から好きであったチャンバラや西部劇ごっこの影響とターザンとも近所の人々に言わしめたガキの小生は夜間高校に入って剣道部に入部し４年間続けた。唯一の生き甲斐となり、稽古をサボルこともほとんど無く励んだ。その反面、学問は子供の時から大嫌いで、頭は悪かった。しかし、夢は持っていた。それは、仕事の配達が朝だったため、通行している人や車は全くなかったことを幸いに、当時流行っていたフランク永井の有楽町で逢いましょうの歌謡曲にとりつかれて、なかなか出ない低音を無理して大きく出して歌いながら大きな運搬車を乗り回していたが、この時は一日の中で最も楽しいひと時であり、東京オリンピックも近々あり、将来は花の都東京へ出て下手な歌手にでもなかろうかとの夢を考えたこともあった。しかしながら、運命とは神の悪戯であるとも言われているが、正にその通りになってしまった。学校卒業後の就職で、既に内定通知をうけていた東京メトロ会社を辞めて、剣道部の先生から剣道が好きで続けたいのなら警察官になれとの一言で、悩んだが直ぐ決意して厳しい警察界を選択したのです。

## 寮生活の思い出

**長岡 正昭**（昭和35年卒）

私が奨学寮で生活を始めたのは二年生からだった。住込み通学をしている事もあって、二十四時間拘束されて自由時間が持てなかった。ヤクルト配達の仕事が午前十時ころに終わると、寝不足を解消するため仮眠を取った。その後、自分を取り戻して学習や読書の時間に使えるようになった。

二段ベッドが並んでいる四人部屋での生活だった。明るい環境の中での暮らしは快適そのものだった。その頃は食べ盛りで夜十時頃になると腹の虫が鳴き出して来る。急いで近くのパン屋に走る。また、夜遅く帰って来ると夕食がなくなっていた事があった。食べる人がいないと思って、誰かが失敬したのかもしれなかった。パン屋も閉まっている、夕食にあり付けなくて眠れぬ夜を過ごした事もあった。また、泥棒が侵入したこともあった。何しろ貧乏学生が居住している寮に目ぼしいものはある筈もなく、泥棒は何も取らずに、舌打ちをして逃げて行ったようである。

ある日の夕食後だった。下っ腹が締め付けられるような痛みに襲われた。身体を折り曲げて耐えている内に、近くにある開業医が来てくれて事なきを得た。死ぬのでないかと朦朧としていく意識の中で考えていた。

そんな寮生活の中で私は心を奪われた人が二人いた。その一人は一つ先輩のＮさんである。日本や海外の著名な作家の文庫本が彼の部屋のベッドや机に所狭しに並んでいた。招かれていくと、百冊余りある文庫本を取り出して解説してくれた。島崎藤村の「破戒」、夏目漱石の「三四郎」、太宰 治の「人間失格」など、その肝心な部分を解説してくれる。分かり易く、しかも平易な言葉が心に染み込んでいった。また、クラシック音楽にも精通していた。ＦＭ放送に聞き入っているようだった。

私は暇を見つけて、彼が解説してくれた文豪の小説を読み耽るようになった。小説の世界にどっぷり浸かって、時間を忘れている事が屡々だった。与えられた人生は一度限りだが、小説を読む事によっていろんな人生を経験できる、その不思議な力に魅せられた。就職してからも小説を読む事を忘れなかった。クラシック音楽に夢中になった時期もあった。

定年後に川柳を始めたのも文学的知識を植えつけてくれた彼の影響だと思っている。念願だった句集も自費出版を果たした。

もう一人はカメラ好きのＳ君だった。彼は同室で、昼間部の生徒で他県出身だった。小型の写真機二台持っていた記憶がある。私は写真機を見る機会がなかった。物珍しそうに眺めていたらその構造を説明して手に触れさせてくれた。説明を聞いても、その奇妙な物体から写真が何故出来るのか理解できずにいた。彼は実際に、同部屋の皆を撮ってくれた。露出と集点を合わせて、ファインダーを覗いてから「撮りますよ。笑って」と声を掛けてシャッターを切った。翌日、校内の暗室で現像したのだろう、出来上がった写真を見せてくれた。こんなに鮮明に写るのか、と写真の世界に引き込まれていった。私は親戚連中驚かしてやろうと、彼から写真機を借りて撮ってやって得意になった。みんな嬉しそうにポーズをとって応じてくれた。

結婚してから子供をモデルにして撮り始めた。職場の花見や忘年会、旅行などで集合写真を撮ってやった。市民展や県写真展、各種撮影会でいろんな賞も貰った。今も写真撮影は定年後の趣味になっている。

### 『人生は出会い織りなす万華鏡』

ＮさんとＳ君と出会った事によって、川柳や写真撮影が趣味となった。いわば、私の人生に万華鏡のような豊かな彩を添えてくれた。

### 『辛くても布団かぶれば明日が来る』

働きながら勉強する事は疲れと眠気との闘いだった。でも、どんなに辛くとも布団をかぶって眠りにつけば明日の人生がやって来る。その繰り返しが今の私を創ってくれた。苦労に負けずに踏ん張った賜物だと思っている。

### 『あの時の苦労がくれた今の幸』

日中は仕事に没頭し、疲れた身体に鞭打って夜間部で勉強した四年間は何物にも代えがたい

私の人生の宝物だった。仲間に支えられながら苦学したからこそ、今の幸せがあると言い聞かせている。

### 『人生の仕上げに通る老いの道』

私は喜寿を迎えて、人生の仕上げの道を歩んでいる。後期高齢者として楽しみながら精一杯生きれば美しい花で最期を飾る事が出来ると信じている。

## 私の高校時代

**中山 良弘**（昭和35年卒）

### 山形東高夜間部へ進学する前

昭和28年の春、旧七軒村を出て山形市の老舗「ひいらぎ屋」と云う諸官庁御用達の荒物、雑貨店に住み込みでお世話になりました。取引先が県庁、市役所、県立病院、山形大学、小・中・高校等々・・・・・主な仕事は自転車とリヤカーで配達と御用伺いで大変忙しいがいろんな人との出会いから学ぶことが沢山あり、充実した毎日であった。

勤務条件は朝６時～夜９時迄、月一日の休みであったが辛いとか苦しいとかの思いは全然なかった。社長と奥様はじめやさしく家族の一員として接してくれたから。

勤めて２年目からは配達も自転車から若者の憧れのホンダのドリーム号、リヤカーからマツダの三輪車となり行動範囲も広くなり商売のおもしろさも少しづつわかってきた。

そんな時、社長から３年間よく頑張ってくれた、ありがとう。仕事も慣れてきたことだし将来の為に東高夜間部へ進学するようにすすめてくれた。「その時、その場に、新たな気持ちで」両立出来るよう協力するからしっかり頑張りなさいと励ましてくれた。

### 高校生活至福の４年

「もはや戦後ではない」昭和31年４月入学志願者 193名 合格者 161名 男子 132名 女子29名

その時のスタッフ

| | | |
|---|---|---|
| 校長 | 木村芳三郎 | |
| 主事 | 大築亨 | 保・体 |
| 教諭 | 井上幸之助 | 社 |
| 同 | 佐藤勇蔵 | 保・体 |
| 同 | 片桐重勝 | 国 |
| 同 | 佐藤勲 | 理 |
| 同 | 大沼一夫 | 国 |
| 同 | 大川広海 | 社 |
| 同 | 結城徳誠 | 社 |
| 同 | 太田光之助 | 社 |
| 同 | 伊藤辰雄 | 数 |
| 同 | 柏倉学 | 数 |
| 同 | 金子淳子 | 英 |
| 同 | 板垣幸夫 | 数 |
| 同 | 大場弘之 | 保・体 |
| 同 | 斎藤吉雄 | 理 |
| 同 | 小林秀男 | 英 |
| 同 | 鈴木昌三 | 国 |
| 同 | 斎藤和雄 | 英 |
| 講師 | 加賀谷芳雄 | 国 |
| 同 | 土井敬正 | 理 |
| 同 | 飛塚安吉 | 図 |
| 事務 | 守谷武兵 | |
| 同 | 桑原敬二 | |

### ・一年三組 担任 小林秀男先生（本校25年卒東北大学出身）

私達のクラスは55名 うち年上の人が12名 一番上が６才、同級生といっても中には弟か妹みたいなあどけない人、立派な社会人。職場の都合で遅刻したり、欠席する人、くたびれて眠っている人、寸暇をおしみ勉強している人、明るく楽しいクラスだった。

４月の中頃、小林先生から中山君このクラスは年上の人が多いのでクラス運営に協力してくれとのこと、夜間部でなければ体験できないことであった。

10月７日、全校芋煮会（唐松観音付近）憧れの先輩からラブレター？恋のはじまり。

### ・２年３組 担任 小林先生



９月12日、山形東高等学校夜間部生徒自治会の名称から自治が削除され「生徒会」と呼ぶようになり、生徒会会員の総選挙により私が初代会長に選ばれた。

### ・３年１組 担任 小林先生

新学期早々生徒会主催で運動部と文化部の部長が壇上より全校生に対し、部の紹介と勧誘を行うことにした。音楽部の部長が欠席のため生徒会長の私が代わって紹介した。あの時どんな事を言ったのかは思い出せないが、かなり調子の良い事を言ったのだろう・・・・結果は文化部の中で最大の部員を獲得することが出来た。

期待して入部した部員ひとりひとりが心から楽しめる音楽部にするに色々構想を練ってみたが音楽室にはピアノと譜面台だけ、早速阿部昌司先生、山形東高・山形西高で「ＮＨＫ全国高等学校コンクール」・「全日本合唱コンクール」18回日本一に、ご指導をお願いするため薬師公園前のご自宅にお伺いして、阿部先生、私は東高夜間部の生徒会長と音楽部部長をしています。中山と申します。今日はとんでもないご無理なお願いでまいりました。先生は全日制の授業と放課後は音楽部の指導で大変なのに申し訳ありませんが、夜間部の生徒にも本当の合唱の素晴らしさを体験させて下さい。夜間の生徒は、昼は働き夜は勉学で少々疲れているけれどやる気は充分あります。歌うことの好きな生徒たちです。夜間部は女性が多いので混声合唱は全日制よりバランスが良いと思いますと必至にお願いをした。すると先生はわかりました、共にやりましょうとうれしい返事であった。夜９:20に迎えにまいります。宜しくお願いします。６月の中頃、阿部先生が第10回合唱コンクール山形大会の参加を親切にすすめてくれた。「夜間部としては初出場であり一歩前進することである」の言葉がなんともいえぬ魅力であって前途の苦労など考えなかった。夏休み中にも毎日のように10名前後でコンクールの課題曲の練習。この頃になって部員も30名位に減少してしまった。９月に入ってから毎晩10時の消灯まで阿部先生と荒井昭男（本校音楽部31年卒）先輩には心より感謝します。

初の合唱コンクール出場前、度胸試しに講堂で全校生に聴いてもらいたいのでなんとか明日の職員会議で行事予定入れて下さいと佐藤勇蔵先生にお願いし、翌日夕方、結果どうなりました？返事はウッカリ忘れた申し訳ない。校長先生が官舎に着いた頃だから直接お願いしてみたらと云われ、早速渡里校長先生に緊張しながらお願いした。あの優しい顔でジーット聴いてくださって、その場ですぐ職員室に電話してなんとか音楽部の希望を叶えてやるようにと指示してくれた。いろいろあったけど全日本合唱連盟主催の合唱コンクール大会会場は新庄南高校の体育館プログラムを見ると僕達は高校の部で最後であった。

「一番うまいから最後に出演なんだろう」なんて冗談も言えるほど案外みんな落ち着いておった。やがて期待と注視の中に観衆を目の前にしたとき興奮感激、部員一致協力で課題曲も髄意曲も練習以上のできであった。審査発表があり、委員長より夜間部の出場は東北いや全国でもおそらくないでしょうと褒めていただいた。夜間生として初出場できたことがすばらしかったが、合唱そのものはまだまだ。来年のコンクールは山形会場なので、今よりは一層練習し入賞しようと誓い合った。

### ・４年１組 担任 小林先生

阿部先生との出合いで全日本合唱コンクールに参加させていただき部員も増え、今年こそ県大会でどうしても入賞したいので早速、部長の渡辺英正君と阿部先生宅にお伺いし、新メンバー表を示しながら、部員一同の感謝と今年の熱い想いを伝え夜間部の練習時間が昼の４分の１位なので、これからの練習のあり方の相談をした。先生から次のことを全員に徹底すること。①歌詞の内容を良く理解すること。②練習の時の注意されたこと確実にメモをとること。③１番大切なのは練習を休まないこと。これを守って欲しい。夜間の生徒は素直でやる気が伝わってくる。一諸に頑張ろうと励まされ、今年は山東高・山西高で合同のコンサートを計画している。それに夜間からも男声数人をお願いしたいと、夢のような話であった。

ここまで夜間生のことを考えて下さっているのに感激したことを今でも忘れることはない。合同のコンサートで一番感動したのは混声合唱の「流浪の民」でテナーソロの部分を夜間部の設楽五兵衛君が素晴らしい歌声で堂々と歌い上げた時だった。

### ・県大会と東北大会について

10月９日県大会を前にして校内発表をし、その後山形大学の建部有典先生のご指導で山東昼と合同練習を行った。指導者によっていつもより声量が出たような気がした。終了後両先生の講評はどっちが上手かわからないとのことだった。

県大会は１位山東、２位新庄北、３位東夜間部。東北大会は福島へ前泊をしなければならないので、２つ問題、①職場を休めない、②旅費のこと。後輩の職場にお伺いしお願いしたり、旅費のため休日にアルバイトで資金稼ぎなんかもした。男性はお寺の講堂、女性は福島大学の女子寮。夜間生にみあった格安で。二度と体験出来ない思い出となった。これも顧問の金子淳子先生のやさしい気配りであったのだろうと思いながらお寺の仏像をながめ問いかけてみた。課題曲「ひぐらしの歌」自由曲「狩人ションピール」２曲で６分位のためにこんなに一生懸命になれるのだろうか、真剣に取り組む仲間のためか？やる気を引き出してくれた阿部先生のために明日は最高のステージにしてくださいと、仏像にお願いした。

東北大会は福島公会堂（客席３千位？）大ホール。パンフレットを見てビックリ混声の部は各県３校計18校、私達がトリを取ることであった。注目されるだろうなあと想いながら・・・素晴らしい他高校の演奏がつづきいよいよ最後のステージへ。指揮台の阿部先生と向かい合ったらトタンに今迄の緊張がとれた。歌い出すとき指先に全神経が集中するのだが私達は先生の目、口もとの表情１つ見逃さないように心がけていた。歌い終わった時、会場内はこの日最高の熱烈な拍手であった。

結果は１位～３位の他に優秀校２校の内の１校に夜間部がえらばれた。この後も後輩部員の献身的な頑張りで35年、36年にも県代表として東北大会に連続出場したほか38年にはNHK全国学校コンクール県大会で優秀校に選ばれた。

## みごと会について
## 昭和35年第10回卒業+校友5名

みごと会会長 **中山 良弘**

昭和57年母校が改築される事になりあの懐かしい姿が取り壊される前に相集い母校の姿を懐かしみ、記念写真を‥‥ こんな想いから初の３クラス合同で同窓会を開催した

50名の参加で盛大であったが20通位住所が変わって返送されてきたので、トコトン手をすくし今では5名となりました。(migotokai)

### みごと会足跡の一部

第１回　1982．1．2
　　馬見ヶ崎 50名
第３回　1990．8．15～16
　　鬼怒川温泉 グリーンパレス 35名
第４回　1993．7．3～4
　　富士五湖 湖南荘 35名
第５回　1997．9．13～14
　　唐松観音芋煮会とホテル王将 49名
第７回　2000．4．7～9
　　伊勢参拝と古都奈良の旅 31名
第８回　2001．9．2～4
　　越中おはら風の盆と黒部峡谷の旅 31名
第10回　2002．6．8～9
　　みごと会20周年記念小湊ニュー小湊ホテル吉夢 46名+3
第11回　2003．6．1～2
　　鎌倉見学と隅田川 横浜ホテルニューグランド
第13回　2005．9．11～12
　　石和温泉と昇仙峡 石和温泉 ホテル石風
第15回　2007．9．9～10
　　伊豆温泉と伊東温泉 ホテル聚楽
第20回　2013．9．8～9
　　白神山地と不老不死温泉 不老不死温泉 24名+10
第22回　2016．6．19～20
　　喜寿の祝い 天童温泉 天童ホテル

以上のような35年間で20数回の観光旅行、忘年会、時には奥様同伴等何時何時も楽しいみごと会であった。

１組　仁藤　与四弘君
　　企画から観光バス、ホテル完璧な手配、添乗員としてタダにしたり
２組　遠藤　　誠　君
　　みごと会の案内、資料管理等裏方をやってくれた。
３組　石山　紀雄　君
　　古希の祝い、喜寿の祝いの実行委員長として記念誌を作成
　　古希、喜寿の祝いに48名の参加

会員の積極的な協力により継続できたことに心より感謝申し上げます

## 東高夜間部を卒業して五十七年

**森谷 秀幸**（昭和35年卒）

昭和35年（1960）三月に山形県立東高等学校定時制課程を卒業した。五七年の星霜がよみがえってくる。卒業時十八歳の紅顔は、世の変転と生活との戦いや苦渋の人生を重ねながら、七五歳の白髪顔になり、まだ馬齢を重ねている。そんな年月の年輪の一部でも書けたらと思い筆をとった。

### ■ 夜学通学の背景

終戦から十四年、食糧難の時代。肺結核で兄と姉の入院、死亡と我が家も戦後の混乱が尾を引いていた。父の長期入院と離婚というアクシデントもあり、鈴木姓から森谷姓に変わり、父の親戚の庇護を離れて、山形市が準備した霞城内にあった、旧連隊兵舎を改造した引揚者寮に下条の藁葺の家から移転した。

私の住居七寮も、連隊の馬小屋を改造したもので、南と北に八畳一間と、個室が北側に十二室、南側に十二室が連なっており、二十四世帯が居住していた。炊事は別に炊事棟があり、窯が二四個連なっていて朝に夕に、この棟で薪での煮炊きが行われていた。

私の居室は陽のあたらない北側で窓を開ければ霞城の土塁が目の前に迫り、大きな北門がすぐ近くにあった。

その後二中は西門を抜けた城西町に新築移転され二年間をそこで過ごした。家計を助けるため、朝は五時起床し、牛乳配達のアルバイトに精を出した。

三年生になり、進学の時期になっても私一人だけが就職か、進学かが決まらなかった。最終的に日本育英会の奨学金を受ける事が出来るようになり、昼働き夜学への道が拓けた。

### ■夜学通学

二中を卒業すると、五日町の雑穀問屋鈴木商店に月給四千円で入社した。仕事は、ラーメンに入れるメンマや小豆、大豆、麩や長麩などを扱い市内の商店に自転車で配達するのが仕事だった。日中は勉強する時間などまったくなく、この商店は数か月で退社し、中学時にお世話になった城西牛乳の鈴木惣助さんにお世話になった。

鈴木惣助さんは、母方の遠い親戚で、城西で乳牛、五、六頭を飼育のかたわら、城西牛乳協同組合に納乳した。城西牛乳協同組合は職員十人と小規模企業で、配達には、酪農家はもちろん近在からの寮住まいの配達専従の若者のほか、東高夜間部の同期生、田中さんや故月井さんなどが働いていた。

仕事内容は山形市内の家庭や職場を巡回しながら配達してまわった。配達は自転車が提供され前の二つの袋に各三十本、合計六十本。朝五時起きして配達してまわった。

昼は十時頃から準備し、前に六十本、後ろの荷台に箱入り五十本の牛乳を一中や貯金局、ＮＨＫなどの小白川方面の坂の多い旧道を息を弾ませながら二時頃までに配達してまわった。他に月に数回、家庭をまわり集金業務に従事したが、空いた時間は自由だったので予習、復習に励めた。夕方になると、詰襟の制服、学帽に下駄ばきで自転車通学だった。夕食は帰って家族

が準備したものをとった。

クラスには多士済々の若人がおり、看護師見習い、ラーメン店員、農業、新聞社社員、雑貨店社員などと数えればきりがない。みんな時間に追われる学生達だったが、コーラスや運動部に所属して深夜までクラブ活動に熱中した。私は時間に追われ、あまり思い出がないのだが、弁論部に所属し、上京し熱弁を振った思い出が頭の隅に残っている。

## ■ 卒業半年前に音を失う

牛乳配達の仕事は冬場は厳しかった。あの年も雪が多く朝から降ったり止んだりしていた。自転車の前後に八〇本の牛乳を積んで小白川の坂道は登れないため、歩いて自転車を引いてまわった。配り終わった時は汗びっしょりになり、疲れも重なりダウンした。三年次最後の一月下旬のことだった。熱が四〇度以上超え、緊急入院となった。病名はリュウマチ熱。抗生剤の点滴で病状は回復し、退院となった。その後牛乳配達は退職したが八月になって、耳から音がおかしくなった。ラジオから流れていた春日八郎の「別れの一本杉」の・・・泣けた泣けた思い出しても遠い空・・・がかすかに聞こえる程度から日に日に音が遠ざかっていった。抗生剤の副作用による失聴だった。私の失聴は家族にも大きな打撃だった。最初は、医者めぐりをしたが、少し落ち着くと両耳失聴し、果たして生きていけるのだろうかと悩む日々を過ごした。

## ■失聴五七年を生きて

昭和三五年（1991）、四年次も終わり卒業を迎え、「山形県高等学校定通教育振興会賞」を、伊藤先生の筆談での「重いから気を付けてね」とのメモ書きで副賞に大理石の置時計をいただき東高の門を出た日が鮮やかに蘇ってくる。

それぞれの進路は同じ牛乳配達で卒業に漕ぎ着けた月井君は、県の警察官に採用された。田中さんは紆余曲折があったものの大学教官になった。多くの学友は、自営業や大学進学のほか、銀行員、東京都の職員、地下鉄営団の職員など多岐にわたった。それに引き換え、私は両耳失聴という結果終わったことに、言いようのない挫折感に襲われ、貧困を憎んだ。

見かねた山形市の社会福祉士渡邉嘉兵衛さんの紹介で、四月に新宿区戸山町に設立して三年目の国立聴力言語障害センターの三期生として入所した。修業年限は一年で、八〇数名の入所生がおり、手話のできる聾学校出、手話のできない難聴者や中途失聴者が半々であった。私は唇を見ての読話もわからず、ほとんどが筆談だった職業訓練と心の立て直しの一年の教育をうけ、翌春に都内のタイプ印刷会社に就職した。下宿は早稲田の学生相手の下宿屋で階段下の二畳半での、ただ起きて寝るだけの生活だった。

翌年春に港区三光町の中堅の活版・オフセット印刷所の文選工に転じ、会社寮に入所できたことで多少の余裕ができた。そんなかたわら、四葉のクローバを旗印とする聴力障害者の親睦団体「みみより会」を知ったことが一つの転機になった。この会は隔月刊でみみより誌を発行しており、老若男女の心の灯だった。

私もその一員になり投稿、山歩き、スキー等と少しづつ穏やかな日が私にも差してきた。指文字や手話も少しづつ会得し、手話での会話も成り立つようになった。いつしかこの会のリーダーに推され、福祉運動にものめり込んでいった。

昭和四一年（1966）十一月三日二五歳で結婚。結婚などまだまだと思っていた。伴侶もまた、ストマイ副作用の両耳失聴者だった。

数年たった頃、仕事や福祉運動などで無理がたたったのか疲れがめだつようになり、会社の定期診断で肺結核と診断され、清瀬にある国立東京病院清瀬療養所に隔離入院となり一年半の長期療養を余儀なくされた。

昭和四六年（1971）八月、十余年慣れ親しんだ東京を離れた。三〇歳の夏のことだった。裏磐梯で義父の経営する旅館を手伝いながら、身体の回復に努めた。仕事は下働きで会話がなりたたないため、もっぱら炊事場や、布団敷、領収証書きなどが主な仕事だった。

春になり体も復調し、このまま旅館の手伝い仕事を継続する自信もなく、一年後の四月に当地を離れて郡山市の県営住宅の四軒長屋に引っ越した。

山形や東京に帰る手もあったが、聴覚障害の友人達が当地の空き住宅や仕事等情報を耳に入れ、助けてくれたことも郡山に留まる一因となった。

地方の印刷会社も活版からオフセット印刷への移行期で東京で培った写植オペレーターの技術が役にたった。印刷版下を作る写植の技術は聴力障害をカバーしてくれ、すんなり印刷会社への入社が決った。

東京を離れる時に身籠った長女は猪苗代の川桁の小さな産院で出産した。郡山に移転してから次女、三女をもうけた。

子育ては家内も両耳失聴者なので、育児にはいくつかの問題があった。聴覚障害者の家庭では、玄関のベルを押すと呼び灯が点灯し、来客を知らせる。又、育児には、幼児が泣くと泣き灯で知らせてくれる。ただ、疲れ切って泣き出して泣き灯に気づかず、熱い電球が幼児の足元に接着し、長女はやけどを負い、今もその跡はわずかに残っている。

また、両親が聞こえないと、子供の言葉の習得をどのようにするかと悩み、三人を保育園に入れたが、一家での入園は二人までといった規定があったためお願いし、支所長の判断で入所できたこともあった。長じて家内は授業参観に手話通訳を帯同したので、いじめにもあい、帯同をいやがるようになった。

子供達は、幼少の頃から電話の受け応えなど、聞こえない親の耳代わりになり、聞こえない親を持った理不尽さ、悔しさ、恥ずかしさなどを感じ、時には抵抗し、反発しながら成長していった。

聴力障害での生活への影響は、法律的なものから、世相に左右されるものまで多岐にわたるが、運転免許証取得は困難を極めた。「耳の聞こえない者、目の見えない者には運転免許を与えない」との条文があり、この改正にも動いた。山形県選出の故前衆議院議員加藤紘一氏の働きもあった。

また、家を作るために地元の銀行に融資を依頼した時は、家内も聞こえないということで融資を断られ、勤務先の社長を保証人に立てて他行にお百度参りし、やっと融資がおりたということもあった。家屋が出来上がった後も聞こえないことでの大工さんとの折衝のまずさから、メガネ石の型枠が規定より小さく、石油ボイラーの煙突が過熱し、型枠が消し炭状になり、建てて三年目で全焼になった。子供三人が入浴中の事故で、裸のまま寒空に押し逃げさせた。明日は入学の日でもあった。一年後再建にこぎつけた。

仕事では、印刷所とデザイン版下製作事務所で写植オペレーターとして長期間就業してきたが、責任を持たされると夜間魂が出るのか、ギリギリ頑張ってしまい、ことに印刷業は、納期を重視するので、毎日深夜帰宅で午前様だった。

独立して自分でやるほかないと決断し同僚と有限会社を作り発足させたものの四ヶ月でとん挫させてしまう体たらくもあった。その後自宅を改造し、モリヤ写植を発足させ三〇年、今日に至っている。

## ■行く道に花があり、灯りあり

東高夜間部を卒業し、失聴しての失意後の上京、各地を流転したが、多くの方々に助けられながら、その時その時を力一杯出しきって、公私に活動出来たことは幸せだった。また、娘三人はそれぞれ嫁ぎ、孫八人となった。

幾つかの地獄も天国も見てきたが、人生は不思議に満ちている。故人となった方々を偲びつつ、あの顔、この顔と思い出しながら手を合わせ、どんな境遇にも負けない東高夜間部精神が助けてくれ感謝したい。

**行く道に花あり 灯りあり**

# 寮生活の記憶の断片

**吉田 誠治**（昭和35年卒）

私の奨学寮に入寮の切っ掛けになったのは寮生の炊事係が辞めたので代わりを募集していた事からでした。私は豆腐店に住み込みで働いて居ましたが伯父より紹介されました。その時は二年生になった頃と記憶しています。

私の仕事は寮生に朝食と昼の弁当の準備でした。製材の切り端のソッペと言う薪で飯を炊くのですが、生木のために燃えにくく困る状態で余りにも燃えず、そこで少々の石油を掛けて燃やしたところ、火傷をしてしまいました。幸い軽い火傷だったので仕事が終ってから、同級生の看護婦だった斉藤侗子様の好意で治療して頂いた事を未だ忘れる事は

出来ません。

終戦の復興も進み、また経済の発展の兆しに伴ってか、山形市内にも男子の私立高校も創立される時世には県内の遠方より山形に来ては働きながら定時制に入る生徒も少なくなって寮に入る生徒も少なくなりました。

此の様な結果から寮の経営も困難になっており、以前の様な風呂用の燃料の亜炭や炊事用の薪も充分に買えず困る様になる状況でした。そこで学校側では寮生を増員の為に昼間の生徒で遠方より通学の人を寮に入れる事になりました。その時の寮生は複雑な心境であったに違いありません。また寮生の食事を民間の業者に委託するようになりました。でも食堂は常に食べられる状態にあり、ラーメンやカレーライスが食べられる様になりました。それから昼間の生徒の合宿の時にはご飯を７升も炊く時は湯炊きと言う炊き方で湯を沸かしてから米を入れて炊くので失敗もなく、美味しいご飯となりました。

そこで私の脳裏にあるのは朝食と弁当の事ですが、3.5升程のご飯を二つに分けて朝食は当番の方で丼に盛って戴き、弁当は私が詰めて居ました。弁当を詰める時まで空弁当を出す決まりになっているにも拘わらず、詰め終ってから持って来る人もおり、空弁当を出すのを忘れている人もいました。

次に弁当箱も「まちまち」で先輩や後輩との言い合いをした事は今になっても忘れる事の出来ない思い出の一つです。

文章を綴りながらも寮生の顔が次々に浮かんではさまざまな出来事が走馬燈の如く思い出されるのですが、勉学に関することや寮生の勤務先の事、又寮費・寮監のことは割愛して戴きわたしの心にある実証だけを更に綴ってみたいと思います。

三年生になった時に先輩方から「吉田は日中に寮さ居るのだから」と寮長になってくれと言われて互選の形の選挙で当選して寮長の役を引き受けたのでした。寮長の仕事としては寮生の実家からの電話連絡や困り事の手助け位でした。大きい仕事には先輩の卒業祝いの会を開催した事を鮮明に記憶しています。

それから忘れることの出来ないことは後輩の青木亘君の突然の白血病による死亡で、私にとっては私の人生を変える出来事であったと今は思っています。葬式には同部屋の阿部昇様から御出席して頂いた事を覚えています。青木君の事が記憶から離れず、四十年を過ぎて会社を定年で辞めた夏の日に青木君の里の村山市大字岩野に伺った時はお母さんがお元気でお会い出来た事をとても感激して下さった事が、昨日の事の様に思います。

この様に寮生話の記憶の断片を記して寄稿出来たのは同級生の阿部昇様、中山良弘様の誘いがあってのことです。

最後に我が奨学寮は存在しなくなった今日、我々が生活して勉学した証は歴史となって末久しく寮生の心の中に深く刻まれて居る事を思いつつ東京同窓会の出版に寄稿出来たことを感謝申し上げます。

## 「卒業者」今を生きる

**池田 康子**（旧姓 黒臼）（昭和36年卒）

戦後七十一年 昭和十六年十二月の第二次大戦勃発まで遡る「自分史」等を書くつもりは毛頭ないが、このままではせっかくの私の貴重な体験もむなしく廃絶の、彼方に消えて埋もれてしまうのではないかと危惧している、という訳で、書かざるを得なくなったと云うのが本音である。

東京下町の防空壕で頭巾を被り、真っ赤な空を眺め、幼いながらも燃えて命が亡くなろう位は知っていた。

列車の窓から幼い弟、妹と共に乗るというより押し込まれ、母の故郷である山形へ疎開したのだった。田んぼ道を父親と二人、黙って船町の配給所まで家族五人分のコッペパンを貰いに行った。東北弁を使えないハンデキャップにあまり口を聞かない無口な少女になっていた。

私が中学一年に入学したばかりの春に父を脳の病で失った。山のあなたの空遠く、幸い住むと人の云う。盆地の山々を眺めながら、自然と親しみ、草花や木の実を愛しみ、「赤毛のアン」からシンデレラ等の本を読みふける夢見る夢子さんで育ったが、母子家庭と成った事で、必然的に、高校進学の希みは断たれた。唯一あるとすれば夜間部のみであった。しかし、交通手段のない田舎の道、夜に少女は通えない。

田舎の長老である世話人に頼って、母は「他人の飯を喰うのも本人にとって宜しかろう」という大人達の思惑に依って、工場を経営しているお宅へ住込みの従業員として働くことに成った。制服は、従姉が嫁家主であった「ティラー店」で最上質の紳士服の布地で作って貰って月末にて返済した。

食品工場の朝は早い、早朝５時にはもう機械を作動させているのだ、しかし、子供の頃より早寝、早起きが得意な私には、ちっとも苦にはならない。町での生活、ライフスタイルは至って便利だったからだ。

### 先生方の回想録

大場先生には二年も担当して頂いた。私は弟に比較して体育も駄目人間であった。弟の息子はリオ・オリンピックの五種競技の監督として赴いたが、私はというと、ウオーキングか水泳を自分なりにゆっくりやるのみである。それでも剣道やバスケットでの快感には味わえた。

英語の金子先生はとても美しい方で赤い口紅が印象的であった。ご結婚後に小さなお嫁様の件に触れてこんなことを話して下さった。

「あまりにも自分が潔癖し過ぎて、何かにつけて消毒ばかりしてきたから抵抗力が病原菌に負けて病気になってしまった。人間はある程度、菌に対して強く育てなければならないのだ」と。

生物の土井先生？間違えていたらご免なさい。当時の理系は化学も物理も必修だった。

現在は単位のみ、後の医療短大学入学のキッカケに成り、生物のみ４単位分の新宿の高校に１年間通った。

音楽の阿部先生は・・このお話は中山先輩に任せるとする。写真にも掲げて実存している。

図工は就職組の一貫として教わった。絵は大好きな私である。しっかりした製図はきちんとした文字で書いてある。中学時の青木新助先生の教えだった。

簿記や珠算は４級位迄で、３級は後から取得した。

高校生活は、雰囲気の大好きな生徒であった。学年別の皆勤賞は勿論、全学年精勤賞、皆勤賞も頂いた。

職場工の家、家族の方々、お父さんお母さん、二人の子息、従業員の方々は、皆、やさしく親切であり、いじめ等はまるで無い、通勤、通学の苦労等は一切無かったのであるから苦学生等と云えたであろうか？

夕方５時終了後に制服に着換えてグランド側から廻って入ると昼間部の桜井さんが、野球の練習をしていた。ある日は、工業高校のＴさんだったり、会えば懐かしかった。

学校と住み込み先の往復のみで、四年間、唯の一度もお茶を飲んだりして帰宅した等は無かったのであった。

大学は慶応大学の通信教育を選んだ、現在では、昔の様に一ヶ月とかを続けて職場を休まなくとも夏期や冬期に自分の良い単位分を選びスクーリングに通学すればよいからである。日吉か三田に通った。入学はたやすいが、卒業は超難関の何千人の中の卒業者、年三百人未満の一人に入り、塾員になれた事は、光栄であった。自分の人生を自分で選び、自分の為に、人生を生きようと決めたのだ。我が人生に悔いは無い。

小さな他愛もない趣味にコツコツと精を出し、先祖譲りのＤＮＡは、お人好しで、自分の事よりも他人を優先する性格は今も健在である。

後期高齢者、七十五歳の人生の幕開けでもある。六十才代の団塊の世代をお手伝いしている昨今でもある。

今年度の第九の合唱は、リニューアルした区のホールで歌う。

来春は３月に行われる、和（お能）と洋（オペラ）とのコラボレーションの練習となる。一日々を大切に残された人生を歩む積りです。『レクイエム』有難うございました。

今まで、関わって下さった全ての人々関係者の皆様に感謝申し上げ、これからも頑張って「生きる」私の人生には「苦労」の二文字は無い。小さい喜びにも自分が幸福と感じ、思えば良いのである。

## 今、想うこと

**伊藤 芙美子**（旧姓 渡辺）（昭和36年卒）

吹く風にも、春の気配を感じ、冷たい風に耐えて太陽の光をあびながら、道端にかれんに息づく草花にも、ほっとなごむ日もあり、雪の時

期通い続けた学校、通学に利用した機関車、石炭の煙やら砂が目に入ったり、いつも立ち通して乗っていた事や北山形駅から学校へ通う道すがら、遠いとも思わず通学していた事、今尚消えることのない自分の思い出として心に残っています。

久々に故郷に帰った時は記憶をたどりながら学校まで行った事などがありました。自分の人生、生きてきた証がいろいろな事がありながらも東高夜学に通った事がずうっと原点になっていると思いました。夜学で得た「しんぼう強さ」「頑張り」「友の事」など支えになっているような気がします。山形で暮らした頃、赤とんぼ、せみ、蛙、ホタルなど気にもとめていなかった事が年と共になつかしく思い出しております。

東高夜学に通って勉強した事、（成績は悪かったけど）ふり返り、こうゆう人生を生きれた事に感謝の気持が多いです、残り少ない人生大切に自分にとって意義のある時間を過ごしたいと思っております。

## 夜間高校を卒業して

**井上 健一**（昭和36年卒 ）

小生、昭和32年に山形東高夜間部に入学しました。クラスは３クラスあったと思います。父親は仏壇の彫師で、小学校６年生頃から、簡単なものを任されて彫っていました。中学校を卒業したら親父の弟子になり彫師になるような環境でした。しかし、職人では今後の自分の人生設計が出来ないなーと子供ながら思っておりました。昼の高校へ進学すること等無理なことは分かっておりました。でも、何とか勉強し高校卒の資格を得たかったのです。昼は、親父と並んで彫師の仕事をし、何とか４年間過ごすことができました。

思い出すと、冬場の通学では、現在のように道路の除雪等もなく、雪の降るときは大変だったなーと思い出します。

クラスの皆さんは、様々な仕事をもって、よく４年間の通学を果たし卒業証書を手にしたと思います。

当時のスタイルは、男性は下駄やデカンショを履き黒の制服で通学しました。今思うに、無いのが当たり前の時代、努力次第で何かを開発できるものが沢山ある。又作って行けるという時代だったと思います。既製品でなく、自分で作ったものを使うのがまだまだありました。

夜間の授業は、皆真剣でした。古い校舎で教室は､蛍光灯のもとでの授業でした｡売店があり、パンと牛乳があったと思います。それで腹ごしらえしました。

講堂があり、時々集会がありました。私はラジオ部に所属していたので、その都度、マイクやアンプの設置などをした記憶があります。

時代が進み昼間に勉強できる環境が経済的にも可能になったことは喜ぶことと思います。私たちの子供たちは高校。そして大学へなんとか進学し勉強も可能となったのです。でも、私たちが経験した不自由な状態での勉学で養われた精神的な訓練は、社会に出たときこんなことは普通のことと受け入れられる忍耐力が培われたと思います。

しかし、我が母校である山形東高夜間部がもう存在しない状況になり、その足跡もなくなってしまうことは大変残念なことです。

その存在は、今の東高校正門にある記念碑に書かれた、夜間部があったというその文字でしか確かめることができないのです。

世に出て大きな仕事をされた先輩たちに敬意を表するとともに、後期高齢者となった私も夜間部の誇りをもって世の中に少しでも貢献すべく残った人生を生きていきたいと思います。

## 「高校時代の思い出」

**寺崎 文雄**（昭和36年卒）

私は昭和三十六年卒です。今から五十六年前になります。高一年生の時、背も低かったし、少し鍛えてやろうと思ってバレー部へ入部しました。練習するのは、授業が終ってから約一時間位で、家に帰ると十時半位に成ったと思います。日曜日も練習しなくてはならない、入学して間もないのにすべての事を覚えなくてはならない。①仕事のこと、②学校での事、③部活の事、部活は毎日練習で部活をやめようかと思い四、五日無断で休みました。先輩達からやめるのか、やめんなーと言われ、もう少し頑張って見ようと思いました。一番思い出があったのは、真夏のむし風呂のような体育館での練習は汗が流れ落ち、その後、のどが渇き、水道の水がうまかったのは今でも忘れられない。コート一周のうさぎ跳びは最高にきつかった。この四年間、春休みと夏休みの時、バレーボールの指導してくれた先輩、有難うございました。はじめて同窓会に出席して五十数年ぶりで、その先輩の方にお会いしました、その方は平岡会長です、平岡先輩の姿を見るたび（バレーボール部）の事を思い出します。

## バドミントンOB会発足に思う

（昭和36年卒） **渋谷　忠雄**

昭和三十六年三月、卒業して直ぐ上京した僕にとって、現在もバトミントンに打ち込めるとは考えもつかなかった。東京大田区の本門寺近く第二京浜国道に面した大森総合光学㈱金属彫刻部に所属同期生八人と共に寮生活に入っても忘れる事の出来ないのが、在校時代のクラブ・バトミントンであった。

入学するとすぐ級友の沢口、車谷と西体育館に行き先輩達の打つ白いシャトルに取り付かれた。取りつかれたものの打つことの出来ない一年生にシャトルを与えるはずがない。一年、二年は時間のあるかぎりロードワーク、トレーニング等基礎体力つくりであった。たまに古いシャトルを打たせてもらった時の嬉しさは、口にあらわせない。全クラブが終わった後、新体育館の電灯をつけこっそりシャトル打ちし、用務員さんに注意され怒られ帰る時間が十一時過ぎであったことも再三であった。（今では決してできないだろう）三十年間続けたこのスポーツがなつかしく、余暇を作っては、大田区の中学・高校の練習を見に行ったものだった。

上京一年余にして一身上の都合で帰郷する事になった僕にとって待ちうけていたのがスポーツであった。昭和三十七年国体の時霞城の森に建てられた山形県体育館に勤務、施設の持たない高校クラブスポーツが入れ乱れ練習している姿を見て、いても立ってもいられない気持ちになり帰郷三ヶ月目にして、母校バドミントン部に顔を出す様になった。

その時の顧問菅谷純一先生と佐藤（和）、結城（四十二年卒、当時二年生）との出会いがOB会発足のキッカケでもあった。種々の試合に参加し、もう一歩という処で入賞する事ができなかった。「どうしてどこに敗因があるのだろう」誰しも持った疑問、反省点である。この様な体験を多少とも解消するため在学時代実践で勝ち得た良点、弱点等を検討し、精神的、技術的に援助すべくOB,OG会の結成の要望が持ち出された。本当に若い卒業生（四十二年卒）の母校バトミントン部に対する熱意に感動し、発起人として手塚公夫、鹿野テイ子と共に先輩、後輩を走り回り十余名から了承を得、昭和四十二年十一月稲荷食堂で準備会、当日即座に結成設立総会に踏み切った。これもひとえに影のアドバイザー純一先生、母校を愛し、バトクラブを愛した理解ある仲間のご尽力とご援助とに深甚の謝意を表しているところです。

この成果が、鶴岡大会で男女団体戦優勝の快挙をなしとげた。個人戦でも実力発揮、四種目中六人入賞した。その影には、技術のみでなく（故）佐藤一の歯痛をこらえての戦い、神藤京子の右肩腱鞘炎、第一戦での右ひざ強打負傷をついての戦い精神力で他校を圧した根性は立派なものだった。

年々卒業生も加入五十余名に成長した。OB会員一同、菅谷（純）折原（秀）両先生を囲んで年一、二回クラブ時代の懐旧談に花を咲かせ懐

かしい山東生時代の思い出話や、スポーツであたためあった友情が会員同士の心を固く結びつける絆となっている。

今なおバトミントンを続けられるのは、OB会があるからと感謝している。

## ＯＢ会の仲間たち

**手塚 公夫**（昭和37年卒）

本校では、昭和25年にバトミントン部が創設され、初代顧問 結城徳誠先生のもと、部員28名、部長は４年生の森崎幸雄先輩が任じ、華々しくスタートしたと聞く。バトミントンは金のかかる競技にもかかわらず、部費も少なく練習場所も狭く薄暗い西体操場が当てられ苦労した様だと当時を知る伊藤辰雄先生は振り返る。定時制総体にバトミントン種目が入ったのは昭和38年、私が卒業した翌年の事だった。満を持してこの時を待っていた後輩達は初年度男子団体優勝、女子準優勝の快挙を為し遂げ、更に翌年からは女子団体に五連覇、女子ダブルスに於いては七連覇と実に輝かしい成績を収めてくれた。時を同じくして、昭和42年11月我々はバトミントン部ＯＢ会を立ち上げた。42年卒業の結城・佐藤（和）の両君、中核となり会発足に向け奔走してくれたのが矢口（旧姓伊藤・35年卒）と渋谷（36年卒）の両先輩。設立総会は昭和42年11月26日。十日町角の稲荷食堂（現 ホテルキャッスル）に賛同者十三名。当時顧問だった菅谷純一先生を相談役にお願いしご指導とご助言を頂き会は発足した。（菅谷先生には西高に赴任されてからも特別会員としてご指導を頂いた。）会の目的は在校生の指導、支援並びにＯＢ会員相互の親睦を計ること。毎年在校生の指導に数名の会員が学校に顔を出し定体が近づくと少しでも新らしいシャトルでの練習が出来る様にとシャトルの差し入れを行った。大会当日には必ず何名かのＯＢが付き添い助言と応援を行った。夏休みになると在校生とＯＢ会員の親睦試合や合同でのキャンプや会員家族も混えた芋煮会など様々な思い出を作った。52年には七日町にあったプリンスホテルで十周年記念祝賀会。十周年記念誌発行。63年には教育会館にて二十周年記念祝賀会。二十周年記念誌発行。その間、56年の定体山形大会では大会運営の全般に携る事が出来、多くの会員が協力し汗を流した。61年１月あの元気だった菅谷純一先生が他界するという悲しい出来事があり、今でも思い出すと涙がこぼれる。

平成に入り時代はめまぐるしく変わり、12年には74年歴史のある定時制課程を閉じる式典もあり、新たに発足した霞城学園と名も形も変えて夜間中学時代からの歴史にピリオドを打った。そんな母校の変貌の中、ＯＢ会も存続か廃止かと意見が二分し何度も話し合いの場を設けたが、三十年も継続して来たのだから今後は会員の親睦会だけでも良いのではと、現状維持の意見が若干多数を占め、今年（創立49年）に至っております。

平成二十年には（当会四十周年記念の年）、同窓会事務局の方よりお誘いをうけ同窓会総会にＯＢ会だけのテーブルを設けて頂き、全参加者五十六人中、十一名が参加し、ＯＢ会の存在を先輩諸兄妹にアピールする機会を与えて頂き感謝申し上げます。同年には四十周年記念誌を当時の田苗会長（47卒）の手によって発刊され今、私の手元にある。田苗君は今でも山形県バトミントン協会の要職にあり、若手育成の一翼を担って活躍中。又、渋谷氏に於いては大病を患い不自由な体ながら、ジュニヤーバトミントンのまとめ役務めてくれている事を付け加えてペンを置く。

## 高校時代の思い出

**熊澤 コト**（昭和38年卒）

県立東高校夜間部、昭和38年度卒業、現在73歳、夫は３年前に他界、現在３世代息子の家族と同居、思考能力の衰えを感じている昨今、老骨に鞭打って書いています。

病弱だった父親は、私が中一の時亡くなり昼の高校には行けませんでした。担任の勧めで東高夜間部に進学することになり、昼は母校の図書館の司書助手や給仕などの仕事をして、夜、学校に通いました。睡魔が襲うこともしばしばあって、もう少し気合いを入れて臨めばよかったと反省しています。そんな中、購買部でのピーナツ入りのコッペパンの味と、学校帰りに友と食べた大福饅頭の美味しさは、何十年たった今でも忘れられません。

最終学年担当の伊藤先生は、人間味のある大好きな先生で卒業後も大変可愛がっていただきました。また、体を動かすことの好きな私は、体育の時間が待ち遠しかったような気がします。ある日、数人が大場先生の配慮で夜のプールで水泳の指導をしていただきました。外灯の明かりと、月の明かりの中での水泳は今までに体験したことのない異様な雰囲気を漂わせ、水の重さ暗さに恐怖を感じた思い出があります。様々な思い出の中で、一番印象に残っているのは、合唱部での部活動です。最初美術部にいましたが、合唱部の先輩達の強引なお誘いによって、私のほか５，６名が入部しました。毎日の練習で、阿部先生の指導のもと、歌うことの楽しさや、みんなで歌うハーモニーのすばらしさを知りました。先生はもちろん先輩達の歌の上手さは格別で、素敵な雰囲気の中、共に歌うことができました。コンクールでは県大会そして東北大会へと出場し、私たちの合唱部は上手かったんだなあと誇らしく思います。

結婚が早かった私にとって、高校生活は唯一の青春時代でもあり、とても充実した楽しい４年間でした。後悔することと言えば、もう少し真面目に勉強すればよかったなあと思っています。このような思い出が宝となって今、私は生かされています。これまでにいろいろな試練がありました。これからも出会うことでしょう。でもなんとかなるものです。

今は聖歌隊で歌い、パッチワークを楽しみ、家族の一員としての仕事も担いつつ、残された人生、一日一日大切に、感謝しつつ、生きていきたいと思っております。昔を思い出すこのような機会を与えてくださりありがとうございました。

## 良質な情報との出会いは、人生を根本から変えることがある。

**伊藤由巳**（昭和38年卒）

私が山形県を訪れたのは、寒いある日の夜だった。その夜は、小雪が深々と降り続いていたことを覚えている。気が付いたら24時間をかけて大阪から異国の地である山形に着いたのであった。

思えば、中学を卒業し上級学校を目指して合格したものの貧しい家庭では、ほとんどの者が就職するという状況であった。京都府の舞鶴という軍港の街に育った私は、食べることには不自由さは感じていなかったものの、学びたいという気持ちを抑えられないまま、大阪の庄内町(今は豊中市庄内となっている)にある市場の中の惣菜屋に集団就職をした。その市場には自分と同じような境遇の者が四国や中国地方から集団就職で集まっていた。そのうちの一人と友達になった。彼の父親は、海軍の兵隊だったこともあり舞鶴の部隊に配属されて我が家に寄宿をしていたというのだ。その彼から父親が山形の庄内地方の出であること、この市場と同じ名であること、山形の人々は勤勉で我慢強いなどと父親が話していたことなどの情報が得られることになるのである。とても新鮮に思われた。もともと、私の父は軍港にある造船所の軍属指揮官という立場であったと後々なって聞かされた。私は小学生のとき、尾花沢市(当時は町)に１年間疎開していた。そこで１学年を尾花沢小学校で過ごしたのである。彼の父親の勧めもあっての疎開であったらしい。

この情報があってから、家出も同然の集団就職で大阪という大都会に出てしまった自分の進む道がわからない悶悶とした日々が続くのであった。その結果が山形の地からの人生の出発点となることになったのである。

山形に着いてすぐに人を探しているという張り紙を見つけることになるのである。魚屋さんであった。そこで働いていた先輩の方が東高の奨学寮の食堂に食事の材料を毎日届けていると

のことだった。仕事で配達について行ったことが、アルバイト先や住むところまで次々とつながっていく事になった。最初の仕事は、東高の図書館で仕事があるという情報であった。そこで図書館司書という初めての仕事であった。続いて４月からは高校生として１学年から勉強を始められるという幸せをかみしめることになり、奨学寮にも入れてもらえた。

山形東高等学校という何とも言えない嬉しくもあり、響きの良い言葉に大満足の毎日であったと記憶している。昼の仕事も辛いことはなく寮から通う夜の時間も待ち遠しく感じられた。学校生活では音楽部に所属し合唱コンクールでは県大会で優秀賞にも輝き、充実した学校生活を送ることができた。

仕事も、ある人から情報をいただいたことで、放送関係が希望であったことが叶い、現在の人生に深く関わることになっている。その後においても、長く勤める事になった県庁職員の仕事も、ある人からの情報が決め手となって応募の切っ掛けになったのであった。さらに、大学を卒業できたのも先に入学していた先輩の優れた情報によるものであり、人生の後半での民間企業からのお誘いも全て様々な人々から頂いた情報が基になっているのである。その時々の優れた情報との出会いによって歩む方向が決まってきた様に今強く感じているところである。山形東高等学校夜間部同窓会東京支部への加入、そして全くお役に立てないであろうところの支部長への就任と中山先輩の突然とも言える情報との出会いで私の座右の銘としていた「優れた情報との出会いは人生を根本から変えることがある」を実践していると思っているこの頃である。

私の人生は全て人様からもたらせられる情報との出会いによって根本から変わってきているのである。

山形東高等学校夜間部での人生が、優れた情報との出会いによって始まり、そのことが年老いた現在の我が人生を根本から変えることができたものと深く感謝している。皆さまの素晴らしい人生と健康の持続を祈念して筆を置きます。

## 思い出

**佐藤 忠男**（昭和39年卒）

勤労学徒、夜間生等々、世間からは非常に苦労して夜学に通い勉学に励んでいる生徒達と呼ばれていた。入学の事情、動機は、人それぞれであり決して全員苦労して勉学に勤しむという程ではなかったとおもわれる。

それは私自身二年も遅く入学し、この山東夜間部しか入学させてくれる学校は無かったのだと合格に感謝し張切った。二年、三年遅れの入学者は各クラス四～五人は当時いた。押し並べて成績上位にランクされていた。本来なら卒業する年代であり、二～三年のブランクは大きかったが、何となく同級でありながら、先輩面が出来る心地良さもあり気持ちは常に明るく夜間の暗さなど無かった。

クラス対抗の体育祭、駅伝等々規模は少ないながらもイベントも普通高と同様の経験が出来たし、四年間の学生生活は楽しい部分が多かった。

しかし、放課後の柔道場で稽古の先輩から思いっ切り畳に叩きつけられるのが何とも悔しくて情けなかった。同じ年度入学したクラスもずうっと一緒だった二人で話し合って入部した柔道部であり四年間在部した。今でも昔話することがある。良き友達である。夜遅くまで練習し、夏期合宿をして定時制大会へ出場する等々苦労より、よく耐えたものだという達成感の方が大きかった。

「不撓不屈」山東高の精神を当時は履き違って、このような肉体面にだけ重ね併せていたのである。

卒業後、当初からの目標であった地元の中小企業専門金融機関に身を置く、四〇年間勤め上げる事が出来ました。職を離れて十五年様々な場面に出合う度、山東高精神「不撓不屈」を繰り返し乗り切った。もちろん上司や部下の協力が無くしては語れないのである。

今思うに、夜間部時代の二年というハンディ、社会人では三年のハンディ、周辺の皆んなに追いつき、追い越すというハンディにしては大きかった。

これらのハンディは高校時代から背負ってきたもので、要はこの分だけ若い気持ちで頑張ることにした。

三十数年来のゴルフも「不撓不屈」の精神を宿しつつ、未だシングルハンディ目指しているのだが・・・。

## 私の高校時代

**斎藤 照雄**（昭和41年卒）

私が卒業してから52年前の思いです。昭和37年４月に150名が入学いたしました。昭和41年３月に125名が卒業する事が出来ました。私の１年のクラスは１組で英語の斎藤先生でした。入学した時は右も左もわからなく、昼は仕事、夜は学校、授業の時などは眠くなるし、ただ教室にいるだけだった様に思います。家に帰るとすぐ眠ったものでした。クラスの人々の職業や年齢も違う人が一緒になって仲良くガンバルクラスでした。

私は友達と計画を立てました。それは卒業の時にもらえる賞の事です。勉学では優秀賞はだめだから、４年間の皆勤賞をもらう計画を立てました。私は４年間で一日休みましたが友達はみごと一日も休まず皆勤賞をいただきました。私の学年で皆勤賞は６名で精勤賞は10名ぐらいいたと思います。すごいガンバリ屋の学年でした。

クラスの絆を強くするのはクラスマッチではないかと思います。私は４年間バトミントンに出まして４年間優勝いたしました。

私の部活は１年、２年と自動車部に入りましたが、部員数の多さにはびっくりです。車はトヨタのトラックでクランクを回してエンジンをかけるのですが自分の番にはなかなか回ってこなかった思い出があります。

２年の時にクラス替えになるのです。私は３組に、担任の先生は生物の渡辺先生です。私は２年の時に仕事も代わり先生も代わり気持ちも不安定な時期でした、その時の仕事が退職まで44年間続ける事ができました。

３年生になると何といっても修学旅行です。場所は北海道へ６泊７日です。南は函館から北は網走までです。泊ったのは船に２泊、汽車に２泊、宿に２泊の強行群の修学旅行でしたが思い出がいっぱいつまった楽しかった思い出です。北海道は広く、大きく大自然の所です。今でも修学旅行の事がなつかしく思い出されます。

４年生になると卒業、進学、就職の事、それに４年間辛く苦しかった事など皆んなと別れる事、一人一人が自分の道を進む事になると思うと不安でいつまでも一緒にいたい気持ちです。クラスは別れを惜しんで絆を強くし卒業する事ができました。４年間で学んだ事､仲間の事など、良い経験をすることが出来て今の自分がいるのだと思います。

私のクラスが還暦の年から毎年クラス会を開いています。中には亡くなった方もおります。亡くなった方を偲び、思い出話や近況報告などで大変盛り上がっています。

担任の渡辺先生はとても元気で健康については、自分たちの手本になる先生です。秋に男子は馬見ヶ崎川原で先生を交えて芋煮会を開催しています。話が弾み時間が足りないくらい盛り上がり旧交を温めています。参加した皆さんがまた会える日を楽しみにしています。

## 心のふるさと我が母校永久に

**寒河江　政好**（ 昭和４１年卒 ）

「昼に働き、夜に勉強の苦労人」私が山形県議会の選挙に立候補した時の、ある新聞の紹介記事でした。しかし、４年間本当に苦労した苦学生だったのだろうかと、思う事が多い。昼の会社は山形交通で、バスやハイヤーの整備部門。夕方４時３０分には、どんなに忙しくも仕事を切り上げ学校へ、４時間の授業が終わると、中学から続いた野球をやった。さすがに深夜までの練習はきつかったが、バレー、バトミントン、柔道など遅くまで皆な汗を流していた。

一年生の時、いつものように練習後、自転車

で帰路についた、いつもなら４０分の道のり。その日は途中でパンクをしてしまった。自転車を引いて帰る羽目に、家に着いたのは、１２時を大きく廻っていた。おふくろが心配そうに起きていた。その時の顔が今も忘れられない。夜学に通わせたことを母なりに後悔しているようだった。そんな事を思わせることが悲しかった。また、足のできものが腫れて歩くのもつらい時があり、夜遅くに帰る辛さを感じた日もあった。また、試験が近づくと、勉強の時間が取れない事が悩みで仕事中に会社のトイレの中で、準備したメモを何回も読み返した。会社の会議室を借り同僚と二人で徹夜の試験勉強を、眠気覚ましの薬を飲みながら頑張った事も思い起こします。少なくとも、私には夜学に通う環境としては、恵まれていたなあと思い、夜間部での大きな苦労はあまり感じなかった。

夜間部に通う人は、仕事も、年齢も、環境もみな違いながらも、それぞれが夢と希望を持ち、一生懸命に勉強をし、また生きていた。私達同年代の中では、昼の高校に通う人より、遥かに大人であり、しっかりした考えを持っている人が多かったと思う。

私は、４４歳の時、皆に押されて山形市議会の議員になった。その後４８歳で山形県議会議員に当選し、２０年間地方議員として働くこととなった。東高夜間部で数多くの人との出会い、その一人一人が苦労人であり、他人への思いやりがあることは、私の議員活動の大きな原動力になりました。「一人の人を大切に」私の議員活動のモットーとしてまいったのも、一人ひとりとの出会いからであった。県内のドクターヘリの就航や乳幼児医療費の無料化推進（現・子供医療）の取り組みもこのモットーから生まれたものです。

「定時制課程が無くなる」事が、決まった事を聞いた時は、大きなショックを受けました。当時、単位制高校が全国的に進んでいました。私は先進地を視察し、私達が学んだ夜学魂の精神が引き継がれる学校を山形に造りたい。昼の部、夜の部、通信の部と、定時制の魂が入った学校が霞城学園高校として山形駅前に開校した。東高定時制の閉校式では、涙が止まらなかったが、霞城学園高校には大きな期待を寄せている。今、優秀な人材が輩出されていることを聞き、喜びに堪えない。

## ４年間の思い出

**田中 憲一**（昭和41年卒）

文集の寄稿を恩師の渡部先生より話があり、依頼されたものの、卒業して51年（半世紀）が経ち、自分の頭も「まだらボケ」になった今日、どの様な事を書いたらよいのか迷ったところです。当時の資料等は、職場での異動等により転居もあったので、ほとんど残っていなかったが、僅かに当時の写真があったので、それを見て思い出しながら書こうと思った。（写真はモノクロであり、時代の流れを感じた処であった。）

また、この機会に学校（定時制）の成り立ちについて調べたところ

・1948年（昭和23年４月１日）
　山形県立山形第一高等学校発足
　定時制普通課程（夜間）と通信教育部を併置
・1950年（昭和25年４月１日）
　山形県立山形東高等学校（現校名）が発足（高校再編により）
・1974年（平成９年４月13日）
　定時制課程、通信制課程の新規募集を終了
・2000年（平成12年３月31日）
　山形県立山形東高等学校定時制課程と通信制課程を廃止

と記載されていた。戦後まもなく創立され、昭和から平成へと引継がれ50数年余りの歴史を造り、廃止された事に一抹の寂しさを感じる処です。

そして、その50年余りの歴史の中での４年間過ごした学校生活を思い出し（なにしろ卒業して51年で記憶は曖昧）ながら、その一部を紹介してみたい。

昭和37年４月新入生として入学、１学年３クラスで１クラス40名程度であった。

入学してまもなく、在校生（２年～４年生）との対面式があり、新入生を代表して挨拶をさせられたが、全校生の前で、しかも、当日に指名され緊張と恥ずかしさで何を話したのか思い出すことはできない。只、我々新入生の男子は殆どが「いがぐり頭に学生服」女子は「制服」姿、それに対し、先輩方は長髪、そして学生服は着ているものの、いかにも「社会人たる風格」で堂々とした姿で威圧を感じた記憶がある。

入学して２年、学校生活にも慣れ友人も出来てきた。小中学校とは違い、多くは市内各地から、中には市外からの方もおり、職場もそれぞれ違い、話題も多く、夜遅くまで時間を忘れて過ごした日々だった。

また、その頃「学校給食」が始まり、給食は授業と授業の合間で、コッペパンと脱脂粉乳という簡単なものであったが、昼働いて夜学ぶ中でのひと時は、楽しく美味しいご馳走であった。

３年生になると、初めてのクラス替えとなり、新しい友も増え、生活リズムにも慣れ、充実した日々を送る事が出来たが、職場の都合で、３ヶ月間教育の為、仙台へ行く事になり休学の様な状況になったが、関係者の方々から色々と配慮をいただき何とか進級出来た事を感謝している処であります。

そして、最終学年の４年生（この学年が一番充実して楽しい思い出となっている。）思い出すのは、北海道への「修学旅行」、当時は本州と北海道は線路で結ばれておらず、山形より青森まで列車で行き、そして、青函連絡船で北海道へ渡る行程。洞爺湖・登別温泉・阿寒湖等３泊４日の日程での旅行だった。その中のエピソードとして旅行当日、職場の同僚から「これを旅行に持って行って」と紙袋を渡された。途中で何だろうかと紙袋を開けて見たら、なんと「缶ビール」数本入っていた。まさか列車の中で飲むことも出来ないし、可と言って捨てる訳もいかず困っていた。そんな時、青函連絡船は夜出港だったので、友達を誘って「缶ビール」を持ち、船のデッキに出て処分（飲んで処分）しようと思って２人で飲んでいたら、なんと、後ろに一緒に同行していた先生が立っており、「何をしている」と声を掛けられ、びっくりして「ビールを飲んでいる」とも言えず、隣の友人共々飲みかけの缶ビールを知らぬふりをして船の上から海に落とし、何食わぬ顔で「海の空気を吸っている」と言った事を覚えている。（夜の為、赤ら顔が見えなかったのか、それとも分かっているのに知らないふりをしてくれたのか？）そんな事を体験しながら楽しい旅行としての思い出がある。

また、４年生で「遠足」もあった。行く先は「山形空港」で県内初めての空港として、昭和39年開港し、連日大勢の見学者で賑わっていた。当時はプロペラ機（フレンドシップ）の発着で目の前で見る飛行機の大きさには驚き、感激した事が記憶にある。

その他、色々と思い出は尽きないが、授業では睡魔との闘い、中間試験や期末試験における一夜漬けの勉強、職場では半学生・半社会人としての制約等あり、「働きながら学ぶ」という定時制高校の本来の姿は厳しさも数多くあったが、今思えばそれらも懐かしく、授業が終わってから友との語らいや、休日で友と一緒に過ごした時間等つらい事より楽しい事の方が多く思い出される。

この４年間の学生生活は、良い師、友人に恵まれ、自分にとってかけがえのない貴重な人生の一ページとして、頭の中に残っており、この学校で学んで本当に良かったと痛感している。現在も恩師を交えた同級会や芋煮会、そして、日常での交流が続いており、これらを大切にこれからも出来る限り継続していきたいと思っている。

## 定時制に学んだことを誇りに思う

**斎藤 武弘**（昭和42年卒）

いま思えば懐かしく、机に向かって原稿を書いている。良くぞや、四年間、一日たりとも休まずに、学校に通学したものだなあーとつくづく感心している。私の住んでいる地域は山間地であり、山形東高等学校までは約九キロの道程を、自転車で通学しました。当時は現在のような立派な舗装道路ではなく砂煙が舞い上がる砂利道でありました。

そんな毎日でありましたが、幸いにして昼の職場環境に恵まれたこともあって、どんなに忙しく仕事をしていても、同僚や上司からは、必

ずと言ってよいほど、「もう四時過ぎた学校に行く時間だぞ」と毎日のように話をかけてくれたことでした。

学校は楽しかった。その一つは同じ環境の中で学んでいる級友と会えることでありました。授業が終わり、一応は部活をもやったのですが、長続きせず退部することになりました。

また、試験が近づくと勉強の時間が取れなく学校帰りに友人宅（アパート）へ泊まり込んで互いに勉強したものでした。時には一晩中話し込んで勉強にならないこともたまたまありましたが、一応は勉強したものでした。

今思えば昼間の職場環境にも恵まれ、学校では、級友にも恵まれあまり苦労と思わない夜学生活であったと思っております。

夜学生は、それぞれ希望を持ち、夜は一生懸命に勉強し、昼は社会人として働き、人としての営みを教えて頂きました。まあ手前勝手ではありますが、同年代の中では、昼の高校に通う人よりは、しっかりした考えを持っている人が多かったような気がします。

そして教えられたことは「他人のために尽くす人になれ」でありました。

私は、四十九歳の時、私の住んでいる地域に、市議会議員がいなくなってから早や五年もなり、「何とか地域の為に働いてくれ」と地域の皆様より懇願されましたが、自分はサラリーマンの身、右も左も分からない政治の世界に入っていくことはものすごく不安でした。妻に話をしたら、私は政治家に嫁に来たのではないと反対、私の心には政治家の願望はあったのでしょうかね、相談する父は他界されており、母に話をしてみるに、母は「自分がやりたいと思ったらやって見たら」と背中を押され、今まで勤めていた職場を退職し、五十一歳の春に立候補を決意し、初当選の栄を勝ち取ることになりました。現在は五期目を務めさせて戴いており、地方議員として十九年間お世話になっております。

東高等学校定時制課程では、多くの人と出会い、思いやりのある苦労人である級友、その教えが、今、私の地方議員としての原動力になっております。思いのまま、綴って見ましたが、同窓生の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

# 心に残る、私のふるさと

**後藤 勝義**（昭和42年卒）

私は山形県のほぼ中央にあたる風光明媚な寒河江市で生まれ育ちました。

冬の天気の良い日には、半月状で真っ白な月山が輝いて見えます。近くには朝日連峰の山々を源流とする最上川の支流、寒河江川が流れています。春にはサクラ鱒、夏には鮎、秋には鮭が遡上する、冷たく澄んだ水のきれいな川です。

小さい頃、夏休みともなると川釣りをしたり、遅くまで水遊びをして親に迷惑ばかりかけている子供でした。

冬には近所のマタギに勢子（せこ）にかりだされて足にカンジキをつけ、近くの山々でウサギを追いまわすこともありました。

童謡「ふるさと」を実践していたと思います。良い経験をしたと今では感謝しております。

山形県では、全国的にサクランボが有名ですが、他にも私の故郷では、ラ・フランス、種無しぶどう・りんご・桃など多くの果物が採れる盆地があります。近くをフルーツライン左沢線というローカル線が走っています。また、道の駅チェリーランドもあり、県内の物産を常に販売していて大変にぎわっております。

## ぜひ、「ござっしゃい」

現在の私の楽しみ。登山、ハイキング、岩魚釣り、山菜採りなどを年中行事みたいにして自然に親しんでいますが、これらの原点はやはり子供の頃に経験、体験したことにあるのではないかと故郷の思い出と共に感じております。



# 私の高校時代

**後藤 勝義**（昭和42年卒）

## ＊仕事をしながら

私が中学卒業前、コックになる夢を持ち、山形市七日町にあったとんかつ屋に住み込みで働く事が決まっておりました。そこの主人がこれからは高校を出ていた方がいいよと勧めていただき、山形県立東高等学校夜間部に入学しました。私はそこで働きながらコックの修行をしておりましたが、２学年の終わりころからもっと勉強をしたいと目覚めコックを断念、３学年から奨学寮に入寮、担任の中川先生から昼の仕事として、ＮＨＫ山形放送局（当時、緑町の馬見ヶ崎川土手沿いにありました。現在山形駅近くに移転）を紹介されました。夜間部からは何人かの女性も働いていました。私は寮から職場まで、昼間の頭の良さそうな方々の通学とすれ違い、その中には、あこがれた弓道部の女性徒もおり、毎日ウキウキしながらの通勤でした。

仕事は各公共機関（県庁、裁判所、警察署等々の記者室）につめているＮＨＫの職員からのニュース等の話題を電話の通話で書き取る仕事でした。当時はファクスも無く、このようなやり方でニュースが流れていたんだと思い、今考えるとかなり原始的なやり方で報道されていたのだなあと思った。特に困ったことは固有名詞です。城下町の町名（山形市・米沢市等）は難しく大変でした。また記者さんの早口、私の書き込む字が下手なことも有り、この字は読め無いと時々、デスクから注意されたことを思い出します。地方放送局ではニュースは３分～５分で話題が２本ぐらいしか入りません。デスクがこの時間内に入るよう校正し、その後、デスクの横でアナウンサーが下読み、時間を調整しスタジオに走り込む様子が今でも目に浮かびます。４学年の10月ごろNHKの仕事を辞めましたがコーヒーとケーキで送別会を開いていただき、感謝しております。私はNHKを辞めた理由は大学を目指そうと考え、受験まで半年間しかないけれど、勉強を頑張ろうと決心、実家（寒河江市下河原）から通学しながら県立図書館、学校の図書館で受験のための勉強しました。今まで勉学のできる環境ではなく、熱心に勉強してこなかったことで何から始めればいいのか分からず戸惑いがちでした。翌年受験、無事渋谷にある國學院大学二部に合格しました。働きながらの勉学（４年間）はまだまだ続きます。しかし、自分の将来の事と考え、頑張りました。

## ＊寮生活

私は３学年から１年６ヵ月間奨学寮にお世話になりました。４人部屋住まいで入り口ドアを開けるとすぐ両脇に二段ベット、全面窓ガラスの前に４人座れる椅子と勉強できる机がありいたってシンプルな部屋でした。寮では朝食と夜食を出していただきました。朝は納豆と生卵が日々交互に出ました。御飯と味噌汁は食べ放題でした。日中はいくらか忘れましたがうどんを販売しておりました。昼の学生がよく食べに来ていました。特に部活の帰りに食べる人が多いように思われた。私も時々たべることがありました。若い時は腹がへるものです。

私はある日の夜、風呂からあがり、のぼせて頭から星が出て、意識がなくなり廊下に倒れてしまったようです。どのくらいの時間か覚えていないが、（この間、誰も通らなかったのか？）自分で起き上がり、部屋に帰った記憶がある。私はこのころ、時々疲れると貧血で倒れることがありました、現在は元気です。

寮にいるとある程度勉強をやる時間もあるし、いろんな事も経験できました。秋になると昼の文化祭がありました、日曜日だったと思いますが、グランドで西高の女性徒と一緒にフォークダンスをやっておりました。（東高は女子生徒が少なかったので、西高にお願いして来ていただいたのかも？）私達何人か寮生も参加し女性徒と女性徒の間に入り込み踊った思い出があります。その頃、私はまだ女性の手に触れたことが無く大変感激した事を思い出し、この事は甘ずっぱい青春時代の一ページです。

## ＊クラブ活動について

私は小学校３年の頃から兄に連れられて剣道をやっていて高校に入るとすぐ剣道部に入部した。昼働き、夜９時半ころまで勉学、住み込みで、

帰っても、とんかつ屋だったのであとかたずけ等、仕事が寝るまで続きました。たまに剣道の練習をして帰ると遅いと叱られたことも有った。剣道をやっている事は店に内緒でした。気を付けますとあやまりましたがその後も度々帰りが遅かったので、剣道をやっている事がバレました。このことも有り、店がだんだん嫌になり、コックの夢半ばで辞めることにしました。

私は中学まで剣道２段を取得しており、練習は初めての部員もいたので、みんなに教育する立場でした。４学年の時、山形県定時制大会で団体優勝、個人戦には各学校から２名出場して高橋君が優勝し、私は３回戦で敗退した。学校に凱旋し講堂の壇上にて全校生から大拍手で歓迎され大変感激した事を思い出しました。また、夜間部１学年から４学年まで各クラス対抗体育大会が毎年実施しており、３年の時我がクラスが何と全校で一番の成績で総合優勝いたしました。この時はクラス全員が一丸となりまとまりました。各種目のリーダーを決めて望み、私は水泳リレーのリーダーで２位になり、又、私のクラスは沼の辺周回駅伝にも出場し優勝しました。

私は体が丈夫なのか、仕事に問題なかったのか、４年間一度も休まず皆勤賞でした。卒業生全体で皆勤賞は10人程度いたと思います。卒業式の時、皆勤賞ともう一つ賞を頂きました、山形県定時制・通信制振興会賞です、記念品は名前入りの置き時計でした、私が何故貰えたのか考えますと、文武両道＋皆勤賞との兼ね合いでだと思います、これも大変感激した一つです。

### ＊半年間の通学の経験

私は４学年卒業までの半年間、（冬の間）実家から通学した、左沢線寒河江駅から家まで４ｋｍ程あり、冬の道歩けば１時間位掛かります。当時、母が時々、運転で寒河江駅まで迎えに来てくれました、母には苦労をかけ、感謝しております。母は88歳で亡くなりました。雪のひどい時は家まで歩きで帰りました。０時過ぎる時が多かったです。その当時は雪が多く、特に吹雪の時などは前があまり見えなくて、寒いし大変でした。

私は通学時、山辺駅から通学していた一年生だった女子学生が素敵に見えいつも近くの席に座り、本などを読むふりをして声をかけるキッカケをねらっていました。時々チラッと見て胸が高鳴った事がたびたびでした。ついに卒業まで声をかけることが出来ませんでした。名前は解りましたが当時の想い出として心にしまっております。青春でしたね!!

### ＊卒業後

大学卒業後も就職先で働きました、当時、高校出てから東京都品川区五反田（山形市宮町出身の社長）の会社に就職、そこから渋谷の大学に通学しました、42年間65歳までお世話になり現在に至っております。妻は高校の同じクラスで共に勉学に励んだ学友で東京に来てから付き合い結婚しました。二人の息子を授かり、孫（女の子）が一人出来、幸せな毎日を過ごしております。

私の青春時代は良き時代でした、特に夜間時代はいろんな事を経験し、感謝しております。書ききれないことがまだまだありますがこの辺でペン（コンピュター）を閉じることにします。

## 高校の思い出

**林谷 静子**（旧姓伊藤）（ 昭和42年卒 ）

私のふるさとは山形県仙山線山寺駅一つ手前の高瀬。映画ぼろぼろの舞台となった所です。里山で育ち春は田植え、秋は稲刈りを手伝ったものです。稲杭に稲を掛け自然乾燥にこだわった父母の農業でした。農業は定休日もなく暗い、寒いイメージでこれ以外の職業に就きたいと子供心で思っていました。最近は家庭菜園なるものが人気でテレビ等にて特番が組まれ、田舎暮しがブームになっているようです。37年勤務した公務員生活で健康づくり事業の一環として町民農園の事務局をしておりました。利用しておられたあるお父さんが買った野菜の３倍位費用がかかっているがおいしさは格別といっておられたことを思い出します。退職後は知人より100坪程の畑を借り家庭菜園を楽しんでおります。実家の母が自宅裏畑で多種類の野菜を作っていました。それが私の原風景として田舎の風景が今も残り私達団塊世代の親は、子供達への食糧調達には一生懸命でした。屋敷内で放し飼いをした鶏、たまにしか生まない卵一個を３人の子どもで三等分した卵かけご飯、小麦を植え麦踏みをし小麦粉を臼でひく、豆を植え味噌を作った。自宅周囲には数本柿の木が植えてありこれは干し柿にして冬場の貴重なおやつでした。羊を飼い毛を紡ぎセーターを編んでくれ寒さをしのぎました。すべて自給自足だったのですね。２つの小学校から入学する中学。中学生になったら勉強では一番を目標に（２校が集まるので優秀な方がいっぱいいる事考えなかったので目標達成しないまま卒業）運動部部活。バレー部に入部（９人制､外でのコートです。次の目標はレギュラーになることです。団塊世代の競争社会の始まりです。運動をする習慣がない時代です。プールにはアオミドロが生えていました。水泳の授業などもちろんありません。当時は外のコート、暑い日も水分をとることが許されず辛かったが、部活にのめりこんでいた。中央大学卒の外部コーチは回転レシーブ等最先端の指導をしてくれたのだったが、霞城公園内外での中体連では一回戦で敗れ部活はあっけなく終了しました。あとは受験勉強と張りきったが、しかし三人兄弟の一番上しかも女、下には弟二人。同級生達と同様普通に高校を目指して行けるもんだと思い込みをしていました。勉強は好きでしたし多少自信もありました。ある日親から高校には行かせられないと言い渡された。進学できない理由の説明もなかった。納得できなかったが受け入れざるを得なかった。私は当時山商の制服に憧れていました。しかし昼の高校へ入学することはかなわず、親を恨む毎日でした。当時の職業担当の先生から定時制高校があり住み込みで働ける職場も紹介していただきました。希望の明かりがほんの少し見えました。高校の資格が理由もなく欲しかった私は東高すぐ近くの内科医院に住み込みで就職しました。朝は６時起床、日中医院の手伝いをし午後５時近くまで働き軽く食事をして高校に行きました。自分の環境が恵まれていることなど気づきもせず、衣食住揃い学校までは徒歩５分と最高の環境でしたが、医院の娘さんは東高（昼）西高の優秀なお嬢さんと自分を比較しみじめな思いでおりました。四年間も通学できたのは友人たちの励まし合ったからこそと思っています。高卒の資格は絶対必要と思いテレビは絶対見ないと心に決めていました。春には隣工業高校の満開の桜に慰められましたが、授業を受ける頃日中の疲労が出てきて毎晩寝ていました。しかし同級生は元気があり個性豊かな、行動的な人ばかりで大いに刺激を受けました。夜間照明がついたグランドで体育の授業ソフトボールだったかな、楽しかった思い出のみ。医院が休みの時は実家に帰らず勉強をして過ごしました。部活は音楽部。今思うと看護助手的な仕事、血圧測定、薬の調合、診察介助、諸検査、レントゲン検査等なんでもしていました。医院での経験が看護師を目指すこととなったのです。なぜか県立中央病院に検査の実習にも行きました。とても親切な指導でした。患者さんの診療明細書を手書きで記入し国保連合会に毎月持参する事も毎月でした。今でしたらパソコン入力で印刷までできるという時代ではなく、すべて手書きでした。楽しみなのは学校のパンと牛乳だけでしたが給食は本当においしかったです。胃腸科内科医院は入院設備もあり胃潰瘍で治療中の患者さんが入院しておりました。患者さんとの会話の中で、学費も高くなく看護婦（現在は師に名称変更）になれる学校があるとの情報を得て早速看護学院に行き入学に必要な履修科目の確認、願書一式もらい受験勉強を始めました。担当の教官より頑張ってみればとの温かい励まし言葉を素直に受け取り受験勉強を始めました。もし定時制高校では難しいと言われたら頑張る気力も出なかったかもしれません。現代ではインターネットで調べるなんてことができるが、当時は何もなく、ただし苦手な英語は長澤卯一先生に授業後に指導していただきました。すごく力になりました。生物等科目によっては丸暗記と精いっぱい頑張りました。20人に100人の受験者５倍の倍率に挑戦しました。人生で一番ラッキーだったことは山形県立高等看護学院に合格できたことです。高校が夜間であったがコンプレックスも徐々に消え、看護師、保健師と４年間学び（公務員として３７年勤めることができました）勉強時間が圧倒的に足りず入学者の中で最下位の成績であったことを知らされたが自分なりに頑張ったので自分をほめました。成績の順位は昼の高校を卒業された方達よりずいぶん劣ってい

たようでしたが、やる気満々だったのが良かった。何とか県立の看護学院に合格しここから新たな人生が始まりました。高校を卒業出来た事は私にとってものすごく大事なことでした。看護学院で４年間学び幸い親に教育費を出してもらい町役場に就職し定年まで勤務。60歳から定年後ケアマネジャーとしてパートで働いております。気持ちは高校時代のまま。暗くなったグランドでソフトボールの試合。部活は合唱部に入り楽しみ、教室でねむりながら勉強したこと、住み込みで他人の中で生活し辛くて親を思い泣いた事等思い出いっぱいつまった楽しかった４年間の生活でした。高校２年の時の東京オリンピック、夏の夜は西高の生徒さんが東高のプールに部活で来ていました。いつか自分も泳げるようになりたいと憧れておりました。40歳からスイミングスクールに入り現在も健康づくりのため泳いでいます。中学時代のバレーボールは子供の小・中学校で学年対抗の試合があり選手として貢献することができました。

今現在年金をもらい安定した生活を送ることができるのも高校時代他人の飯を食べ苦労したことが良かったことだと思っています。大事なことは目標、希望を粘り強くあきらめないで、他人の話にも素直に耳を傾け協力をお願いしながらやってきたことでしょうか。

2020年東京オリンピック、高校２年の時体育の結城先生がみんな見ておくべきだと熱くかたっていたのを思い出します。できれば女子バレーボールを自分の目で見てみたいと思っている今日この頃です。

追＝高校時代は自分達より年齢が上の方、個性的でキラキラし、親切な人達と出合えたことが宝物となっています。

## 私にとっての山形東高校 感謝する事

**滝田健司**（昭和42年卒）

思い起こすのは、入学時のときかな、ほとんど母と一緒のときなどなかったのだが、入学式に母親と一緒に校門に入ったのを鮮やかに思い出される。その母は現在96歳となったが元気でいる。当時働きながら学ぶ、一見格好良く見える言葉だったが本人にとってはちょっと落ち込みがちな定時制高校であった。しかし、今思うと、本当に良かったと思う。山形市桜町にある老舗の会田商店という酒屋さんで、住み込みで働くということである。人間的にすばらしい店主「会田泰雄さん」にお世話になったことでした。人柄の良い、優しく、面倒見が良い、ご主人であった。食事も家族と同じ美味しいものを頂けました。貧しい家庭で育った私にとって食事は天地雲泥の差であった。私の人生でもっとも感謝しなければならない恩人である。

また「鳳雛よ、未来に羽ばたけ」との哲学を、ある先輩から教えていただいた事である。これが私の進むべき、最大のジェットエンジンとなっている。

また英語の教師金子先生に出会ったことも良き思い出である。卒業してから何年も立ってからでしたが、山形からお餅を送っていただいたことなど未だに忘れられない事である。

それから40年も過ぎ去ってしまったが、印刷で独立してから、どういうわけか深瀬さん（昭和29年卒）が会社にお見えになり、10数年以上の付き合いとなる。切っても切れないお付き合いである。その間、独立した会社も時代の波で倒産に追い込まれてしまった。多くの人にも迷惑をかけてしまった。ご恩返しをどこかで返さなければならない。

普通、高校に深くかかわることは余りないのが普通だが、深瀬さんとのつながりで、だんだん山形東高校のＯＢ、さまざまなすばらしい人たちとのお付き合いが深まってきたのである。昼間部同窓会の会合にも参加するようになり、ますます交流と絆が深まって行くのである。私はとっくに定年も過ぎ、69歳である。

### これからの人生

私の夢は、どうしても過疎化していく古里の限界集落「寒河江市田代」の復活を目指したい。それは大げさになるが少なくとも、集落がなくなることをくい止めたい。そのためにこれから山形に戻るというのである。ほとんどの人がこの集落を去っていこうとするこのときに何を血迷ったかと思われるだろうが、私は活気あふれる地域にしていきたい。

機を得たのか、地方創生と言う行政の力もあり、田代小学校の閉校後、平成30年にこの校舎をリニューアルし、ホテルを開業すると言うので地域全体も盛り上がっているかと思う。

これを機会に何でもある、何でも出来る小さな町づくり、スマートシテイの実現である。しかし、何事においても多くの人の協力を得られなければ実現できるものではありません。しかし弁護士、ITを極めた人、建築士、大手旅行会社の会長を経験した先輩、日本最大手の保険会社の社員、世界的な有名デザイナー、東京芸大出の歌手、霞ヶ関で活躍する官僚、政治家、この人脈と地域の人たちと和をもって実現する戦いが必要である。東京都と山形の交流する事が最大の効果を作ることかと思う。このために私は行動していきたい。

## 山形東高等学校定時制の思い出

**菅野 幸治**＝旧姓：篠原（昭和43年卒）

中学校の先生から定時制高校に進学することを勧められ、住み込みで働ける職場も紹介していただいた。駅前通りにあった薬店で店員として働き、仕事は主に品物の配達、返品する荷物の荷造り等だった。「バイクの免許を取ったら。」と勧められたこともあったが、４年間市内を自転車で走り回った。天気の良い日は快適だったが、雨の日は雨合羽を着ているので鬱陶しかった。夕方５時になると学生服に着替えて、自転車で新築西通りを通って東高に向かった。授業は６時から９時まで、先生方は熱心でしたが生徒は仕事の疲れで居眠りは避けられなかった。部活を終えて店に帰る途中、凍った雪道で滑って自転車ごと転んだこともあった。学校からの帰り道、星空を見ながら「見上げてごらん夜の星を」を歌ったのも若い時の思い出だ。

店に帰るのが10時過ぎで、それから夕食だった。今考えると、店のご家族には大変な面倒をお掛けしたものだ。当時のご家族５人の内４人は既に鬼籍に入れられましたが、存命の方とは今も交際させていただいている。本当にお世話になりました。

ただただ感謝あるのみ・・・。

## 高校時代の私へ

**田中 育子**（昭和43年卒）

中学卒業したら就職と決めていたあなたでしたが、ある方の助言もあり、進学を決意しましたね。合格はしたものの仕事、学業、両立していけるか不安でしたね。でも、大丈夫安心して、４年間あなたは、良く頑張りましたよ。ちゃんと卒業したからね。辛い職場から学校まで５、６分。家も近かったからね。

部活は中学でもやっていたバレーボール。授業が終って、９時30分頃から開始、帰宅は１１時頃だったかな？ 寝静まった家に帰ったね。でも、翌朝は、お母さんの味噌汁に元気をもらったね。

あっそうそう入学したのは、昭和39年、東京オリンピックが開催された年でしたね。バレーボールの「東洋の魔女」の決勝戦はたしか学校で応援したよね。あなたは勉強も頑張りましたね。何せその頃は成績の順位が廊下に張り出されたもんね。今そんな事したら大問題。そんな訳で、仕事、勉学、部活に明け暮れる毎日。でも嫌だと思った事は無かったね。

休日はよく映画に行ったよね。「サウンドオヴミュージック」は、今でも大好きだね。

それから、それから、・・・まだまだ思い出があり過ぎて書ききれないよね。それは大事に胸にしまっておきましょうね。

何事も一生懸命、無中で過ごした、かけがえのない高校時代だったね。これからもあなたには、色々大変な事が待っているからね。頑張っ

てのり切って。

さて、今のあなたは、元気な67才だよ。安心して。卒業して歯科衛生士として働き良き仲間と出会いました。26才の時、同期の田中君と結婚しました。二人の息子、二人の孫の、歌が大好きなおばあさんになりましたよ。そのおかげで、毎年２月に両国国技館で開催される「墨田区５千人の第九を歌う会」に毎回参加しております。東京の皆様、良かったら聴きに来てけらっしゃい。

山形の花笠踊りも毎回参加し踊っていますよ。そういう訳でまだまだ色々あるでしょうが、死ぬまで元気でいましょうね。

今回こうした機会をつくって下さった皆様に感謝。ありがどさま！

## 私の学校生活

**田中 政人**（昭和43年卒）

私は、39年に東高夜間部に入学しました。一年の時には応援団に誘われ入部、二年生の時には生徒会役員選挙に出て当選しました。又、部活はバレー部に入り、頑張りました。

９時から11時過ぎまで練習、県大会前には12時過ぎまで練習でした。その甲斐があって三年間連続で優勝しカップを学校に置いてくることが出来ました。あの時の優勝カップは今どうなっているのか見てみたい気持ちです。

一番楽しかったのはやはり修学旅行です。京都、大阪、四国など楽しんで来ました。そんな大変な学校生活も充実した四年間で楽しく元気に過ごせた事が一番です。

あれから50年経ちましたが今でも懐かしく思い出せます。

## 「お世話になりました」

**星 明広**（昭和43年卒）

社会情勢は池田勇人の所得倍増・ベトナム戦争・東京オリンピックの時代でした。手に技術を持てば食べていける思い、しかし高校を出ておかないとの思いで夜間部に入りました。夜間と言う志が同じ仲間なので皆なと気が合い勉強・部活に一生懸命取り組みました。バスケ部に入り県総体・定時制大会等に参加しました。

授業が終ってからの練習は校舎の電気が消されるまで続き、真暗闇の中、手探りでロッカーで着替えをし家に帰りました。また、モータリゼーションの始まりで自動車部が出来、そこに顔を出し運転免許を取り、いまだに無事故無違反です。

中学の時から山登りが好きでしたので、太田光之助先生・山田精徳先生・山岳部の方々と県内の山を登りました。夏の合宿で朝日縦走登山は特に心に残っています。

仕事は家業のハンコ屋で昼間部の人には負けたくないと思い仕事も頑張りました。しかし、30才代・40才代位まであの4年間の事をよく夢を見ました。「まだ卒業でないのか、まだまだ１年あるとか」学校が辛かったのか、早く社会に出たかったのか、４年間の時間の長かったことを思うと、あんなに先生・先輩・後輩にお世話になったのに、なぜあの様な夢を見たのか今でも考えています。でも本当に有意義な感動の４年間の夜間高校でした。

お世話になりました。



## 山形東高夜間部を卒業して

**松田 信道**（昭和43年卒）

山形県立東高等学校夜間部を卒業してもう50年に成る。早いもんだ、などと言っている場合では無い年齢に成った。いや、人生は70才からだ、と自分に、そして70才前後の方々に申し上げると、「そうだ!!」と皆さん元気に成る。さて、夜間高校生時代及びその後等を書いて提出してみようと思います。

昼働き夜学校。一般的に「苦労したんだねえ。」と言われる。が、苦労と思った事は無い。

仕事も学校も初めての事ばかりで、それはそれは楽しいのである。なぜそうだったのか？

今、あらためて考えてみるが、仕事では、三浦社長さん初め、仕事仲間の皆様が素晴らしい方々ばかりだったからだ。学校もそうだ。柔道部に籍を置いていたのだが、国語の先生で柔道部の顧問の佐藤巌先生は、柔道の父、嘉納治五郎先生、姿 三四郎の得意技「やまあらし」？ついて「松田、おれも出来るよ、こういう技だよ。」と教えてくれた。英語の菅谷先生・数学の山田先生。書ききれないので失礼します。仕事も同じだ。三浦社長さんから「高校卒業しても、うちに勤めろ」と言われていたし「はい」と言っていたので一年生の時には、卒業後の就職先が決まっていた、素晴らしい会社であった。三年生の終りの頃、東高昼間の生徒から大学や企業等の進路先の資料を見せてもらった。ほとんどの生徒は、大学進学であるが、企業の求人もあった。その求人の山形の会社であったが、その求人案内の最後に「夜間卒業生は除く」と言う文字を見つけたのである。一社だけでは無い。目を疑ったが、大きなショックを受けた。昼と夜では、学力等の差はあると思うが、「冗談では無い。許せ無い。夜間高校卒業生を高校卒業と認めて無いんだ。」と思った。大学に行く事にした。日本大学夜間部だが、行って本当に、心から良かったと考えている。全国から海外から仲間が来る。母から「山形にもどれ」と言われ、戻ってきた。東高夜間部が霞城学園高等学校に成った。野口教頭先生（当時）から、夜間定時制の先輩として、「手伝え」との事で、いろいろな分野の方に、10人？程、おりましたが、生徒の方に、先生方の会合、ふれあい等で、お手伝いをさせて頂いた。

自分が高校生の時にも、霞城学園にお手伝いさせて頂いた時も感じた事ですが、「生徒達がおとなしいなあ」と思った事だ。夜間、定時制の我々は、高校一年生から働き、勉強する。昼間の生徒に学力は負けると思うが、一生懸命さには、絶対負けない。大学、国家公務員、日立製作所、ホンダ、三菱銀行等々一流処にも挑戦して欲しいのである。我々、夜間、定時制卒業生は、昼間には負けない。出来る。

後輩の皆さん、『我々は出来る。』

## あれから50年

**板花 孝幸**（昭和45年卒）

### あの頃僕も若かった

昭和41年 ４月 ９日
　昭和41年度入学者（男106・女67 計173名）
昭和41年 ６月30日
　ザ・ビートルズ日本武道館で講演 このころエレキブーム最高潮
昭和41年 ７月 １日
　郵便料値上げ（葉書７円・封筒15円・速達50円）
昭和43年12月10日
　３億円強奪事件
昭和44年 ７月20日
　米アポロ11号月面着陸・帰還に成功
昭和45年 ３月 １日
　山形東高等学校第20回卒業（男 91・女65 計156名）

先日、中学校の同窓会で松島に行ってきました。あのころ昭和39年、中学２年の10月東京オリンピックが開催され、カラーテレビが普及し

明るい明日が感じられていました。

しかし、貧困のため進学できない仲間が沢山いました。それでも頑張ってあれから50年、明るい笑顔で50%位参加しました。感動しました。

中学を卒業すると突然、西村山郡西川町の山奥から山形県の都、山形市で生活することになり、パニック状態。言葉・乗り物・ビルディング・商店・服装等何もかもビックリでした。

何も知らない田舎者が東高の寮に入れて頂き、自分の住む場所が確保されひと安心したのを鮮明に覚えています。朝は納豆と卵が毎日日替りで太陽が西から上っても変わらないと教えられ自然と理解しました。

夜間部なので日中は勤務先で働き（初任給１万円）少し早めに寮に帰り、急いで夕食を済ませ目の前の学校へ。同級生と今日一日の出来事などを聞いたり話したり、授業の合間に情報交換が楽しく明日への希望につながり、登校するのが楽しかった事を思い出します。

寮でも同じ環境の１年生～４年生が各部屋に１人づつ居り、先輩後輩のあるべき姿を身をもって教えて頂きました。しかし困ったことが起こると先輩が自分のことのように親身になって対応してくれ、今でも忘れられません。私の人格・性格がこの時期に出来上がったように思っています。

私は本当によき時代に生まれました。生まれた時は食糧難で貧しかったことも有りましたが、日々良くなり右上がりの社会で、昨日より今日・今日より明日・今年より来年と夢を実現できる本当に幸せを実感することができました。これも高校卒業証書を預け、昼仕事をし、早くから社会の在り方を知っていただけたことだったと思っています。

時の流れは速く、東高夜間部は無くなり、寮も無くなり、景気が悪くなり不安な今日ですが「良きことのみを想い、悪しきことを思わず」生きていこうと思います。

## クラブ活動の思い出

（昭和49年卒）**小梁川枝子**

私が山東夜間部に入学したのは、昭和45年4月、設立されたばかりの衛生看護科の第一期生としてでした。

衛生看護科は准看護婦養成所との連携教育で、登校日が週三日と少なく、又女子ばかりのクラスであり、一期生であったため、普通科とはかけ離れた存在のように思われました。週三日登校ということは、何かと不便なものでした。

クラブ活動もその一つです。高校入学した当時は、クラブ活動への意欲もあり、張り切っていたのですが、中々難しい事でした。授業終了が八時五十分で、養成所の寮の門限は十時。学校から寮まで歩いて約二十五分。そうすると、実際の活動時間は、三十分もなかったのです。着替えもそこそこに走って帰る日もありました。そんな状態が続くと、次第に億劫になり、クラブへの足も遠のき、いつしか名ばかりの部員になっていました。

入学当時の意欲も消えたまま、二年、三年と過ぎていきました。

そして四年に進級して、どのクラブに入ろうかと迷っていた時、クラスの陸上部員に「部員が少なくて困っている。名前ばかりでもいいから陸上部へ入ってくれないか」と誘われ、名前ばかりでいいのならと入部したのです。ところがクラスに熱心な陸上部員がいて、その人に、「高校最後の年だしクラブやっていこう」と誘われ、断れることもできず、イヤイヤながらも走っていくようになりました。しかし、走ることがとても苦しくて、ここで休んでしまおう、もうダメだと思いながらも、どうにか皆についていけた時の喜びが、思いっきり汗を流したあとの爽快さ、夜風の快さが、いつか私を真剣にしていました。定体があるからと、走り幅の練習もする様になりました。記録は伸びなかったけれども体も軽く、気持ちまで軽くなってくるのでした。そしてむかえた定体の日。

高校生活四年目にして始めて大会なるものに参加する恥ずかしさ。場違いの様な気がして落ちつきませんでした。走り幅には十人くらいいたでしょうか、四年生は私一人だけだったと思います。とにかく早く終わって欲しい。そんな事ばかり考えていました。



それでも、自分の番になると、少しでもいい記録を出したくて力いっぱい跳んでいました。

そして、想像もしていなかった、一位の賞状を手にすることができたのです。今まで縁のなかった陸上に接して知った喜びとともに入学当時の意欲を思い出し、クラブ活動をさける事ばかり考えていた、二年、三年の時の自分を悔やんでいました。

卒業後、進学し、講義、病院実習と忙しい日々の中で、時折グランドの砂場を見ては山東のグランドで夜遅くまで練習していた頃をなつかしく思い出しています。

## なつかしい夜学時代

（昭和50年）**西田恵美子**

昨年は東高創立九十周年を在学中に迎え、感激の至りでしたが、今年また夜間部の創立五十周年を東京の空の下でから、もっと身に近く感じてなつかしく思い出しています。

衛生看護科の二期生として入学し、今年の三月に卒業しました。入学当時は、「定時制」と言うその言葉に、授業を受けるときだけでなく、学んでいる先輩達もきっと暗い感じに違いないと思いながら学校の門をくぐったものです。けれどもそんな心配とは裏腹の明るさに驚きました。「ああこれならやっていける」そう安心したのを覚えています。

夜の勉強とはいえ、高校生活が送れるということがうれしくて、昼に看護学校へ行くときよりも胸がはずむ私でした。校歌や応援歌、生徒歌を覚える為、下校時よく夜空を仰ぎながら大きな声で歌って帰ったことも、今考えてみるとまだ幼かったのかなと思います。一年三組から四年三組に至るまで環境のよい教室で学びました。春は中庭にある桜を眺め、夏は木造の校舎なので涼しくすごし、秋はまた教室いっぱいに差す夕陽に照らされ、冬はあのなつかしいだるまストーブを囲んで話に夢中になったものでした。あのような環境の中で学べるのは東高以外ないのではないかとさえ思います。昼、勤務をやってきて机に向かいガクンとなって目が覚めたとか、先生に名指され、ハッと立ち上がるなどほんとうになつかしい思い出です。

私は四年間一日も欠かさず登校しました。それはあの教室が好きであの机が好きだったからのように思います。冬などは少々寒さが身にしみたこともありましたが、鉄筋何階建ての校舎よりも木造の校舎が暖かく感じられました。クラブを終え、執行部の仕事を終え学校を出る頃はもう人通りもまばらでした。その中を同じ立場の人たちと、クラブの事や仕事場でのことを語り合いながら帰るなど夜間部ならではのことです。たまにアイスクリームを食べてお店のおばちゃんと仲良しになったり、大判焼きのおばちゃんに「大変ね、頑張りなさい」と励まされたり、心を暖かくして帰ってきたこともとてもなつかしく感じられます。

おばちゃんといえば給食のおばちゃんにも思い出があります。四年になって補習が始まった時、火曜日は登校日でなかったため、この日補習日であるにもかかわらず給食はありませんでした。他のクラスが食べ終わった頃に「おばちゃん」と行くともう牛乳とパンを用意してくれているのでした。いつも待っててくれるおばちゃんに何かお礼がしたいとねと言いながら、何も出来ずに卒業してしまいました。おばちゃんごめんね。

担任の中川先生にはほんとうに太るひまを与えませんでした。一年生の頃マジメ、二年生ほとんどマジメ、三年生やや休む人目立ち、四年生では進学やら仕事やらで先生をなやませました。悩ませた私たちの唯一つの誇りはクラスマッチの卓球でした。あれだけはみんなの心が一つにまとまった楽しい思い出です。

家を離れると親のありがたさがわかるとよく人は言いますが、私はこのことばを東校にも感じています。クラスマッチにしろ、勉強風景にしろ一つ一つが鮮やかに浮かんできます。

共に笑い、共に頑張ったこと。「こんばんは」私の心の中から離す事が出来ないでしょう。私の「青春」は東高の内にあります。先生がなつかしい。教室がなつかしい。友達がなつかしい。そしてその中にいた自分がなつかしい。ああ、もう一度東校で勉強がやりたい、あの頃に戻りたい。そう強く思います。

もう夜間部が創立してから五十年もなるのかと自分の年を二倍してもまだ足らない数に驚きます。そしてその中で学んだということに誇りを感じます。私の青春イコール東高といっても過言ではありません。いつまでも木造のままであって欲しいと思いつつ・・・。

## 高校時代

**井上 信彦**（昭和58年卒）

卒業してかなりの年月を経過しているが、４年間の学生生活が懐かしく思い出されます。

冬になると、教室の窓に雪が吹き付けられ、真っ白くなり、まどからすきま風が入ってきて、とても寒かったのを覚えています。ストーブの近くだけが温かく、少し離れると冷え冷えする教室で勉学に励んだ姿が浮かんできます。教室の電気も薄暗く、さらに寒く感じたような気がする。ただ春になると教室の窓辺に満開の桜が、美しく咲き誇り、勇気と元気をもらいました。

４年間、自分たちを支えてくれた先生方には、大変感謝致しております。仕事を終えてからの授業で、疲れている自分たちを励ましてくれたり、時間が過ぎてからも授業をやってくれたり、温かい心で応援していただき、さらに頑張れる力になりました。

部活動においては、野球部で全国大会に出場することができたことが一番の思い出になりました。山形県大会を勝ち上がり、奥羽大会は岩手県において、岩手県代表校と対戦して、九回裏で同点に追いつき、延長十回にサヨナラ勝ちを収め、晴れの全国大会に進出することが出来ました。全国大会は、プロ野球ヤクルトスワローズの本拠地、及び、大学野球で有名な神宮球場で行われました。テレビで見ている球場のグランドに、今、自分がいるのが夢のようであった。観客席がとても大きく、試合前の練習では、地に足がつかないとはこういう事かと実感する位緊張していました。対戦相手は広島県代表の三原高校でしたが、相手の練習を見ていると、まるで緊張していない姿に驚きだった。結果は善戦及ばず、５対３で敗戦しましたが、個人的には３塁打を打つことが出来たので満足感がありました。スコアボードのチーム名に山形東の名前があるのを見て、すごくうれしく、誇りに思ったことを覚えています。

昼働き、夜勉強し、そのあとの少ない練習時間の中で、ナイターの光に包まれながら、ナインとボールを追った姿が今でも鮮明に浮かんできます。

東高の４年間は、自分のその後の人生においてとても大きな力になってくれました。色々な曲面を迎えても、東校における、勉学と仕事の両立ができたことが、大きな力になってくれました。

東高校に入ってほんとうに良かったと思っています。有難う、東高校。校歌にある、国家の運命雄々しく負はむ、を胸に今後の人生を全うしていきたいと思っております。

## わが人生に悔いなし

**安斎 富久男**（通信教育部昭和36年卒）

ゴールデンウイーク中に松田哲夫君より第一回目の電話がきて、「仲間が文集を作るのだそうだが、お前の事を書きたいのだが・・・」と問われ、「いいよ、何でも書いてくれ、後で俺にも見せてくれればね」と応じたもの。ところが後日また電話がきて「原稿を出してくれないか」と言うではないか。「俺の願いは拒絶しないだろう」と最初からふんでいた様だが、こちらも心の中で「俺も書いてやろうか？」と言わなかったのに、心の中を見透かされていた様な気がしてなりません。すぐに了解した次第。中学時代の同級生でしたから。

二年くらい前に、突然、松田哲夫君が現れ、「今晩泊めてくれないか」と言われ、妻亡き後、一人暮らしをしている事も承知なのにこう言って泊りに来たのを断れず、「他人なら絶対駄目だが、お前ならやむを得まい」と泊まってもらった事がある。その晩、勿論、飲み交わし、二人の人生を語り合ったが、二人共に「まあまあの人生だったな」と考えが一致したのを記憶している。高校（山東通）、大学（法政大学通）と最初から最後迄、通信教育で勉強し、卒業し、どういう訳か、全く考えていなかった高校の教員（商業科）となって三十五年間勤務。高校時代、最初は体を害し、気がついた時には、三～四年で小生を除いて、ほぼ全員がそれぞれの高校を卒業。「何でこんな事に、チクショウ！」とおいてきぼりにされ、悔しがったのを今でも忘れる事ができない。

父が戦死、母の手一つで育てられたが、その母も右肩の骨を手術していて肩から上は腕は上がらない体。中卒とは言え、男と女の違い。最初から父と同じように何でもやらされた。そんな家庭環境だった事もあり、通信教育の道を選んだ。時あたかも、ソヴィエトで人工衛星が打ち上げられ、「山形市周辺で六反歩の小百姓ではもう食ってはゆけないのでは？」と将来を見据え、秘かに「何か他の職業」を意識するようになっていた。幸い勉強は嫌いではなかった。だから高校、大学と十年間も勉強は続けられた。松田哲夫君にも勉強を教えてもらった記憶があるが、何を習ったかまでは覚えていない。もう退職して年金暮しも十数年が過ぎた。「若い時に苦労したのだから老後は勝手気ままに」基本原則。いつ迄、スキー（蔵王、今年は五回）ができるか。好きな歌を月二回を目標にカラオケで二時間歌いまくる。「あー嫌になったと」言っては仕事を投げ出し、釣りに出かける。年に何十回行くだろうか。今年の釣果は今一つだが・・・。毎週水曜日の夜は英会話の勉強。（これはもう三十年になる）その他、茶飲み話に誘ってくれる人が何人かいて、順番に行かせてもらっている。また、株式投資ももうやり始めてから五十年近くになる。まだまだやり、楽しむ事が沢山ある。命絶える迄、人生を楽しむ日々です。

### ◎小生のライフスタイル

特別な事がない限り、毎日午前中、山形市八森（東北芸術大と西蔵王のテレビ塔の間、テレビ塔寄り）へバイクで登る。目的は、冬はボランティアで除雪、春～秋は野菜作り、池で魚を飼育する。産卵から嫁にやる迄。（鯉、鮒、金魚、もろ娘、どじょう）だから山を眺め、池を見て、野菜を育てるための作業をします。但し、トラクターは入らないでもらっています。スコップ一つで体を動かす＝適当な運動をしています。魚を含めて生産物は八～九割は他人にくれてやります。山形市江南にも自分の畑があり、そこには午後（これからは暑くなるので夕方から）出かけます。

### 最後は松田哲夫君へ一言

お前が風呂敷包一つで横浜に移り住んで行った後、俺は非常に落胆した。泣きはしなかったが・・・。一人の親友を失ったと思っていた。これ迄、こういう事を一度もおまえに言った事はなかったけれども。しかし、これ迄、遠く離れてもお互いの心は近くにあった様に思う。この秋（多分）一泊～二泊する時にこの件についても語り合おうではないか。二人だけで思う存分語り合おう。過去、未来についてもね。

五月十日、突然に俺達の文集に出してくれと言われ、すぐに取り組み、日頃思っている事を纏めてみました。「枯れ木も森のうち」と申します。駄文（枯木）悪しからず。

## 「通信教育」での学習過程とその後

**児玉 吉弘**（通信教育部 昭和32年 第３回卒業）

家なし親なしの兄弟２人は叔父と伯母の家に別れて中学を卒業した。

「高校は金が無いから遣れない、坊さんになる覚悟があれば、松島の瑞巌寺で、高校、大学と出して貰える道がある・・」と言われたが、「お寺は嫌い・・」と断った。それで高旭鉱山の所長の処に、先生と叔父と一緒にお願いに行き、漸く分析課に採用された。理科と数学は得意だったので、鉱石を粉末

にして、化学薬品で分解して、成分を定量分析する仕事は性に合っていた。

しかし暫くすると高校に行けない焦りは強くなった。そしてまた先生に相談に行った。そこで「通信教育制度」が山形東高に出来たことを知った。早速手続きして入学した。担任の先生は後に山形第四中学校の校長になられた鈴木勉先生です。若い時は熱血漢で、恵まれない生徒程面倒を見て呉れた。

私は猛烈に勉強した。鉱山の宿舎は６畳３人制で、「電気を消せ・・」と言われ・・電気スタンドを買って勉強していると、今度は鉛筆の音が「煩い・・」と言われ、押入れで勉強した。少し単位も取れて、周りが見えてきた頃、「通教」だけでは高校は卒業出来ないと知った。言いようも無い孤独と絶望を感じた。

それなら化学薬品を運んでくる薬剤師に、「勉強したら薬剤師になれるか・・？」と質問した。「先ず大学を卒業して、国家試験に合格する必要がある・・」と言われた。「ダメだ・・。他に良い道がないのか・・？」

そうすると意外なところから道が開けた。それは国家試験「電気主任技術者」だった。之は独学で勉強して受験できる。しかも鉱山はこの資格が必要で、資格を持った電気課長が変電室にいるではないか。この課長に色々、勉強の方法を聞いた。「ピタゴラスの定理とか、因数分解とか知っているか・・？」聞かれたので「それは得意です。」と言った。「うーん」と沈黙されたが、「しかし、何をするにも高校は卒業した方が良いな・・」と言われて我に返った。「とにかく高校の教科は沢山あるのだから、単位を取っていれば必ず朗報はやって来るだろう‥」と思った。

それから一層勉強に精を出した。２年も過ぎた頃「通信教育だけで高校を卒業出来る・・。」との朗報が入った。「やった、やった・・」と万歳した。最初の年に１名卒業した。翌年は大泉光一郎君ら４名卒業した。大泉君に逢いに行って祝福した。しかし大泉君から意外な言葉が返って来た。「卒業を急ぐあまり、大事な科目を外したのが悔やまれる・・」と。その不得意な英語を外そうとした自分に、強い警告となった。「よし英語をやろう・・」幸い中学を出たばかりの英語が得意な後輩が分析に入って来た。私は「化学」を教え、後輩からは「英語」を教わった。この後輩は、後に寒河江高校に入学した。幸い私が習った「通教」の小関守之助先生がこの頃、寒河江高校で校長となっておられ、色々目をかけて頂いたとのこと。そこで「化学」授業の助手として働き、福島県立医科大学の医学部に合格し医師になった。この後輩は早坂晃一君です。今でも山形市内健診センターに所属して医療活動に当たっています。４年前に奥様共々お会いし、昔日を懐かしく語り合った。私はこの後輩のお陰で、英語も高校３年の過程までしっかり勉強出来て単位も取ることが出来た。その翌年、昭和33年３月16日、９名は定時制と合同での卒業式となった。私と河北町の高橋文子さんと２名は安孫子県知事から「知事賞」を授与された。ラジオ報道され朝日新聞にも記事が出る処となって、その後続々と卒業生が続くこととなった。３つ違いの弟も続いて卒業した。私達兄弟は漸く高校を卒業することが出来ました。支えて下さった皆様に感謝を申し上げます。

弟はその後、東根市役所前にテナントビルを建て、そこで長男夫婦と共に印章店を営んでいる。

その後私は北海道下川町のサンル鉱山に転勤となった。電気主任技術者の受験の為に旭川から札幌に向かう当時の国鉄車中で、電気の本を開いている30代の人に声をかけたところ、何と安孫子知事の甥子さんだった。北海道電力の社員で電気主任技術者Ⅱ種の受験に行く所でした。私は大変助けられ、札幌の北電寮に３泊させて頂き３日間の受験を無事終了出来ました。昭和35年暮れの12月29日に漸く「合格」の通知を受け取った。この年は４月に待望の長男が生まれた年でもあった。家内とこれで鉱山とお別れし東京に出られると近い将来への希望を語り合った。

私は、高校卒業の資格と電気主任技術者Ⅲ種の資格を携えて、昭和39年１月４日、27歳で東京の管理会社に入社した。会長は京都大学の法学部を出た人で、「一灯園」で修行している人でした。大変厳しい指導者でしたが、幸い私は、社内誌「ともしび」に「苦しければ苦しい体験談」と、「やり遂げた時は素直に喜びと達成感」を書き続けた。それが会長の目に留まり「面白い青年がいる・・」と経営者人材として抜擢された。係長、課長及び部長等階段を踏んで、早稲田、中央、明治及び法政等の大卒者と共に、否応なしに全国各社のオーナー代行（専務）として任に就くことになった。そして45年間勤務し、71歳の暮れに役職を全て退任した。翌年には、お陰さまで３回目の家を立て替え、長男夫婦と２人の孫と６人家族となった。次男家族も近くに住んでいて、常に行き来している。そして仏画を習い初め、ボウリングクラブに入会し、図書館に通い青年時代に読めなかった世界文学や日本の古代史を静かに読むことが出来る幸せを味わっております。

皆様、本当にありがとうございました。 合掌

山形の光景

# ああ我が紅顔

第 1 回卒業生（昭和五年）

山形東高同窓会

山形東同窓会

蛍雪之碑

蛍雪会

浦たひ憩息也

山形県人東京連合会総会

10.20 浜名湖かんざんじ荘

2006.10.18

山形東高同窓会

**編集後記**

何とか多くの協力者の方々のお力で文集が出来上がりました。この間、なんでこんなに時間がかかるのか？・・・とご叱責も頂戴しました。それは弁解がましいが、課程を閉じてあまりにも多くの時間が経過してしまいました。

特に専門の編集委員会があるわけでもなく、有志が奮闘して作業に当たりました。又投稿者の皆様から、ここをこう直してください。直して、直して・・・の修正要望も多く寄せられ、ようやく今回の発刊の運びに至った次第です。しかし、それでもまだまだ不完全なところがあるかも知れませんが、ご容赦頂き、この文集を通して沢山の素晴らしい卒業後の人生の生き様を教えて頂きました。まさに珠玉の如き文章がちりばめられていることに対して、すべてを忘れて､凄いものが出来たぞと叫びたい気持ちです。多くの皆様のご協力ありがとうございました。スタッフ一同感謝申し上げます。

なお、多忙の中多大な時間を割いていただき校閲に協力して頂いた吉田良吉様、深瀬せつ様、丹野弘三様、後藤勝義様には厚く御礼申し上げます。　　編集責任者　滝田健司

東京同窓会夜間部が復刻した書籍


## 閉課程 18 周年記念文集

2018 年 11 月発行

山形東高夜間部同窓会
発行責任者　深瀬守巨　☎ 04-7153-1875
編集責任者　滝田健司　☎ 080-8038-0919
印　　刷　音羽印刷株式会社
東京都新宿区東榎町 10-3
Tel 03-3268-1440
Fax 03-3268-5263